

相原古墳群

そう ばる


福岡県宗像郡宗像町大字河東所在古墳群の調査報告

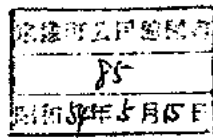
宗像町文化財調査報告書第1集

1979

宗像町教育委員会

宗像市教育委員会
社会教育課
文化財担当

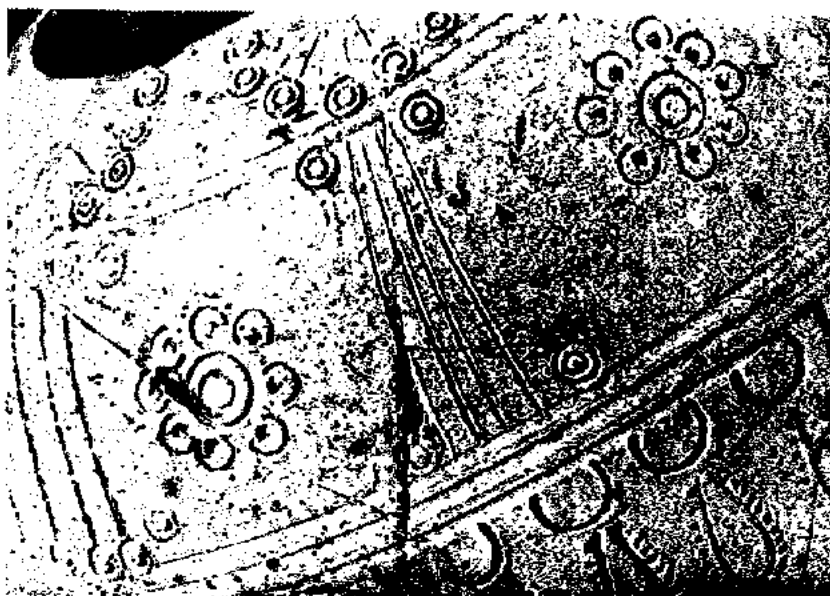
No. 
1155



相 原 古 墳 群

福岡県宗像郡宗像町大字河東所在古墳群の調査報告

宗像町文化財調査報告書第1集



第2号墳出土土器胴部紋様

1979

宗像町教育委員会

序

相原古墳群の発掘調査は昭和52年11月末より昭和53年9月7日までかけて実施いたしました。

宗像町が町の事業として発掘調査を行ったのはこの相原古墳群がはじめてでした。

これまで、稲元、城ヶ谷、野坂などの大型の古墳群が開発のあおりをうけ、緊急発掘調査後消滅していましたが、その調査経過と、出土品、それにともなう史実分析等について、私どもに十分な把握がなされておられません。

郷土の文化遺産については、郷土の手によって守られ、保存され、継承されるのがすじであります。それが充分ではなかった、という反省にたって、この相原の古墳群が町の事業として行われるようになりました。

この調査が古代宗像を解明していく作業の一環となることをねがっています。

発掘調査にあたって、県文化課の方々とりわけ、酒井仁夫主任技師には大変お世話になりました。

又、発掘に参加された地元の方々には、大変なご苦勞をおかけしました。ここに厚く御礼申し上げます。

昭和53年3月31日

宗像町教育委員会

教育長 竹 原 瑛

例 言

1. この報告書は、宗像町内の牧草地造成事業に伴って破壊される予定の古墳群について実施した発掘調査の結果報告である。
2. 調査は、昭和52・53同年度に国庫補助を受けて宗像町教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
3. 遺物整理の指導については、福岡県教育委員会の岩瀬正信氏に願った。
4. 掲載した写真のうち、遺構は酒井が、遺物は九州歴史資料館石丸洋氏指導のもと、岡紀久夫、前田次郎、平島美代子3君が撮影した。
5. 揮図のうち、遺構は酒井、高田一弘、蒲原宏行が、遺物は酒井、蒲原が実測し、中野恵子、芦塚照子君が浄書した。
6. 本報告書は酒井が執筆、編集した。

本文目次

I 調査の経過	3
II 位置と環境	5
III 調査の内容	6
IV まとめ	70

挿図目次

Fig 1 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000 筑前東郷)	1
2 相原古墳群分布図 (縮尺 1/5,000)	2
3 相原前方後円墳石室実測図 (波多野統三「筑紫史論」より転載)	4
4 1号墳石室実測図 (縮尺 1/60)	7
5 1号墳出土装身具実測図 (縮尺 1/2)	7
6 1号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)	7
7 2号墳土層図 (縮尺 1/80)	8
8 2号墳石室実測図 (縮尺 1/60)	10
9 2号墳出土装身具・武器実測図 (縮尺 1/2)	11
10 2号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)	12
11 3号墳石室実測図 (縮尺 1/60)	13
12 4号墳石室・土層実測図 (縮尺 1/60)	14
13 4号墳出土装身具実測図 (縮尺 1/2)	15
14 4号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)	15
15 5号墳石室土層実測図 (縮尺 1/60)	16
16 6号墳石室・土層実測図 (縮尺 1/60)	18
17 7号墳石室・土層実測図 (縮尺 1/60)	19
18 8・9・11号墳石室・土層実測図 (縮尺 1/60)	21
19 12号墳土層実測図 (縮尺 1/60)	24
20 12号墳石室実測図 (縮尺 1/60)	25
21 12号墳出土須恵器実測図① (縮尺 1/3)	27
22 12号墳出土須恵器実測図② (縮尺 1/6)	29
23 13号墳土層実測図 (縮尺 1/60)	30
24 13号墳出土装身具実測図 (縮尺 1/2)	31

Fig25	13号墳石室実測図 (縮尺1/60)	32
26	13号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	33
27	14号墳石室土層実測図 (縮尺1/60)	34
28	14号墳出土装身具実測図 (縮尺1/2)	34
29	14号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	34
30	15号墳土層実測図 (縮尺1/60)	35
31	15号墳石室実測図 (縮尺1/60)	36
32	15号墳出土馬具・武器実測図 (縮尺1/2)	37
33	15号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	38
34	16号墳石室・土層実測図 (縮尺1/60)	40
35	16号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)	41
36	17号墳石室・土層実測図 (縮尺1/60)	43
37	17号墳出土須恵器実測図① (縮尺1/3)	44
38	17号墳出土須恵器実測図② (縮尺1/3)	45
39	18号墳土層実測図 (縮尺1/60)	46
40	18号墳石室実測図 (縮尺1/60)	47
41	18号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)	48
42	19号墳土層実測図 (縮尺1/60)	49
43	19号墳石室実測図 (縮尺1/60)	50
44	19号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	51
45	20号墳土層実測図 (縮尺1/60)	53
46	20号墳石室実測図 (縮尺1/60)	54
47	20号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)	55
48	20号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/6)	56
49	21号墳土層実測図 (縮尺1/60)	58
50	21号墳石室実測図 (縮尺1/60)	59
51	21号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	60
52	22号墳土層実測図 (縮尺1/60)	61
53	22号墳石室実測図 (縮尺1/60)	62
54	22号墳出土工具実測図 (縮尺1/2)	63
55	22号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)	64
56	22号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	65
57	23号墳土層実測図 (縮尺1/60)	66

Fig 58	23号墳石室実測図 (縮尺1/60)	67
59	23号墳出土装身具実測図 (縮尺1/2)	68
60	23号墳出土須恵器実測図① (縮尺1/3)	68
61	23号墳出土須恵器実測図② (縮尺1/3)	69

付 図 目 次

Fig ①	相原古墳群A地区地形実測図 (縮尺1/400)	巻末
②	相原古墳群B地区地形実測図 (縮尺1/400)	巻末

図 版 目 次

	本文対照頁
PL 1 (1) 遺跡遠望	5
(2) A地区古墳群	6
(3) B地区古墳群	6
PL 2 (1) 1号墳墳丘 (調査前)	6
(2) 1号墳墳丘と石室	7
PL 3 (左) 2号墳墳丘 (調査前)	9
(左) 2号墳墳丘 (調査後)	9
(左下) 石室入口	9
(下) 天井石と墳丘	9
PL 4 (1) 3号墳石室	13
(2) 3号墳閉塞石	13
(3) 4号墳石室	14
(4) 4号墳閉塞石	14
PL 5 (1) 5号墳全景	15
(2) 5号墳石室	15
(3) 5号墳閉塞石	15
PL 6 (上) 6号墳全景	17
(下) 7号墳入口	20
(上) 7号墳全景	20
(下) 7号墳閉塞石	20
PL 7 (上) 8・9・11号墳全景 (調査前)	20~23

	(下) 8号墳全景	20
	(上) 11号墳石室	23
	(下) 9号墳全景	22
PL 8	(1) 12号墳全景	23
	(2) 12号墳石室	23
PL 9	(1) 12号墳玄室奥壁	23
	(2) 12号墳玄門及び羨道	23
PL 10	(1) 13号墳全景	30
	(2) 14号墳全景	32
PL 11	(上) 15号墳全景	34
	(下) 15号墳前室遺物出土状態	37
PL 12	(1) 16号墳全景	39
	(2) 16号墳墓道遺物出土状態	41
PL 13	(1) 17号墳全景	42
	(2) 18号墳全景	45
	(3) 19号墳全景	51
	(4) 20号墳全景	52
PL 14	(1) 21号墳全景	57
	(2) 22号墳全景	60
	(3) 23号墳全景	65
PL 15	1・2号墳出土装身具・金銅製品・鉄器	7・9
PL 16	4号墳出土装身具	14
PL 17	各古墳出土装身具・鉄器	30・37・61
PL 18	2・4号墳出土須恵器	11・14
PL 19	12・13・14号墳出土須恵器	26・30・34
PL 20	15号墳出土須恵器	37
PL 21	15号墳出土須恵器・土師器	37
PL 22	16・17号墳出土須恵器	41・44
PL 23	18・19・20号墳出土須恵器	45・48・55
PL 24	20号墳出土須恵器・土師器	55
PL 25	21・22号墳出土須恵器	60・61
PL 26	22号墳出土須恵器・土師器	61
PL 27	23号墳出土須恵器	68



Fig 1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000 筑前東郷)

- 1. 相原古墳群 2. 堀元古墳群 3. 久戸古墳群 4. 東郷古墳群
- 5. スベットウ古墳 6. 横山古墳群 7. 須恵墓跡群 8. 後曲古墳群

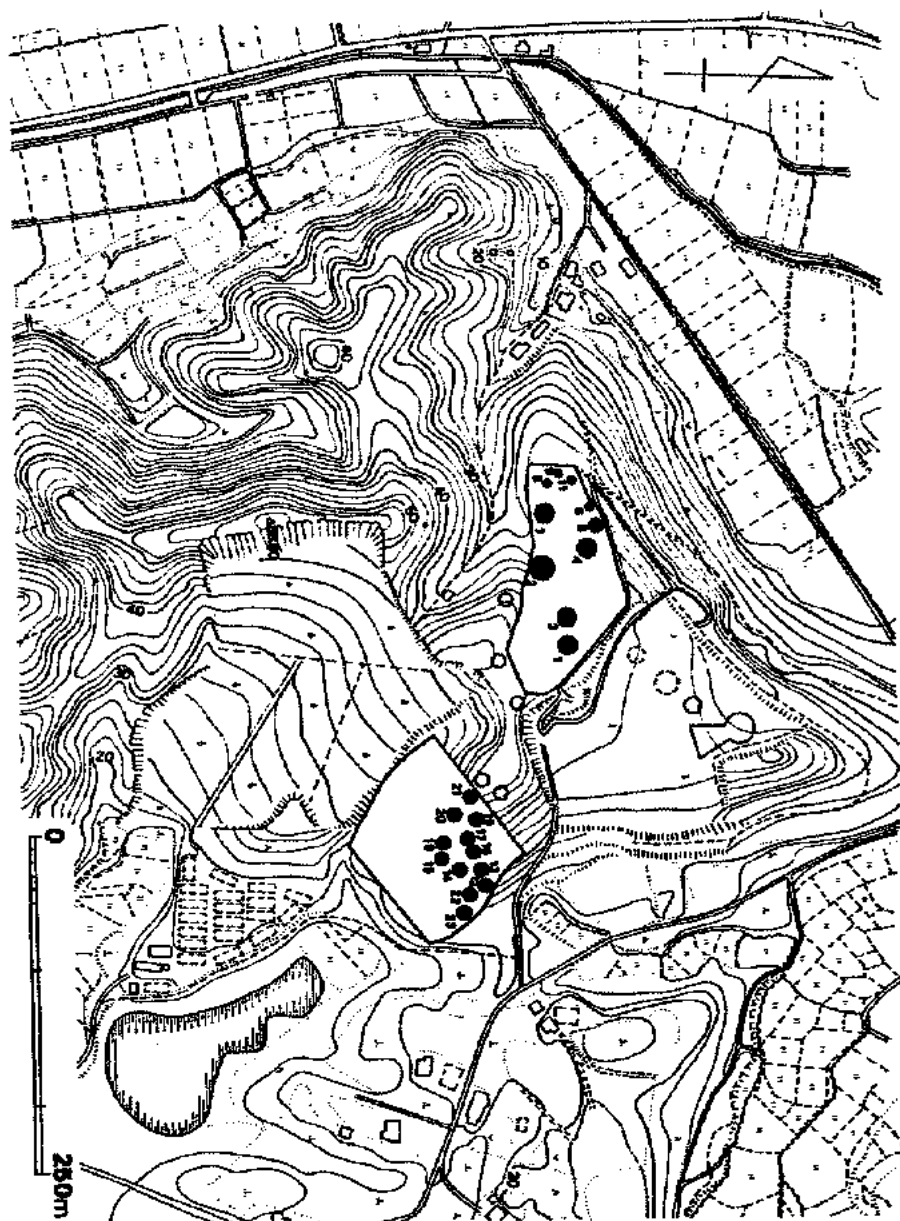


Fig 2 相原古墳群分布図（西群はA地区，東群はB地区）（縮尺1/5,000）

I 調査の経過

宗像町大字河東字相原地区は旧国有林であり、赤松の巨木が美しい樹相を呈していたといわれる。戦後、土地払い下げを受けた入植者は原野を開き、樹根を掘り除くという難事に対し子供も混えて果敢に取り組み、一坪一坪と農地を広げていった。あまりにも苛酷な環境と労働に耐えられず、土地を離れた人達も多かったといわれる。今日、国の農業政策はかつての米作奨励から減反へと変化し、その波は新天地相原地区にも押し寄せている。このような時代相にあって苦慮する農民は畜産に力を注ぐべく、営みの方向変換を計っている。そのため町は、団体営草地開発整備事業を起し、牛の飼料畑を造成することとなった。昭和52年度には相原内2地区でこの種造成が行われることとなったが、当該地区は相原古墳群としてかねてより周知の遺跡であり、緊急に発掘調査が必要となった。調査は宗像町が主体となり、国庫補助事業として昭和52年度及び53年度にかけて実施した。

調査関係者は次の通りである。

総 括	宗像町教育委員会	教育長	竹 原 瑛
		社会教育課長	吉 田 昭 生
		社会教育係長	牧 田 俊 次
庶 務 会 計		社会教育主事	尾 山 清
調査担当者	福岡県教育委員会文化課	主任技師	酒 井 仁 夫
			高 田 一 弘
			日 高 正 幸
			蒲 原 宏 行
整理担当者	福岡県教育委員会文化課	嘱 託	岩 瀬 正 信

なお、発掘調査に当っては地元の方々の多大な協力をいただき、円滑に作業を進めることができた。四季の移り替りを天候や草花の色香に共に感じつつ日々を過ごしたことは、作業を共にし得た者のみを知る特権と感じ入っているしだいである。

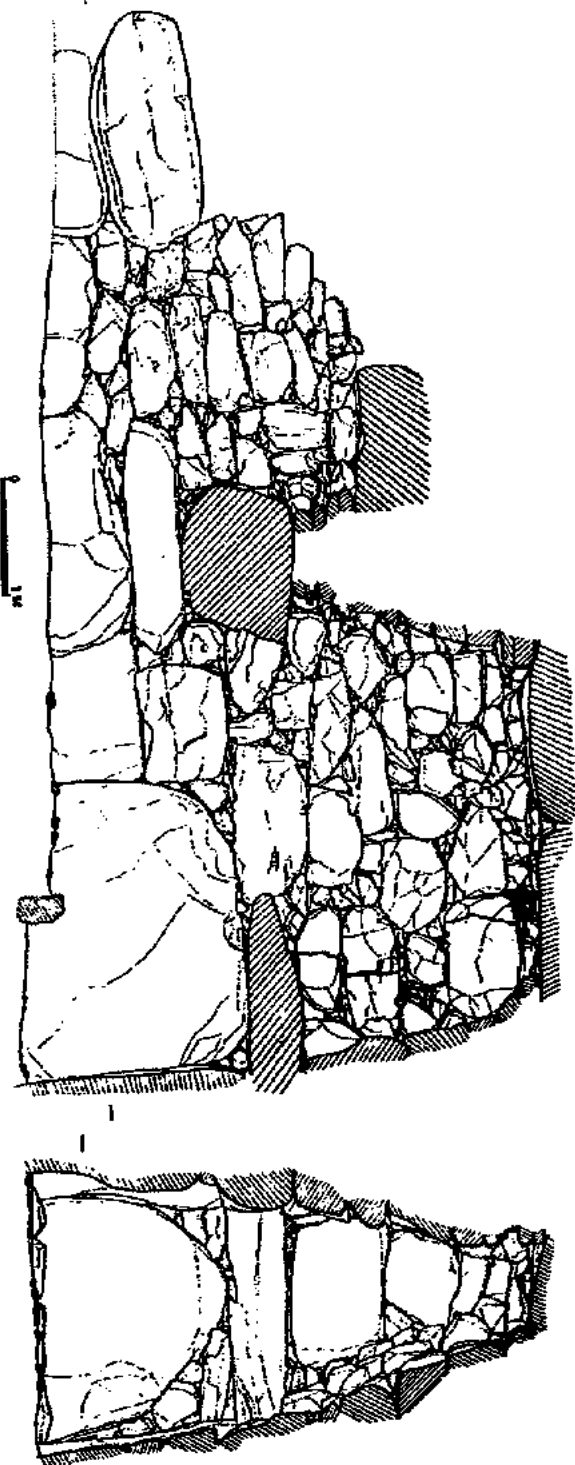


Fig. 3 相原前方後円墳石室実測図 (近多野成三「筑紫史論」より転載)

II 位置と環境

宗像町内の埋蔵文化財は、昭和50年度までの調査で462箇所判明している。その後、新発見の遺跡も相い継ぎ、増加の一途をたどっている。反面、近年ますます大規模化する土木工事によって発掘調査後とはいえ壊滅する遺跡も多い。

東は篠田峠、南は若宮町境の驛山・磯辺山・見坂峠より出た水流は西向あるいは南向して赤間・東郷で合流して釣川となる。さらに北方の孔大寺山や城山より出た小河川も南下して加わり、玄海灘へと注いでいる。釣川とその支流は流域に豊饒な沃野を形成している。その最大の沖積地が赤間及び東郷田郷である。沖積地を取りまく丘陵上にはいたるところ群集墳がみられる。東郷には宗像郡内最古と思われる高塚（東郷4号墳）と、スベットウ（東郷1号墳）の2基の前方後円墳を含む古墳群^(註1)があり、釣川流域最大の沃野をひかえた古代権威の中心がこの地域にあったことが知れる。その他荒瀬・田久・名残・相原に前方後円墳が点在している。

相原古墳群（県埋文地図番号330014～330031、宗文番号14～31）は孔大寺山（標高499m）の西へ派出した丘陵端にあり、西側丘陵下を南流して釣川へ注ぐ横山川が限っている。付近は東郷から玄海灘に面した鍾崎へ通じる街道中の小盆地の様を呈している。周辺には稲元古墳群・横山古墳群がある。谷を隔てた城山山麓には100余基よりなる古墳群があり、うち三郎丸、城ヶ谷古墳群が発掘調査されている。なお、城山・孔大寺山北麓に片山古墳群が、東側の汐入川東岸に東田古墳群が所在する。

孔大寺山麓と同様に、北方の湯川山（標高471.4m）山麓にも古墳群が群在する。特に西麓に多くみられる。これら古墳群は数百年という時間帯の中で、近似した歴史的背景のもとに成立したと思われる。そのことは古墳造営法、石室構造、出土遺物の類似等によって知ることができる。

- 註1 福岡県史跡調査会編「東郷古墳群」日本住宅公団 1967
- 2 西谷真治編「稲元古墳群第1期調査報告」稲元古墳群調査団 1976
- 3 波多野皖三「宗像郡宗像町三郎丸古墳群調査」『福岡教育大学紀要』第21号 1971
- 4 同「三郎丸古墳群」『筑紫史論』第三輯 1975
- 5 波多野皖三編「城ヶ谷古墳群」1977
- 6 福岡県教育委員会「片山古墳群」福岡県文化財調査報告書第46集 1970
- 7 岡垣町教育委員会「片山古墳群」岡垣町文化財調査報告書第3集 1978
- 8 岡垣町教育委員会「東田古墳群（図版編）」1976
- 9 岡垣町教育委員会「東田古墳群」岡垣町文化財調査報告書第2集 1977
- 10 石室実測図は註3より転載した。

Ⅲ 調査の内容

相原に古墳群が存在することは、かなり以前から知られていたが、分布する丘陵地のうち、北半は10余年前の畜舎造成工事によって壊滅した。その中には前方後円墳1基と円墳3基が含まれる。前方後円墳は石室の羨道前部を失い、墳丘は石室を辛うじて被う部分のみ残している。主体部は複室の横穴式石室であり、南西方向に開口する。石室の全長は8.74mあり、玄室は、3.75×2.38mの縦長である。奥壁より1.37mの位置に4石からなる仕切石があり、屍床を設けている。床は仕切石前面よりも約20cm低い。また仕切石上まで石欄が凸出する。床面からの高さ1.95mである。天井石までの高さは仕上石前面で4.16mである。東郷スベットウ古墳の玄室高が3.80mであり、現在のところ宗像郡内で最も天井の高い古墳といえよう。前室は玄室に比べて小振りの腰石で両側が築かれている。横長プランで、高さは玄室のそのの丁度である。玄門間巾及び羨道巾は玄室巾の1/2である (Fig 3)。

破壊された他の3基の主体部については南東方向に開口する横穴式石室であったという点以外不明である。

これらの古墳の南側高地に今回調査分を含めた群集墳がある。5年前の分布調査時に18基確認されていたが、現在27基が判明し、さらに今後の調査によって増加すると思われる。

調査区域は東西の2個所に分けられた。西側丘陵をA区、東側丘陵をB区とし、A区より調査した。

1. 1号墳 (Fig 4, PL 2)

(1) 立地と現況

A地区東端の丘陵南斜面に位置する。標高 44.31mを最高位とし、周辺より約1.30m高く盛りあがる墳丘を残している。中央に盗掘による陥没坑が大きくあき、墳丘前面にその際の排土が堆積していた。

(2) 墳丘

主体部床面から墳頂まで3.50mの高さがある。現況では径12mであるが、それを上廻って盛土されていたと思われる。詳細は調査し得なかったので不明である。

(3) 石室 (Fig 4)

南西方向へ開口する単室横穴式石室を主体部とする。玄室腰石4個を残すのみで、他に玄門根石と墓道東壁の貼石若干がみられた。

玄室は側壁各2、奥壁1の腰石によって構成され、増定 $2.32\text{m} \times 1.43\text{m}$ の長方形プランである。石材は転石を利用している。羨道は石材をまったく残さないが、掘り方との関係で、長さ40cmに満たない短いものであったと思われる。墓道は長さ2m検出したのみである。床面は中窪みで、端に向うにつれ僅かながら迫上がっている。

(4) 出土遺物

墓道埋土中より耳環1と須恵器杯蓋1を検出したのみである。

耳環 (Fig 5, PL 15)

金製で、重量から考えて中空であると思われるが、合わせ目は丁寧な琢打のため不明。

須恵器 (Fig 6)

杯蓋である。天井部は丸く、体部外面 $\frac{1}{2}$ 以上にヘラ削りが認められる。口縁内側に段部があり、端部は尖る。

(5) まとめ

盗掘に際して多くの石材を失っており、また調査が不完全なこともあって細部について不明な点が多い。石室は長方形プランの玄室と極短い羨道を持つ

つ点に特徴があり、端に向うにつれ若干であるが迫上がる墓道を持つ点、後に述べる4号墳石室にやや近く、出土した須恵器からみてもそれに近い時期に使用された古墳と思われる。

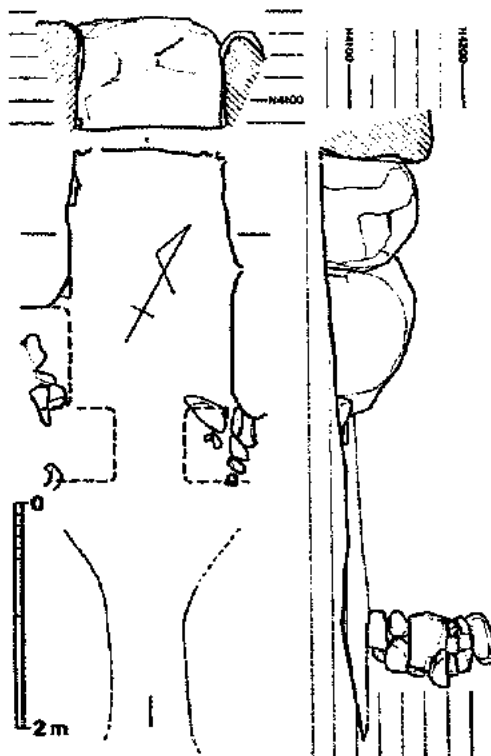


Fig 4 1号墳石室実測図 (縮尺1/60)



Fig 5 1号墳出土装身具実測図 (縮尺1/2)



Fig 6 1号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

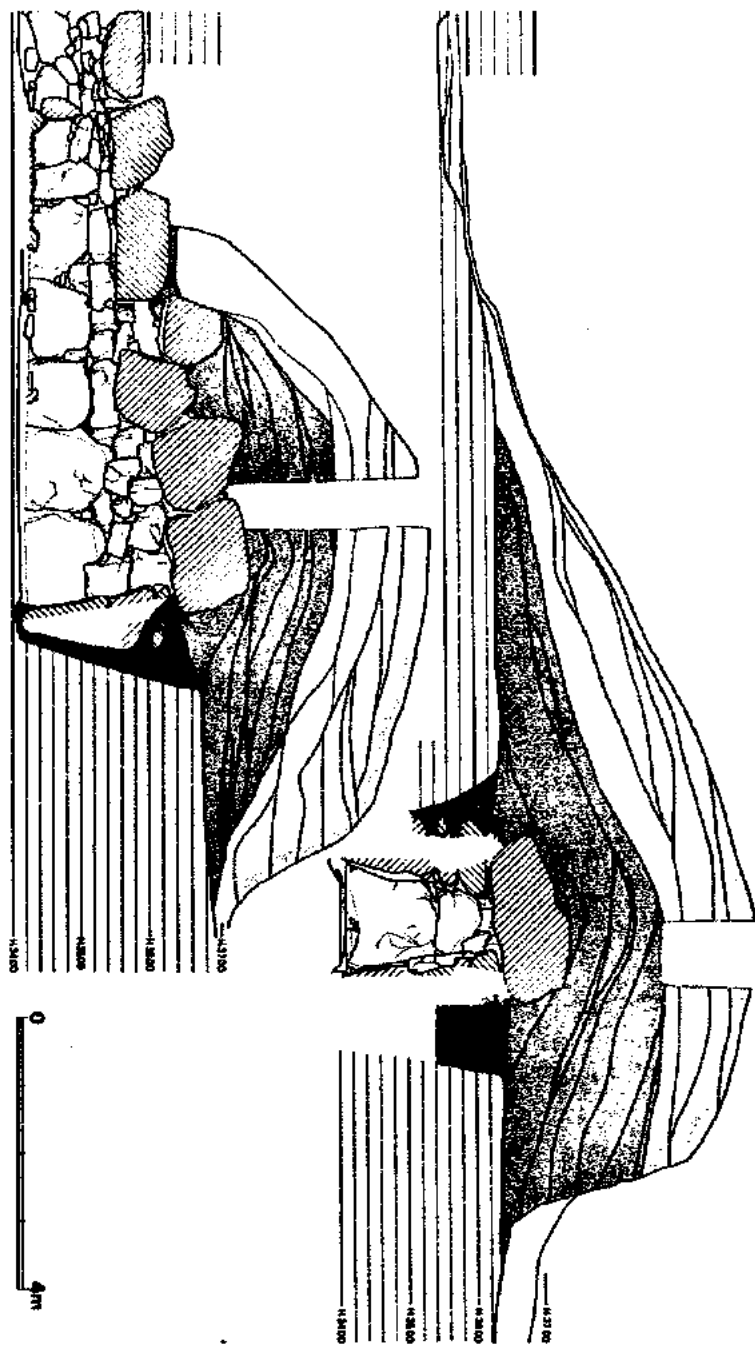


Fig 7 2号墳土層図 (縮尺1/80)

2. 2 号 墳 (Fig 7・8, PL 3)

(1) 立地と現況

A地区の中央、丘陵鞍部よりやや南側に寄って位置する。標高 40.79mを最高位とし、周辺より約 3.5m高く盛り上がっている。北側から東側にかけては耕作によって削り取られ、南側は崖となっている。盗掘坑はみられなかった。

(2) 墳 丘 (Fig 7, PL 3)

墳丘築成に際し、径20.8mの範囲内の表土を全て取り除き、地山を平滑に仕上げている。周囲に巾 3.0mの溝をめぐらし、中央に深さ 2.6m、上巾 4.5mの墓壇を穿っている。その深さは石室天井レベルを凌いでいる。墳丘盛り上げには3段階の工程が認められる。まず墓壇掘り方内を裏込め石若干を用いながらつき固め、天井石上端まで盛り上げる。その固さは尋常なものではない。第2にその上に黄色、灰色あるいは赤色の粘質土を 7.3× 8.8mの範囲を版築する。その範囲は前室及び玄室上に止めている。玄室天井石上を最高位とし、地山から2.25mの高さとなる。最後に羨道天井石上を含めて径20.8m、地山からの高さ3.65mの盛り上げを行っている。この工程ではつき固めはそれほど行われず、土が柔かい。

(3) 石 室 (Fig 8)

略南に開口する全長 11.32mの長大な複室横穴式石室である。玄室内法は長さ約 2.8m、中央巾1.72mである。腰石は奥壁1、左右側壁各2個よりなり、高さはいずれも床面から、1mを超える。床面は地山上に約10cm盛土して作られており、東側壁中央に接して置かれた長さ約40cmの石から考えて棺台あるいは屍床が設けられていたと思われる。床面から天井までの高さは約 2.0mである。

前室内法は長さ約 1.5m、玄室側巾 1.2m、前巾0.95mで、両側腰石は各1個を用いている。床面には一部敷石が残っている。天井までの高さは玄室のそれに等しく約 2.0mである。

羨道は長さ約 4.4mと長く、奥巾 0.6m、前巾0.75mである。側壁は奥側に巨石3個を、前側に小振りの用石2個を据え、腰石としている。床面の奥側半分に仕切り石を前後2個置き、その間1.65mに敷石している。天井石までの高さは敷石上より約1.15mである。

羨道の前には楕形に広がる前庭部があり、両側壁に貼り石している。

閉塞石は羨道中間の手前仕切り石の上に高さ60cmの石1個を立たせ、その内側に平石を多数、床面から天井石まで平積みしていた。但し、発掘作業の支障となったので取り除き、作図していない。

(4) 出土遺物 (Fig 9・10, PL 15・18)

表面観察によって盗掘坑と思われる個所が見い出されず、閉塞石が嚴重であったので未盗掘の古墳と考えていたが、副葬遺物は僅かの鉄鍔と装身具、金銅細片以外皆無であった。墓道及

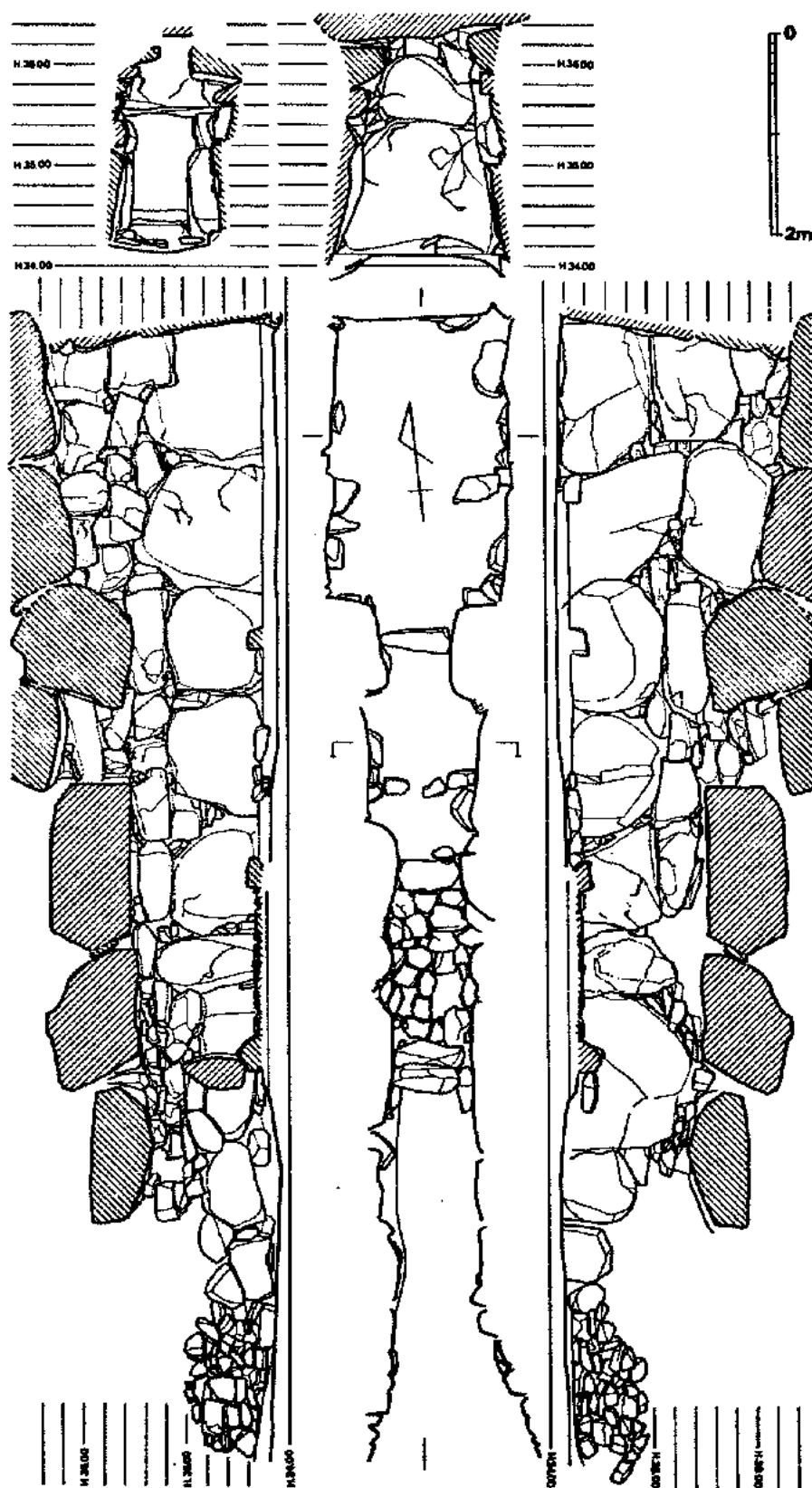


Fig 8 2号填石室实测图 (缩尺1/60)

び墳丘中から6個体の須恵器が出土した。

装身具 (Fig 9, PL 15)

ガラス丸玉 1(1)、ガラス小玉 3 (2~4)、ガラス小玉 1(5)、銀製空玉 3 (6・7) が含まれる、いずれも玄室埋土中より出土した。ガラス丸玉のうち

2と3は若草色、4は濃緑色であり、2と3は巻きガラスである。

武器 (12~17)

12と13は圭頭太刀の用品と思われる。12は銀製、13は柄頭紐穴金具(しとど目)である。金銅製である。14~16は尖槌式の鎌で、他に100余本出土しているが、いずれも同型式の刃部及び鍔部を持つ。但し、全長を知りうる例はない。17は円頭斧箇の広根鎌である。

不明鉄器 (8~11)

両頭は鐙の付く例とそうでないものがある。両頭間には横位の木目が付着している。計10本出土している。

金銅製品細片 (PL 15-6)

平板状のものと、球状のものがある。いずれも厚さ 0.3mm 程度で薄い。

須恵器 (Fig 10, PL 18)

壺 1 (201)、甗 1 (202)、壺 1 (203)、平瓶 3 (204~206) が出土している。201~203 が墓道、204 が墳丘中、205・206 が玄室及び墓道からの出土品である。203 の壺は所謂新羅焼土器の優品である。但し頸部より上、胴下半部を欠損している。肩から胴部にかけて文様帯が3段あり、各間を3条の沈線で画している。上段華文はスタンプ円11個を配し、中央円と鋭い沈線で結んでいる。中段は3種構成の文様帯である。華文はコンパス使用。縦沈線の上下あるいは左右の円文はスタンプ。下段文様帯はコンパス使用の上欠円弧と周囲に金属器による刺突文を配した露漣文よりなる。胎土は精製されており、灰色を呈している。

(5) まとめ

墳丘径、石室長さ共相原古墳群中最大である。墳丘築成の丁寧さや用石の巨大さも目につく。僅かに出土した金銅片や圭頭太刀片からみて、他の古墳出土品に優る副葬品があったと思われる。

石室の形状、出土品から鑑みて、7世紀に入る終末期古墳と考えられる。

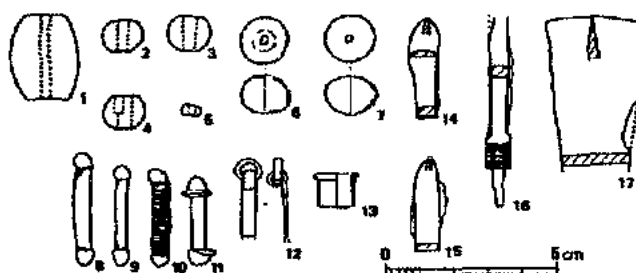


Fig 9 2号墳出土

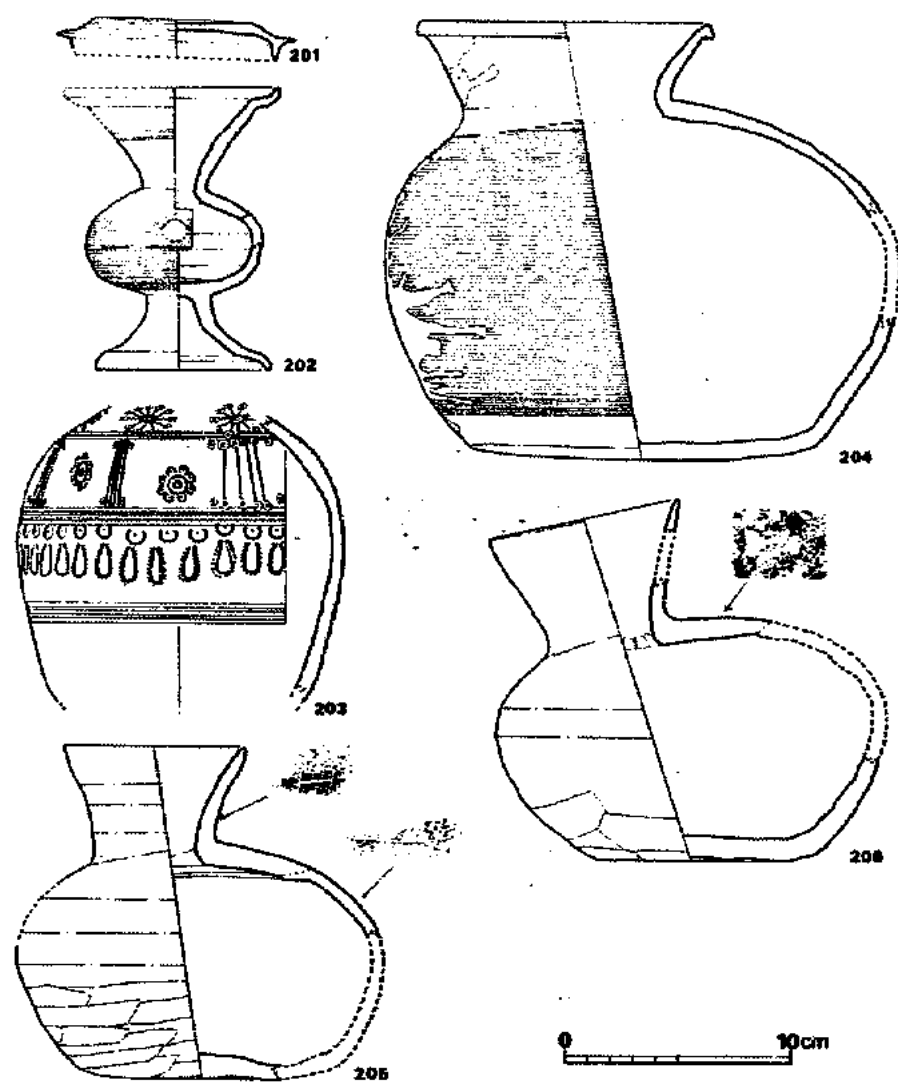


Fig 10 2号墳出土須恵器実測図

3. 3号墳

(1) 立地と現況

1・2号墳間の丘陵南斜面に位置する。表面観察ではまったく発見できず、ブルドーザーによるトレンチ調査で確認した。

(2) 墳丘

まったく残存していない。

(3) 石室 (Fig 11)

南に開口する単室の横穴式石室である。奥壁側で深さ1.60mの墓坑中に築かれている。玄室内法は中央部で2.2×1.6mである。左右側壁各3石、奥壁2石をもって腰石とする。腰石自体若干内傾させ、上は強く持ち送りさせている。床面は羨道部のそれよりやや低く、砕礫を主とし、僅かな偏平円礫を混じえて敷石している。2石よりなる仕切石と閉塞石の間の床面に小礫を敷いている。羨道部は長さ約1.8mで、玄室長より短い。天井石はうら内側の1.0～1.3m以内のみ架構されていたと思われる。閉塞石は横積み四段分を残して

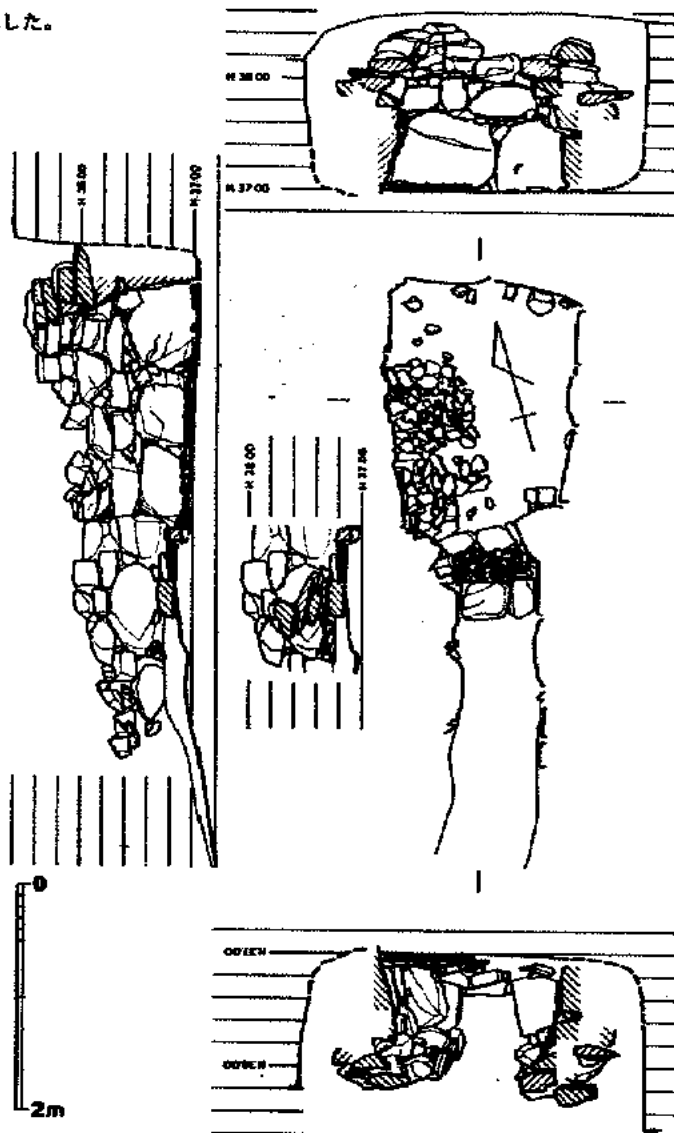


Fig 11 3号墳石室実測図 (縮尺 1/60)

いた。墓道巾は羨道巾にほぼ等しく約 1.5m 伸び、やや左偏している。

(4) 出土遺物

皆無であった。

(5) まとめ

石室構造とそのプランは14号墳のそれに近く、7世紀初頭以降の築造になるものと思われる。

4. 4 号 墳 (Fig 13, PL 4-3・4)

(1) 立地と現況

A地区中央の丘陵北斜面、つまり2・3号墳とは尾根線を挟んだ反対側に立地する。墳丘はみかけはまったく残しておらず、特に北半は農道によって完全に破壊されていた。この農道屑に天井石をはずされて石室内部が露出し、ごみ穴となっていた。

(2) 墳 丘

見かけはまったく残していなかったが、トレンチ土層で僅かに観察された。丘陵鞍部に近い南側では黄色土と赤色土による盛土があり、墓域肩部で厚さ30cm残っていた。奥壁側では地山整形が認められた。本来の墳丘径はこれらのことから、10mをそれほど出ないものであったと考えられる。

(3) 石 室 (Fig 12)

西側に開口する単室横穴式石室である。墓域は 4.3× 3.4mの方形プランで、深さは 2.7mあり、石室は天井石までスッポリと墓域内に入ってしまう。

玄室内法は中央部で 2.7× 1.7mである。使用石材は加工しやすい水成の細粒堆積岩が多く小振りではあるが面取りが確かである。持ち送りカーブも自然で、四側面合わせに、その技術の良さがうかがえる。床面は奥壁側に傾斜している。玄門巾は55cmで、玄室巾の約1/2であり、その間に3列の仕切り石を埋めている。玄門は左右各々立石の上に横積み2石を置き、垂直なならびとしており、上に天井石を架構している。

羨道は極く短かく、玄門の外側に平行に延びる。小角礫を用いており墓域埋土に貼り付けられている。床面は墓道端から落ち込み、その深みが、閉塞石を据え置く段部となっている。つまり、2段の板状立石の下段頂部、上段下端部と、上述段肩部のレベルがほぼ同一であり、閉塞下段部は常に埋め込まれた状態にあったと思われる。この事は8号墳の例と一致する。

(4) 出土遺物 (Fig 13・14, PL 16・18)

玄室床面より人骨2体分(成人1、小児1)と共に多量の装身具が出土した。但し、攪乱のため、埋葬時の状況は明らかでない。また墓道から須恵器2個体が出土した。

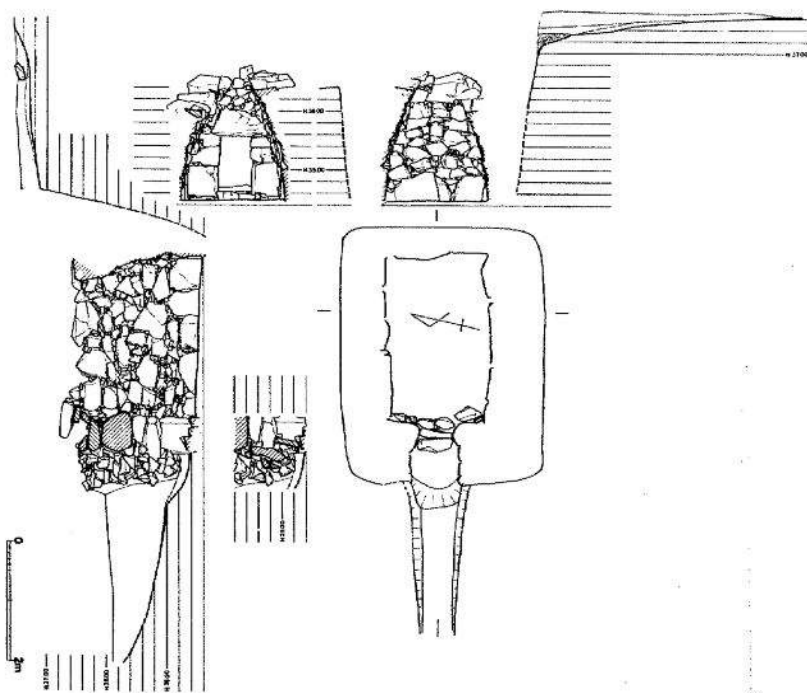


Fig 12 4号填石室・土層実測図 (縮尺1/600)

装身具 (Fig 13
PL 16)

細珠の金環 1 (1)
ガラス小玉 12 (3
~ 6) ガラス丸玉
90、土玉 146、土
製勾玉 1、石製管

玉 2 (7・8)、水晶製丸玉 1 (9)、水晶製切子玉
1 (10) がある。ガラス小玉は径 3mm 以下の黄金色
のもの 4、径 3.0~3.5mm の黄金のもの 2、径 4.0
~5.0mm の薄青色のもの 5、同径濃紺色のもの 1
よりなる。ガラス丸玉は径 4.0~8.0mm でいづれ
も濃紺色を呈する。土玉には大小 2 種あり、小は
径 7.0~8.0mm、大は径 15mm 前後である。

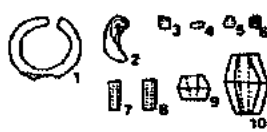


Fig 13 4号墳出土装身具
実測図 (縮尺 1/2)

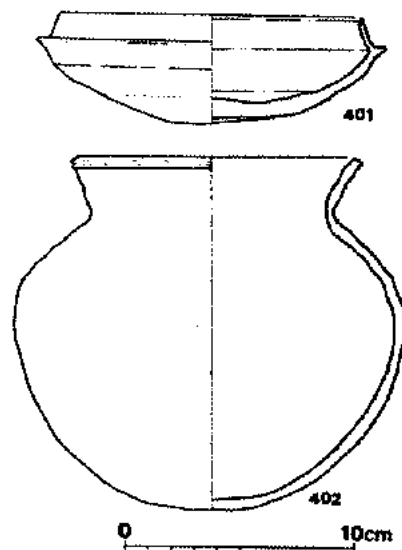


Fig 14 4号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

須恵器 (Fig 14, PL 18)

杯身(1)と壺(2)である。杯は蓋受けの立上りが長く、端部は丸い。壺は球形胴部と直線的に外
傾する口縁部をもつ。口縁端部に一条の沈線をめぐらしている。口唇内側の縁は鋭い。外面
は下半を不定方向へう削りの上をナデ、上半をヨコナデしている。内面は青海波叩きの上をナ
デている。一般に調整は雑である。

(5) まとめ

石室構造は初期横穴式石室の典型ともいうべきもので、その築造技術は確かである。

玄室床面から集骨された 2 体の人骨が出土したが、その 1 体は小児であり、古墳出土小児と
しては珍しい事例であろう。石室構造や出土須恵器から、6 世紀後半まで使用された古墳と考
えられる。

5. 5 号 墳 (Fig 15, PL 5)

(1) 立地と現況

2 号墳の西側、丘陵鞍部から僅かに北斜面に位置する。牧草地開墾によって墳丘は削られ、
頂部は平坦となり周辺より約 60cm の高まりを示していた。

(2) 墳 丘 (Fig 15)

赤色土及び黄色土を水平に盛りあげている。南裾部は若干耕作によって削りとられていると
思われるが、南北径は 10m を若干越す程度と考えられる。4 号墳と同径である。墳丘外部に周

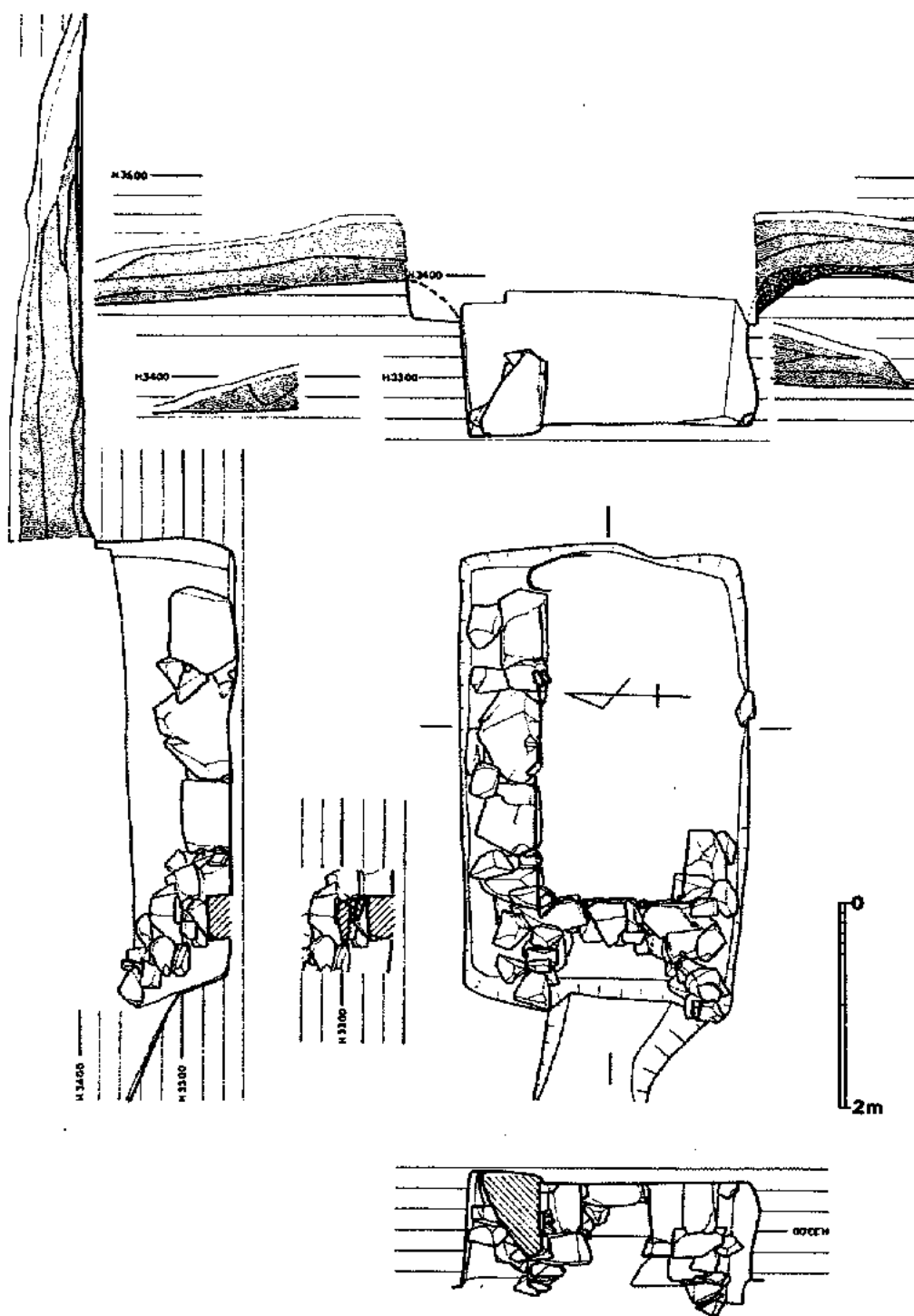


Fig 15 5号墳石室・土層実測図 (縮尺 1/60)

溝は認められなかった。

(3) 石 室 (Fig 12)

墳丘中心よりやや山側に寄って深さ 1.4m の墓壇が掘られている。墓壇は上端が 4.4×2.8m で、壁は垂直に近い。中央の主体部は西側に開口する単室横穴式石室である。玄室の石材は北側壁腰石と玄門付近、羨道部を残すのみである。玄室床面の石材抜き跡は奥壁のそれが僅かに認められたのみであり、北側壁長と玄門付近の巾をもって計測すると、玄室内法は約 3×1.4m である。石材は北側壁腰石奥側 3 枚全てが細粒堆積岩を使用し、面調整を施している。玄門巾は 65cm で、短く八字形に開く羨道が付いている。羨道巾に等しく左偏する墓道が一段高く取り付く。

当古墳で興味深いのは玄門間の閉塞についてである。床面から約 25cm 高い玄門間仕切り石の上に 2 段の横積み閉塞石が認められたが、そのうち 1 石は玄門上端と噛み合っており、古墳築造と同じにこれらの石も積まれたと理解される。また上端レベルは墓道段部ともほぼ等しい。しからばこれらの石は石室を構成する用材の一部であって、閉塞すべき入口はその上端レベル以上であったとすべきであろう。

(4) 出土遺物

石室及び墳丘内共に遺物の出土例はない。

(5) まとめ

石室構造や墳丘径はまったく 4 号墳と等しく、同時期の所産と考えられる。

6. 6 号 墳 (Fig 16, PL 6)

(1) 立地と現況

5 号墳の西、斜面やや下に位置し、牧草地開墾によって墳土の大半を欠失しており、僅かな盛り上がりを見せていた。

(2) 墳 丘 (Fig 16)

黄色土と赤色土を用いた墳丘が径 9.4m にわたって認められたが、単層を残すのみで、中央墓壇上でも厚さ 30cm 弱であった。墳丘外縁に周溝は持たない。

(3) 石 室 (Fig 16)

南西に開口する単室横穴式石室を主体部とする。玄室は縦長で、中央内法は 2.95×10.6m である。奥壁及び奥壁側壁の腰石に細粒堆積岩を用い、面加工が施されている。積みの面擦えは雑で、角礫角が所々凸出している。玄門は小さな柱状石を用いており、左右間巾は 65cm である。玄門上に天井石が残っており、床面からの高さは 1.07m である。

玄門間仕切り石に閉塞石が置かれている。下から 2 段横積み、1 段板状石の縦積み、天井石

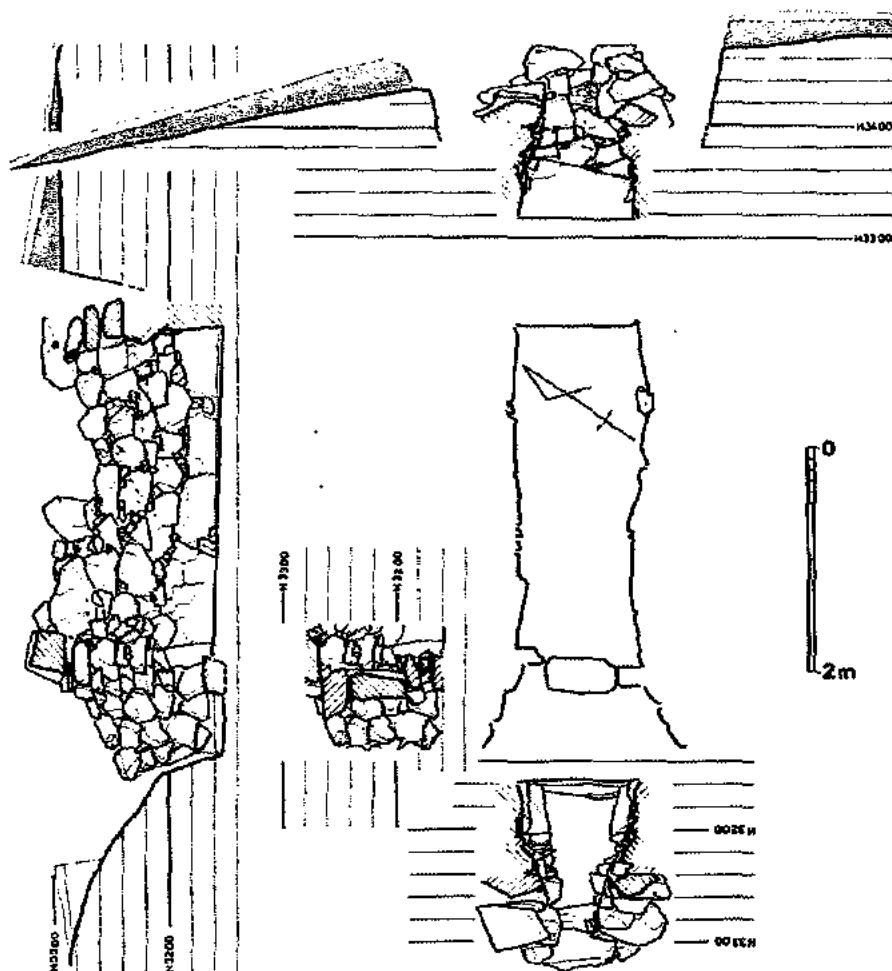


Fig 16 6号墳石室 - 土層実測図 (縮尺 1/60)

下端との間横積みの3段構成となっている。

羨道部は玄門外側から短く八字状に広がり、端部は墓壇壁に接している。仕切り石から53cm外側で墓壇壁が垂直近く55cm立ち上がり、長さ 1.6mの墓道が傾斜床面に取り付いている。

(4) 出土遺物

石室及び墳丘中を含め、出土例はない。

(5) まとめ

石室構造は、船元1～5号墳と極めて類似し、その年代よりして5世紀末か6世紀初頭に所属すると思われる。

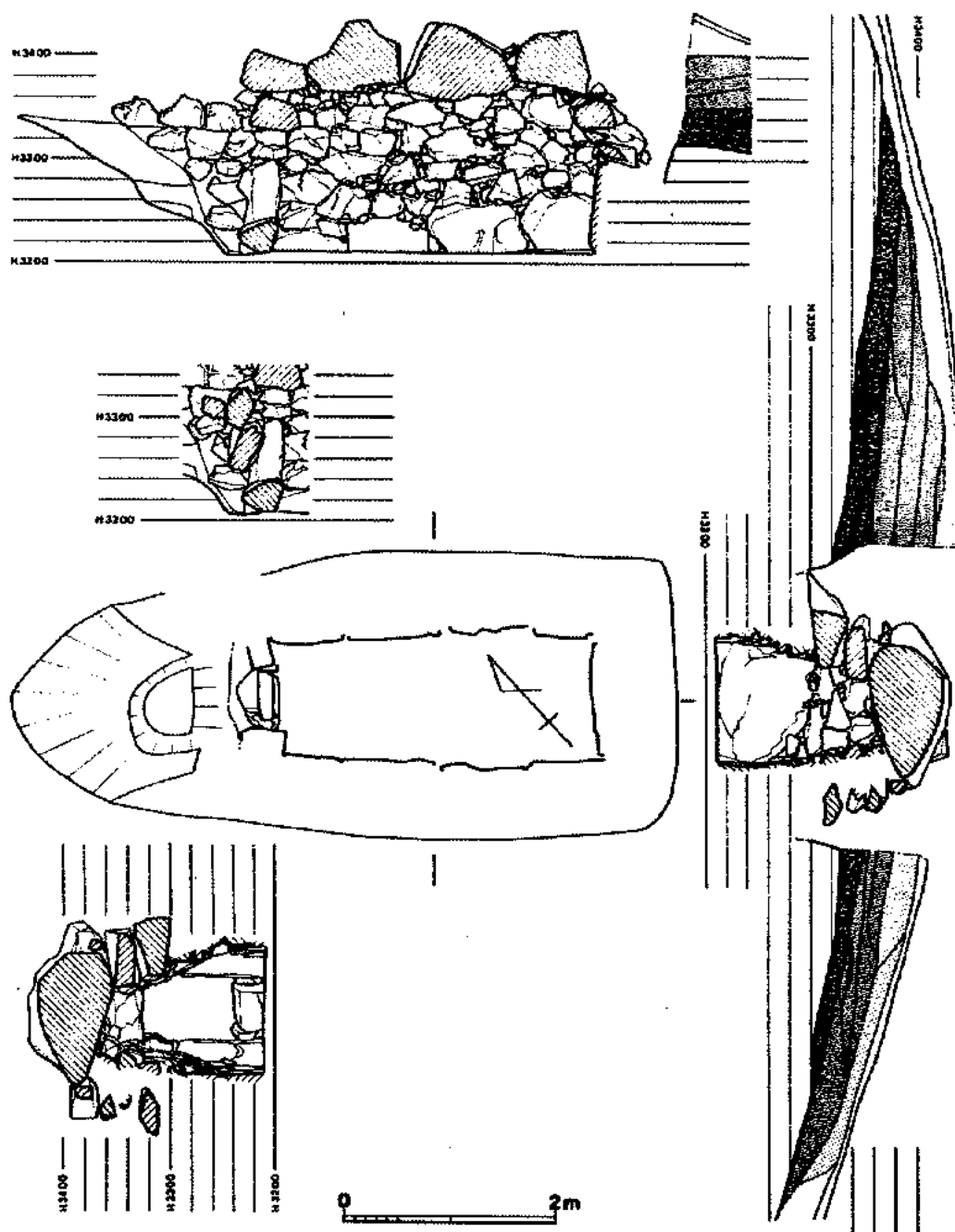


Fig 17 7号墳石室土層実測図 (縮尺1/60)

7. 7 号 墳 (Fig 17 , PL 6)

(1) 立地と現況

6号墳の南側、丘陵鞍部を挟んだ反対側に位置している。牧草開墾地の中にしては墳丘の残りは良く、約1.3mの高まりを残していた。

(2) 墳 丘 (Fig 17)

見かけは径14mの範囲の盛り上がりを示していたが、調査の結果径10.0mの円墳と判明した。築成範囲内の表土剥ぎ取り、地山整形後の盛り上げ墳丘である。墳丘築成工程段階を示す明瞭な層位は認められなかった。

(3) 石 室 (Fig 17)

長さ4.6m、中央巾2.75mの墓域中に北西に開口する単室横穴式石室が築かれている。玄室は狭長で、内法約3.0×1.2mである。前巾は狭くなる。高さは約1.5mである。腰石はしっかりしており、また直立している。持ち送りの面揃えはスムーズである。玄門は床面からの高さ約85cmの柱状石で作られ、左右間巾は60cmである。玄門部の高さは床面から1.2mである。玄門間仕切り石は腰高で30cmの厚味がある。横口前面は羨道というより前庭部と呼ぶべき空間となり、6号墳より古式の様相を呈している。墓域前面に取り付いた前庭部は楕円形で、床面は傾斜する2段掘りである。

閉塞石は前庭部上段下端レベルから始まり、仕切り石上を含め、礫混りの土砂を積み固め、その上に据えている。

(4) 出土遺物

石室内、墳丘中を含め出土遺物は皆無である。

(5) まとめ

6号墳と類似した石室構造をもっているが、羨道部はより未発達で、横口前面の補強の意味を持つにすぎない。ただし時期について6号墳と比較した場合、どの程度の隔たりがあるのかは明瞭でない。

8. 8 号 墳 (Fig 18 , PL 7)

(1) 立地と現況

A地区西端に8・9・11号の3基が近接して立地する。うち8号墳は中央に位置し、牧草地開墾により削平され、僅かな墳丘を残すのみであった。

(2) 墳 丘

南北トレンチによって赤色土で盛られた厚さ10cm未満の1層が認められたのみである。南側

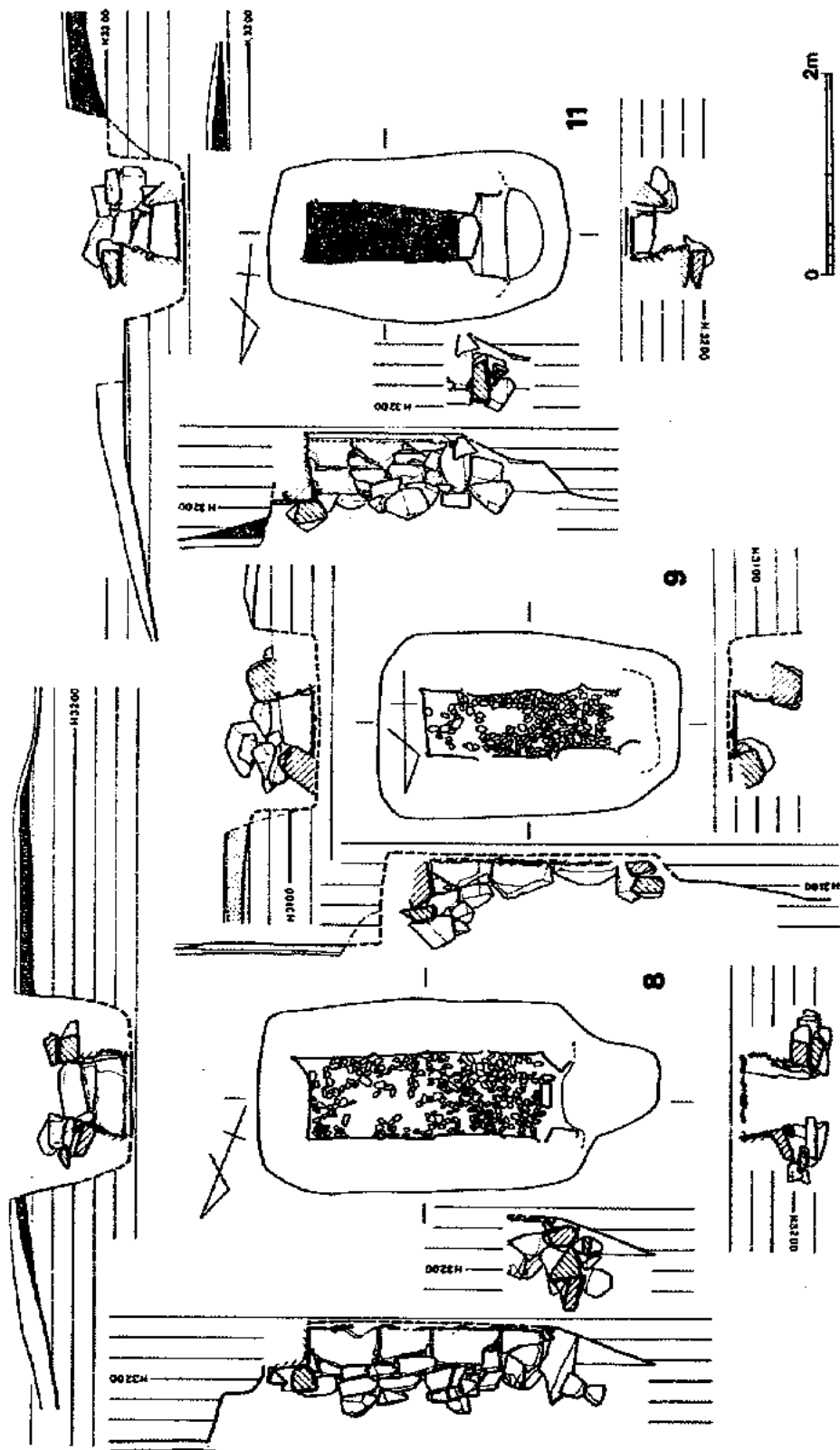


Fig 18 8・9・11号墳石室・土層実測図 (縮尺1/60)

では石室中心から 3.2m の範囲、斜面下方に当る北側では同 2.1m の範囲に墳丘が見られ、墳土流出を考慮しても、6m 前後が本来の墳丘径と考えられる。

(3) 石室 (Fig 18)

3.3 × 1.9m の隅丸長方形墓壇中に築かれている西側へ開口する単室横穴式石室である。玄室は狭長で、内法は 2.2 × 0.8m である。表面平滑に調整された細粒堆積岩を腰石としている。天井までの高さは、内側傾斜度から考えて、80~90cm の範囲と思われ、低い。床面には小角礫による敷石が残っていた。玄門巾は 55cm で、その間に小さな仕切り石が置かれている。

横口前面には玄門石に接して若干の貼り石がみられる。

閉塞石は仕切り石上にあり、下段横積み、上段縦積みである。

(4) 出土遺物

石室内及び墳丘内共に出土例はない。

(5) まとめ

石室構造は 7 号墳を小さくしたもので、同時期の所産と思われる。

9. 9 号 墳 (Fig 18, PL 7)

(1) 立地と現況

8 号墳の西側に近接し、現況も同様である。

(2) 墳 丘

赤色土による盛り土 1 層を残すのみで薄く、その径は 6.2m 前後であり小さい。

(3) 石室 (Fig 18)

2.9 × 1.8m の隅丸長方形の墓壇中に築かれている西側へ開口する単室横穴式石室である。玄室内法は約 1.8 × 0.6m であるが、プランは不揃いである。後世の崩れがあるにしても、腰石を含めた内傾が著しく、床面から天井石までの高さは 70~80cm 内外と思われる。床面には小角礫による敷石が施されている。敷石と閉塞石の間に隙間があり、その位置に仕切り石が置かれていたと考えられる。玄門は南石を失っているが、閉塞石巾からみて、巾 45cm 前後であろう。

閉塞石は横積み 2 段分を残している。なお、墓壇を凸出させるような前庭部掘り込みはみられない。

(4) 出土遺物

石室内及び墳丘中からの出土例はない。

(5) まとめ

石室構造は基本的に 7・8 号墳と同様であり、同時期の所産と考えられる。

10. 10号墳

8・9号墳の北側に僅かな表土の盛り上がりで古墳石材と考えられる石がみられたが、自然石であり、古墳ではなかった。

11. 11号墳 (Fig 18, PL 7)

(1) 立地と現況

8号墳の北東側に近接し、丘陵北斜面に立地する。現況は8・9号墳と同一である。

(2) 墳丘

石室の南側から東側にかけてのみ赤色土の盛り土1層が僅かに認められた。その径6.5m以内である。

(3) 石室 (Fig 18)

2.9 × 1.6mの隅丸長方形墓域中に築かれている。石室は西側に開口する単室横穴式石室である。玄室は中央内法約1.45 × 0.55mで、奥巾が広がっている。床面から天井石までの高さは両側壁の内傾度からみて、80~90cm程度であろう。床面は3~4cm大の砂利によって敷石されている。

玄門間巾は玄室前面巾と変らないが、前庭部巾は広く、外側から見れば、充分玄門の見かけを保っている。

前庭部は2段堀りになっており、中間平垣面から仕切り石上面レベルまで盛り土して、その上に閉塞石を立てている。

(4) 出土遺物

玄室床面の東北隅から鉄鏃がまとめて出土したが、取り上げ後紛失した。尖根鏃であった。

(5) まとめ

8・9号墳と基本的に同一の石室構造をもち、同様の時期の所産と考えられる。

12. 12号墳 (Fig 19・20, PL 8・9)

(1) 立地と現況

以下全てB地区の古墳群である。12号墳はB地区西端にあり、標高27~30mの斜面にかかっている。北側墳丘は畠地耕作によって削られている。

(2) 墳丘 (Fig 19)

標高30.73mを最高位とする。墳丘築成は基本的に2号墳と同様3工程をもって成るが、2

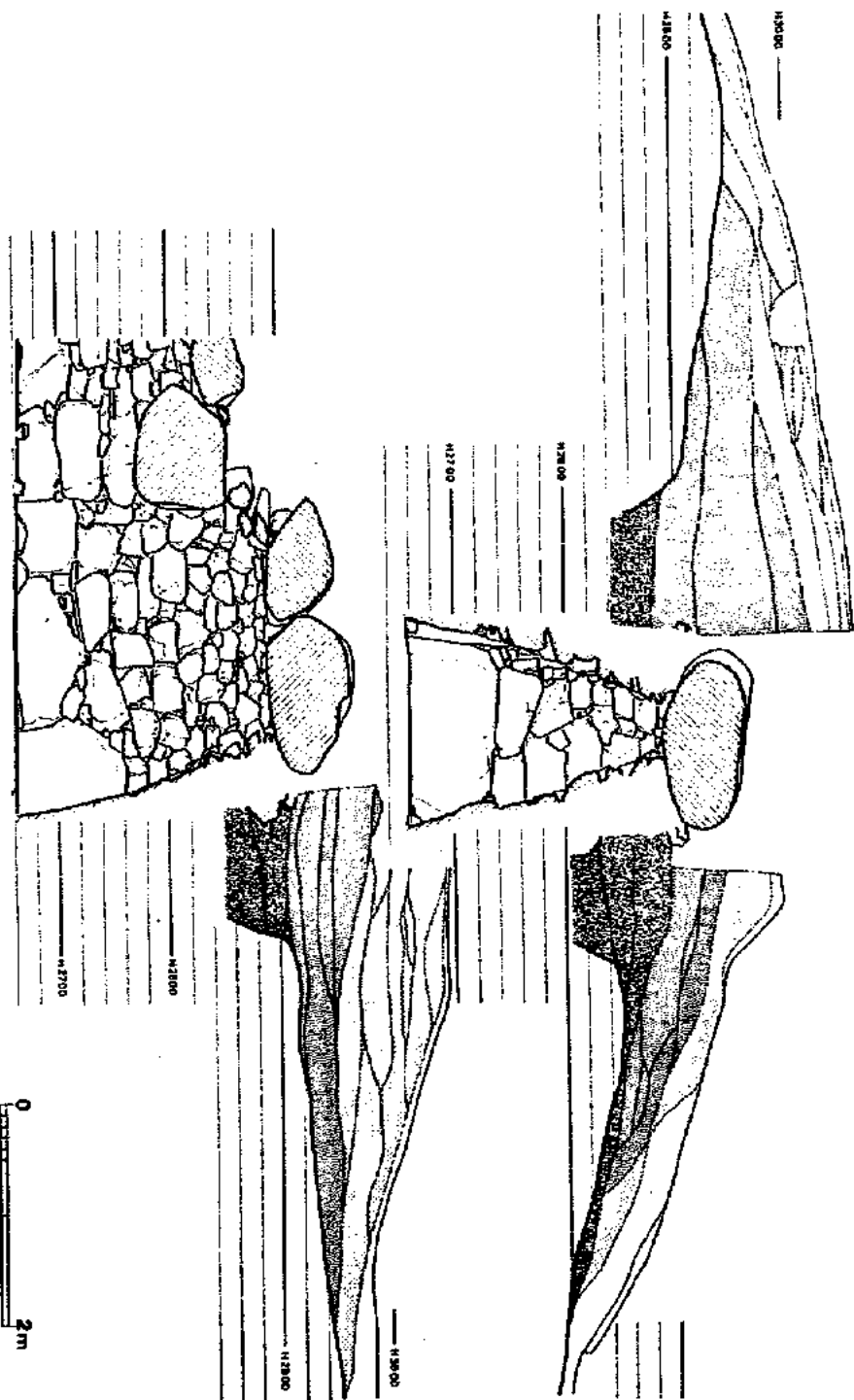


Fig 19 12号墳上解案断面 (縮尺1/60)

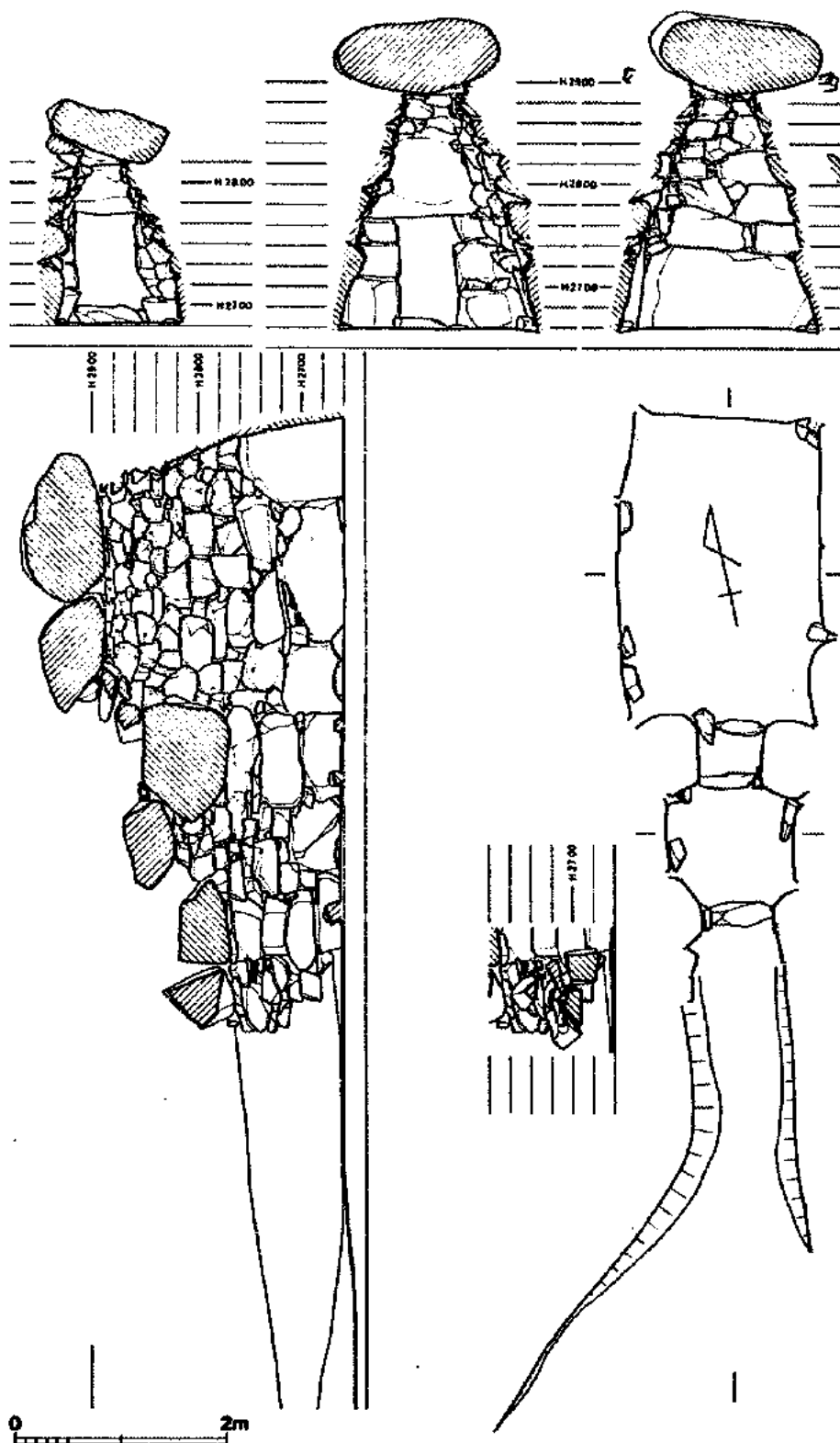


Fig 20 12号填石室実測図 (縮尺 1/60)

号墳でみられたような極端な版築はなされていない。まず墳丘盛り土範囲の地表を削ぎ取り、墓壇を穿つが、地山面の谷側への自然傾斜は天井石架構段階の盛り土調整によって補われている。すなわち山側での墓壇肩部から天井石設置レベルまで埋めた段階は、谷側での墓壇肩部にさらに盛り土しレベルアップした段階に当る。当然の事ながら低標高側に深く配慮されている。これまでが第1段階で、次に天井石を架し、それを被う盛土を行う。最後に墳丘裾部を固める。外周に溝をめぐることはしていない。以上によって築かれた墳丘は径14×12mの石室長軸側に長い楕円形を呈する。

(3) 石室 (Fig 20)

巾 4.5m、長さ略 5.5mの墓壇中に築かれている。主体部はN-168°-Wの略南に開口する複室横穴式石室である。玄室内法は中央部で 2.9×1.9mあり、奥壁がやや右偏するといえ厳正な長方形プランである。奥壁は腰石が1枚石でなり、床面からの高さは80cmである。側壁は各3枚の腰石よりなり、奥壁に向って漸次大きくなる。断面では腰石も内傾し、順次持ち送りするが、直線に近いゆるやかなカーブである。床面から天井石までの高さは2.25mである。玄門巾は玄室巾の丁度半で前室側、玄室側の床面に各々仕切石がある。床面から天井石までの高さは1.1mである。

前室は羨道との間がさらに仕切り石で画されている。仕切り石から仕切り石までの長さ1.1m、横巾1.2mの方形プランである。天井石までの高さは1.6mである。前室天井石と羨道天井石の間の詰め石はなく、この部分から盗掘されたものであろう。

前室との仕切り石内側からを羨道とすれば、長さ1.3m、巾0.8mで短い。高さは1.1mである。墓道は西側へ大きく開き、東側は墳丘裾に取り付く。

閉塞石は羨道の間から外側に、床面から15cm上の堆積土上から山状に横積みされている。

(4) 出土遺物

石室内は盗掘に会い、まったく遺物は出土しなかった。墓道の埋土中から2個体、墳丘中から1個体の須恵器が出土した。墳丘中出土の須恵器は大甕で、東側前面の墳丘中第2段階の盛り土が終了した時点で据えられたものである。その左横にさらに円形ビッドがあったが、発掘え付け用のビッドかどうかは不明である。

須恵器 (Fig 21・22, PL 19)

提瓶1 (1201)、壺1 (1203)、大甕1 (1204) である。1201は口縁部を僅かに欠損するが完形品である。取手は焼成前に軋げ落ちていたと思われる。1202は頸部以上を欠損するが、長頸壺と思われる。胴部はまだ丸味を帯びており、平坦な底部をもつ。底部は停止ヘラ削り調整である。1203は非常に歪が大きい最大胴部径83cm、口径59cm、器高93cmあり、当遺跡出土品中最大である。口縁部の中間に二条の沈線をめぐらし、上にボタン状の円盤を貼り付けている。この区画の上を四段の櫛描波状文、下段を櫛押圧文で飾っている。胴部外面に平行タタキ、内

面に青海波と平行タタキがみられる。胴下半は歪が大きい、この部分の外周全体には焼成後の甚しい傷がみられ、埋めて据え置かれた際の使用痕かと思われる。

(5) まとめ

石室が複室構造である点、内傾度を強くして天井石で被う面積を狭くしている点、巨石はまだ用いられていない点等が特徴である。

墳丘中出土の甕が築造時期を示していると考えられる。墓道出土の須恵器は最終埋葬時を示すものではないが、一使用時を示すものである。

以上石室と遺物の特徴から、6世紀末に築かれ、7世紀中頃も使用していたと考えられる。

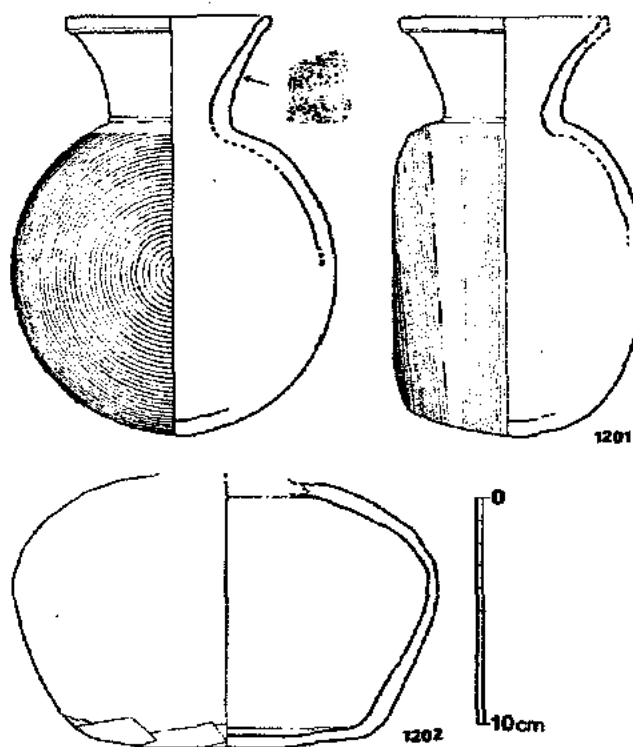


Fig 21 12号墳出土須恵器実測図（縮尺1/3）

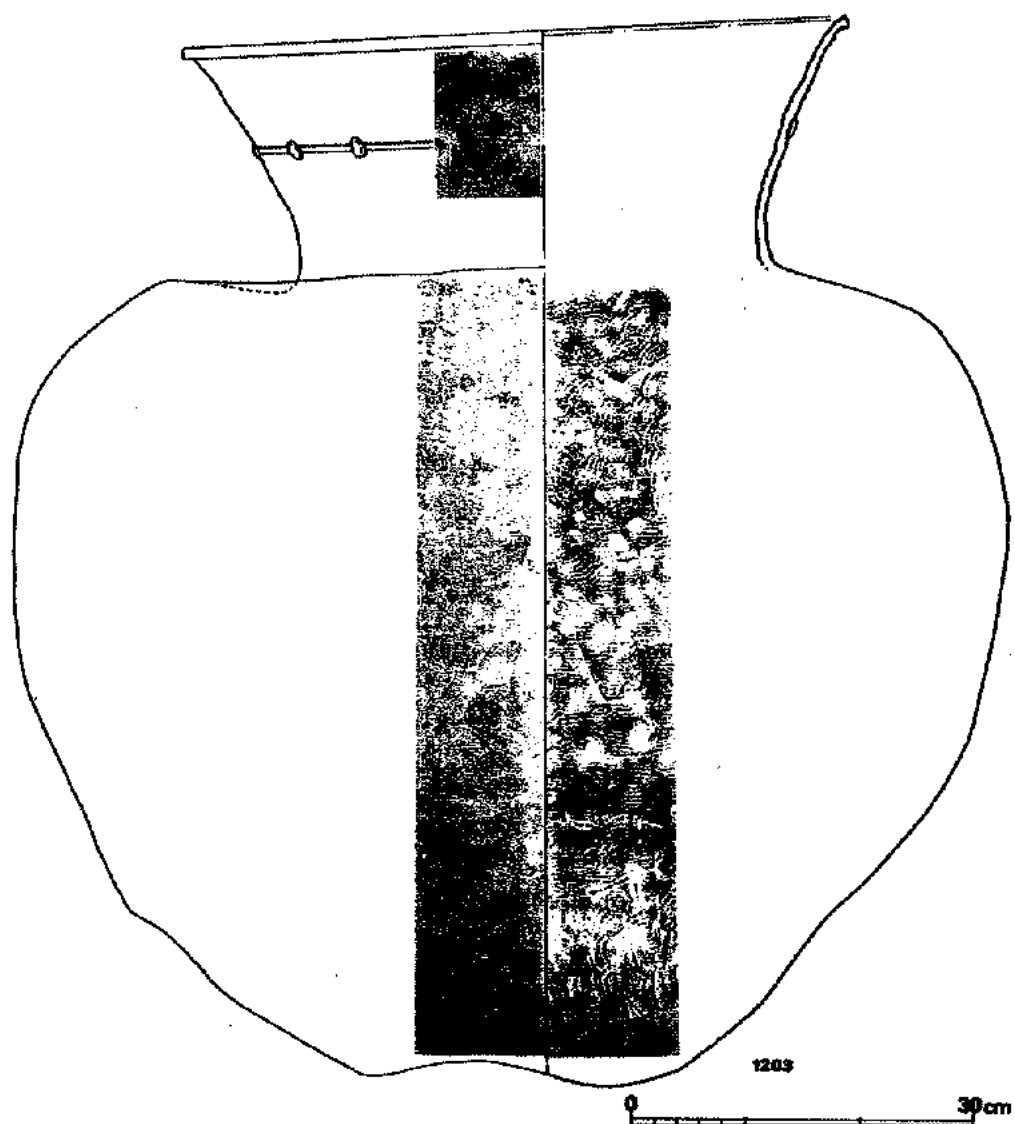


Fig 22 12号墳出土須恵器実測図② (縮尺1/6)

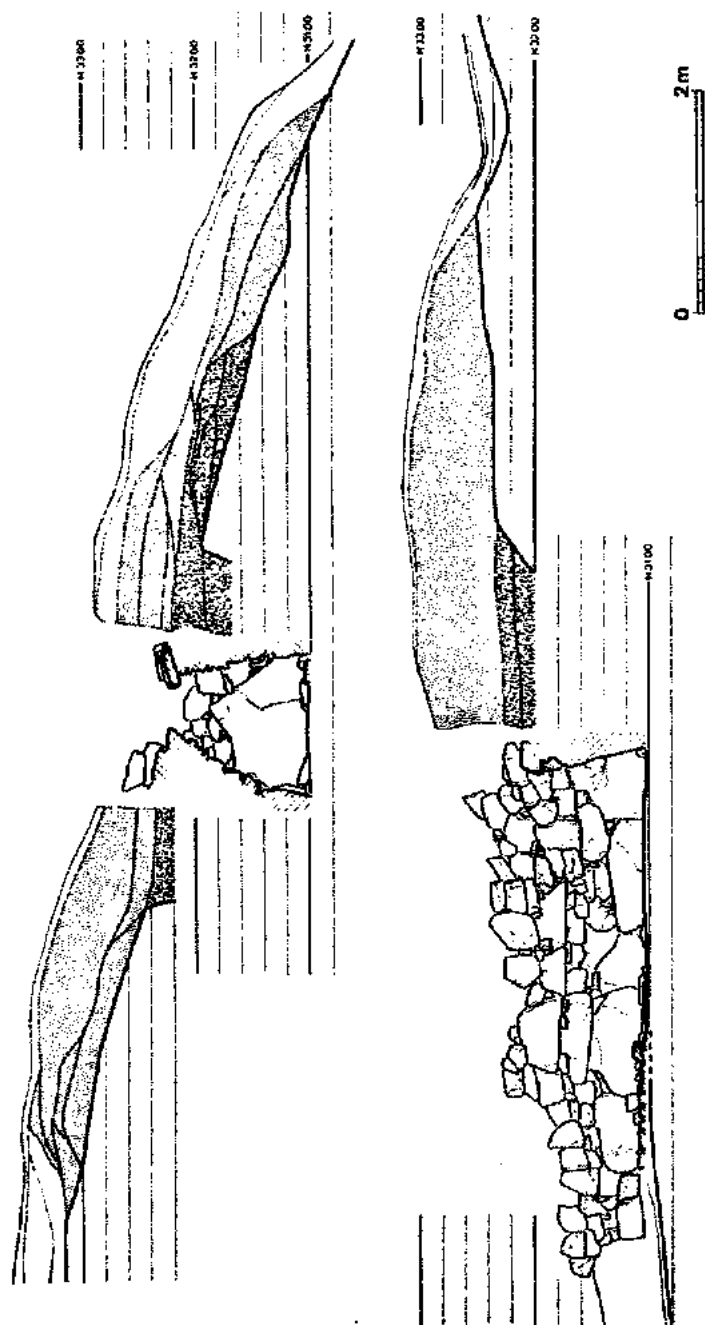


Fig. 23 13号墳土層図 (縮尺 1/60)

13. 13号墳 (Fig 23・24, PL 10 -1)

(1) 立地と現況

等高線が東西から北東-南西へとカーブする隅に位置し、標高 3.354m を最高位とする。墳丘の北側裾部を畝間壁によって削られ、中央部には盗掘による大きな陥没坑がある。

(2) 墳丘

墳丘は谷側に大きく流失し、山側の盛り上がりは少なく、僅かに等高線が張り出す程度である。谷側の墳丘築成第1工程最終段階では掘り方肩部外側にまず盛土して新しく肩部を作り出してから天井石下端レベルへと築いている。第2工程盛り土は、山側及び奥壁側では不明瞭で谷側のみ観察される。墳丘外周のうち山側では巾 2.5m の溝がめぐっている。

(3) 石室

墓壇の上巾は 3.3m、長さは上端で約 6m、下端で約 4m である。主体部は N-172°-W の略南へ開口する単室の横穴式石室である。玄室中央部の内法は 2.24×1.25m で、前巾はやや狭くなっている。奥壁は床面からの高さ 85cm の板状石 1 枚を据え、隙間を中小礫で埋めている。側壁は左右各 3 石を腰石としているが、壁面を構成する各石材が小口に対する控えの取り方が少なく、見かけよりも脆弱な構造である。そのためか、天井石を失った事もあって、西壁が内側へ倒れ込んでいる。本来は腰石から天井石に至るまでほぼ直線的に持ち送りされていたと思われる。床面には一部敷石が残っている。

羨道部は長さ約 2.5m 巾は 0.6~0.7m である。西側壁上部の壊れは著しい。床面中間に仕切り石 2 個があり、その間を板石で敷石している。

墓道は非常に長く、右偏して約 5m 延びている。床面は傾斜している。

閉塞石は外面仕切り石に接して立石 1 個を認めたのみで、床面から 25cm 浮いていた。

(4) 出土遺物

玄室床面からは玉類 2 個が、また羨道埋土中から須恵器 2 個体が出土した。

装身具 (Fig 24, PL 17)

1 は小形の臺玉である。半欠品だが、長さ 1.4cm、巾 0.8cm である。2 は濃紺色のガラス玉である。

須恵器 (Fig 26, PL 19)

平瓶 (1301) と高杯 (1302) である。1301 は底部から頸部にかけてカキメを全面施した精品である。最大胴径 21.6cm、器高 18cm である。1302 の杯部が短く直立した後内湾気味に開いて、端部直立する。脚部は杯部に比して華奢で、端部は薄い。

(5) まとめ

墳丘築成及び石室築造法共に粗さがみられる。玄室がやや縦長で、羨道・墓道共に長い事が

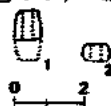


Fig 24 13号墳出土
装身具実測図
(縮尺 1/2)

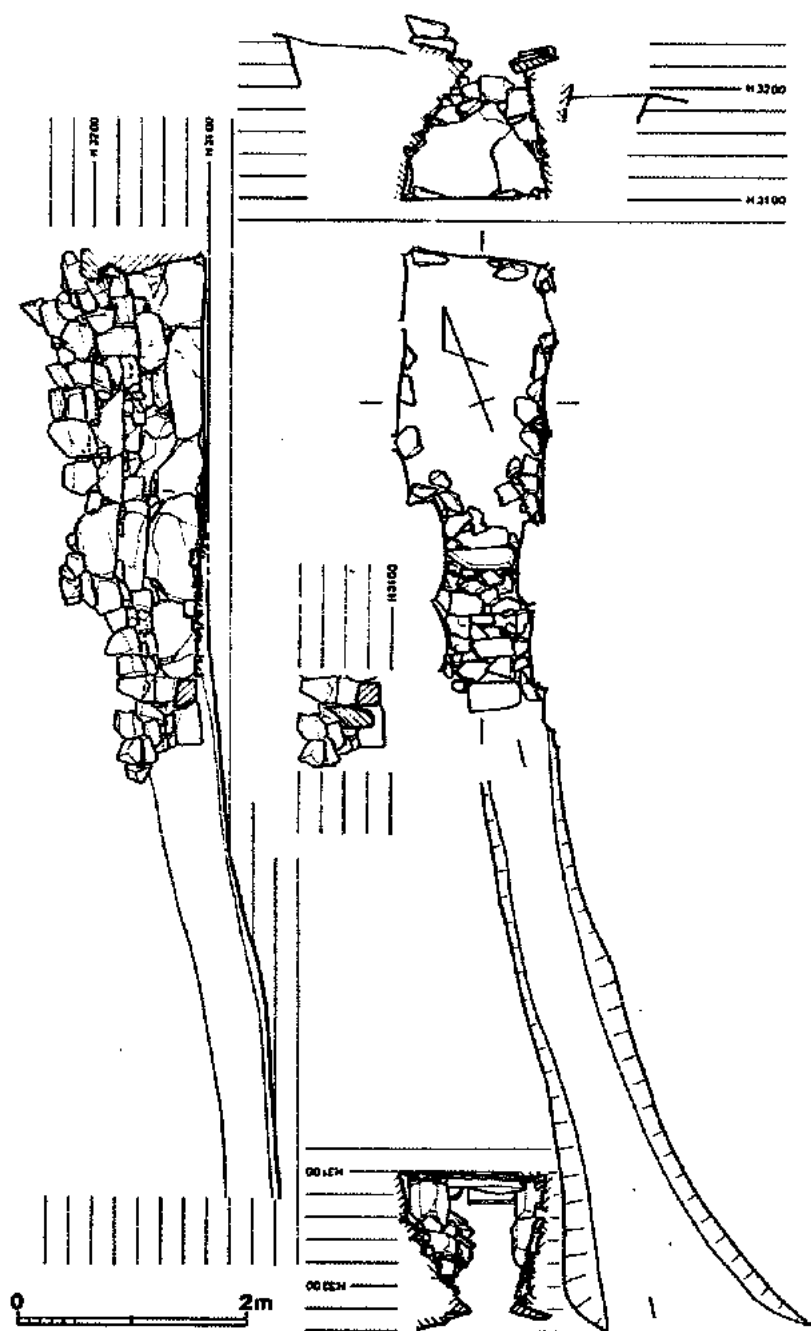


Fig 25 13号墳石室実測図 (縮尺1/60)

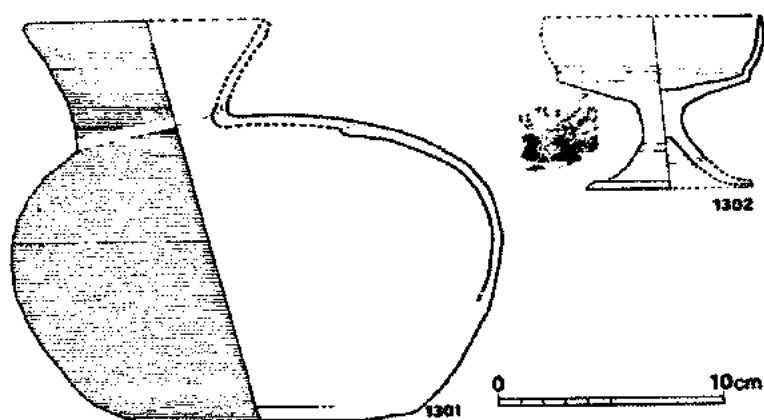


Fig 26 13号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

特徴である。

墓道埋土中出土の須恵器は追葬時に遺棄されたものと考えられる。

以上の事柄をふまえ、当古墳は7世紀中頃に使用されていたと考えられる。

14. 14号墳 (Fig 27, PL 10)

(1) 立地と現況

南東へ向っての傾斜度がかかなり強まり、谷へと落ち込む端部に位置している。標高 33.74m を最高位とし、頂部中央に陥没坑がある。

(2) 墳丘 (Fig 27)

急な斜面に築かれているため山側、つまり奥壁側の墓壇掘り方は深く、かつ控えを長く取っている。その肩部は天井石下面と同レベルに埋められたと思われる。なお、その裏込めとして割石の乱積みを行っている。下位の両側壁側ではそのレベルまで一旦盛り上げを行い、その上から第2工程の築成を行っている。墳丘の径は 7.7m と小さく、また周溝はない。

(3) 石室 (Fig 27)

墓壇は上面で 4.6×3.3m の長方形と思われる。主体部は N-144°-E の南東へ開口する単室横穴式石室である。全体に各部区切りのあまいプランである。玄室の中央内法は 1.80×1.44m で、前巾は狭くなっている。腰石はプランのわりには大石を用いており、特に奥壁をなす1石は床面から 1.5m の高さをもっている。奥壁は直立するが他の用材は全て内傾する。左側壁は若干後世に倒れ込みがあり、また全般に積石の面揃えは悪いが、本来は直線的な内傾度となる持ち送りをしていたと思われる。なお各積石の控えの取り方は短い。床面には敷石が各壁側

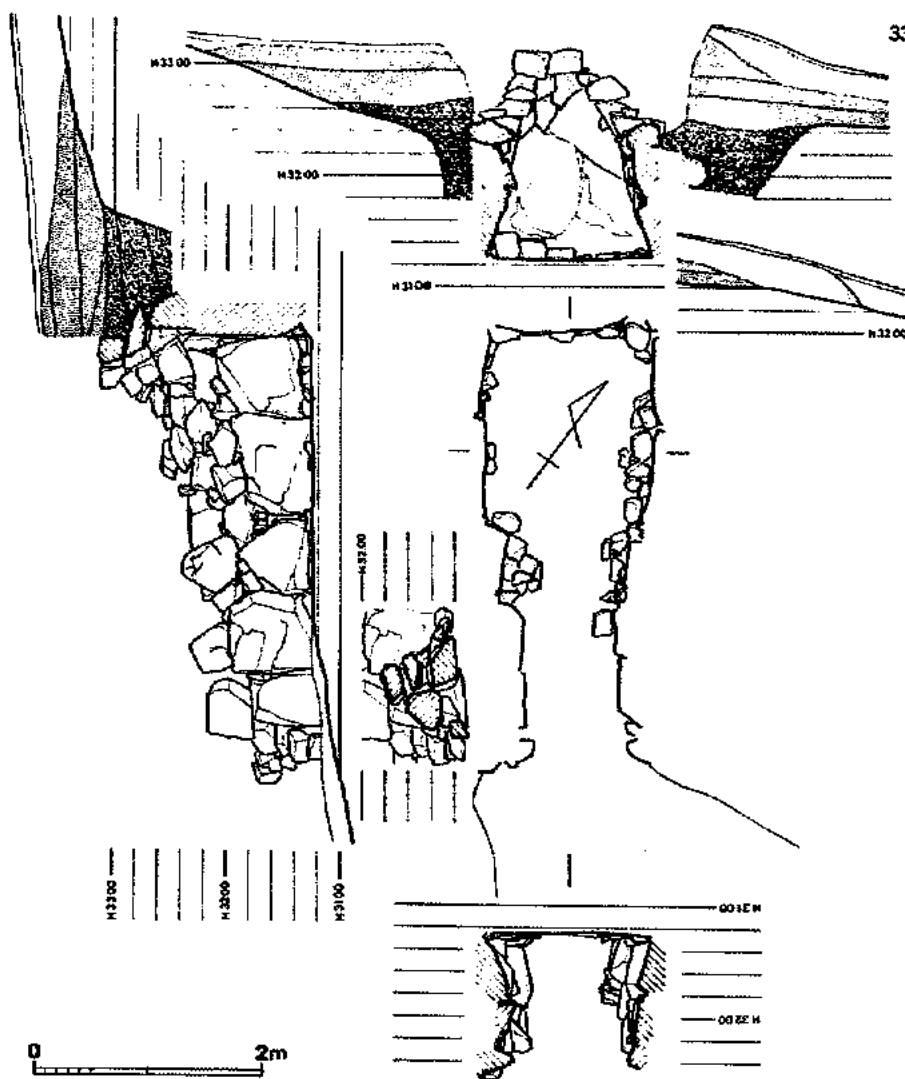


Fig 27 14号墳石室実測図 (縮尺 1/60)

に残っている。

羨道は全長 2.0m である。奥壁 60cm 分の巾は 1.1m と広く、前室的役割を果たしていたかと思われる。前側は 80cm と巾を減ずる。積石は大振りで、前面に小礫を積んでいる。床面には僅かながら敷石がみられ、外へ向って傾斜している。

墓道は地形的制約によって延びず、前庭部を前面に作り、墳丘裾部へと広がっている。

閉塞石は羨道中に長さ 1.35m にわたって山積みされており、よく旧状を保っていた。

(4) 出土遺物

玄室埋土中から金環1、墓道埋土中から須恵器1個体が出土したのみである。

鍔身具 (Fig 28)

細身の金銅製耳環で、平面はやや偏球である。

須恵器 (Fig 29, PL 19)

1401は高台杯である。高台は太く張り、杯部は浅く丸味をもって外上方へのび、端部は僅かに外反する。

(5) まとめ

急な斜面に築かれているため、墳丘築成にそれなりの工夫がみられ、墓道もまた短い。石室プランは3号墳に近いが、前室として供されたとも思える空間がある。全体に各部区切りがいまいなプランであり、石材はプランに比して大形であるので、終末期の古墳といえよう。

出土品中に築造時を示すものはないが、8世紀初頭にも使用されていた古墳といえよう。

15. 15号墳 (Fig 30 ~ 33, PL 11)

(1) 立地と現況

14号墳の西側に接したやや上位置に立地する。当古墳付近を境に等高線は直角に曲り、向きを南西-北東から南東-北西へと転ずる。標高 35.82mを最高位とする。墳頂には盗掘による陥没坑がみられる。

(2) 墳丘 (Fig 30)

墳丘は西側、つまり14号墳墳裾部にかけてかなり流出し、墳丘の上をさらに被っている。墓坑内の石室裏込めは固く版築されているが、墳土盛り上げの第2工程は不明瞭である。墳丘径は石室主軸側に長い13.5×10.5mの楕円形を呈する。

(3) 石室 (Fig 31)

約3×7mの長方形墓坑中に築かれている。主体部はN-172°-Eの略南に開口する複室横穴式石室である。玄室は長方形プランで、中央内法は2.17×1.40mである。奥壁腰石は床面から1.1mの高さがあり、断面も厚く、ドッシリしている。側壁用材の腰石は奥壁に比して低いが、全般的に見かけ大振りの石材を用いている。但し控えは短い。床面は割石によって敷石され、前半の箇所を板状石で区画されている。

前室巾は玄室のそれにほぼ等しく約1.40mで、長さ1.20mと方形に近い。床面は小さな割石とやや大きめの河原石をもって敷石されている。



Fig 28

14号墳出土
鍔身具実測図
(縮尺1/2)

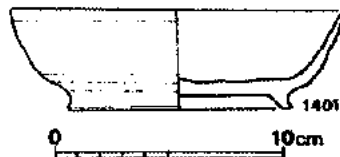


Fig 29 14号墳出土須恵器実測図

(縮尺1/3)

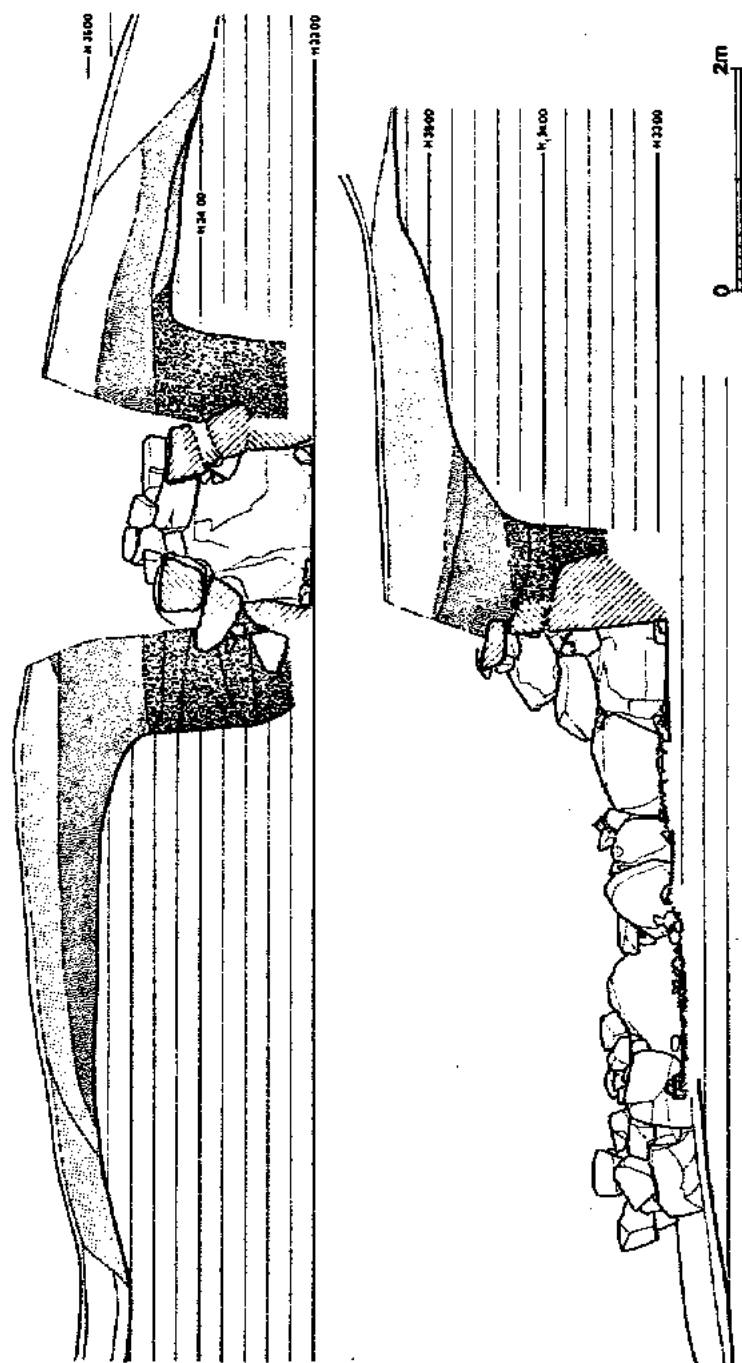


Fig 30 15m 填土断面图

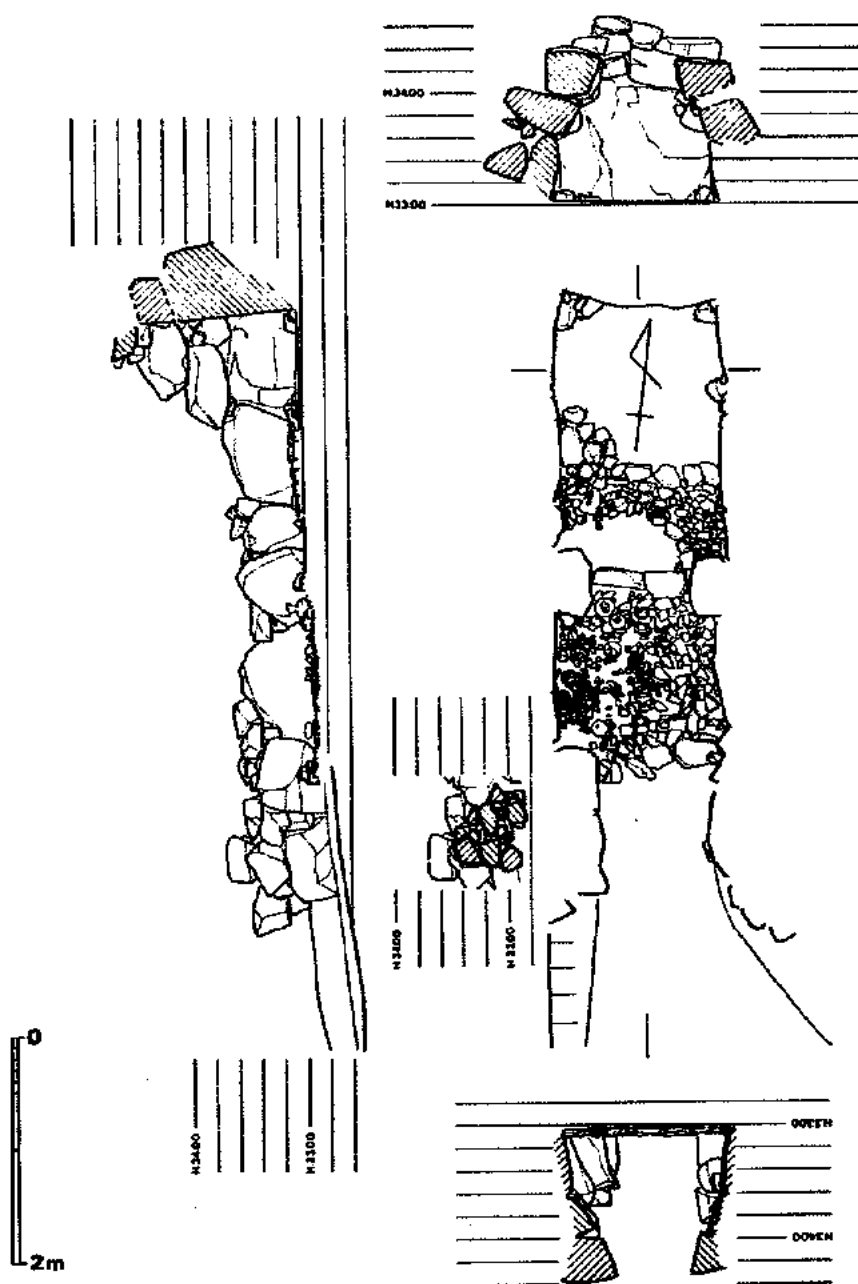


Fig 31 15号填石室平面图

羨道巾は玄門巾とほぼ等しく約90cm、長さ 1.3mで、前庭部へと広がっている。床面は外方へ傾斜している。

閉塞石は、羨道中央の床面上に山状に横積みされている。

(4) 出土遺物 (Fig 32・33, PL 11・17・20・21)

前室及び玄室の床面上から須恵器、土師器、鉄器が集中して出土した。前室では中央から西壁側に集中し、壁側中央から鉄鏃が出土した。玄室では東南隅に須恵器1個体が、西壁側から

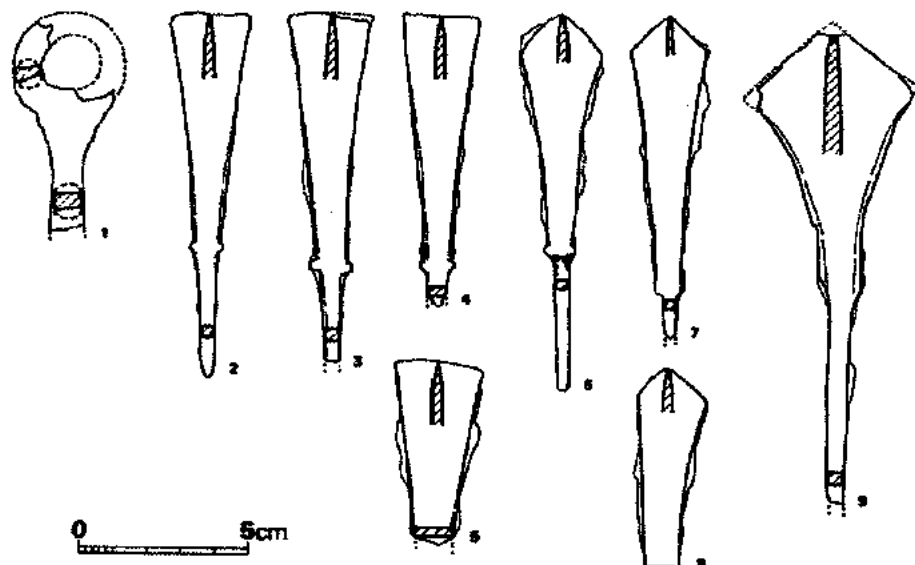


Fig 32 15号墳出土馬具・武器実測図 (縮尺1/2)

鉄鏃と馬具が出土した。また前庭部からの須恵器出土例も多い。

武器 (Fig 32, PL 17)

鉄鏃のみである。2～5・7・8が前室の出土。6・9が玄室出土品である。全て広根鏃で2～4の円頭斧箭式は全て棘鹿被である。9の茎端は欠失しているが長さ14.5cm以上、刃部最大巾約 5.3cmと極めて大きい。両関である。

馬具 (Fig 32 -1)

轡の環部片である。

須恵器 (Fig 33, PL 20・21)

前庭部からの出土品は1501～1503・1505・1510・1512・1514～1516である。前室からは1504・1506～1509、1511・1517・1518が、玄室から1513が出土した。

蓋 (1501・1502) はボタン状ツマミをもつものと宝珠状ツマミをもつものがあり、前者が身に深味がある。口縁端部は両者共折りまげるのみである。

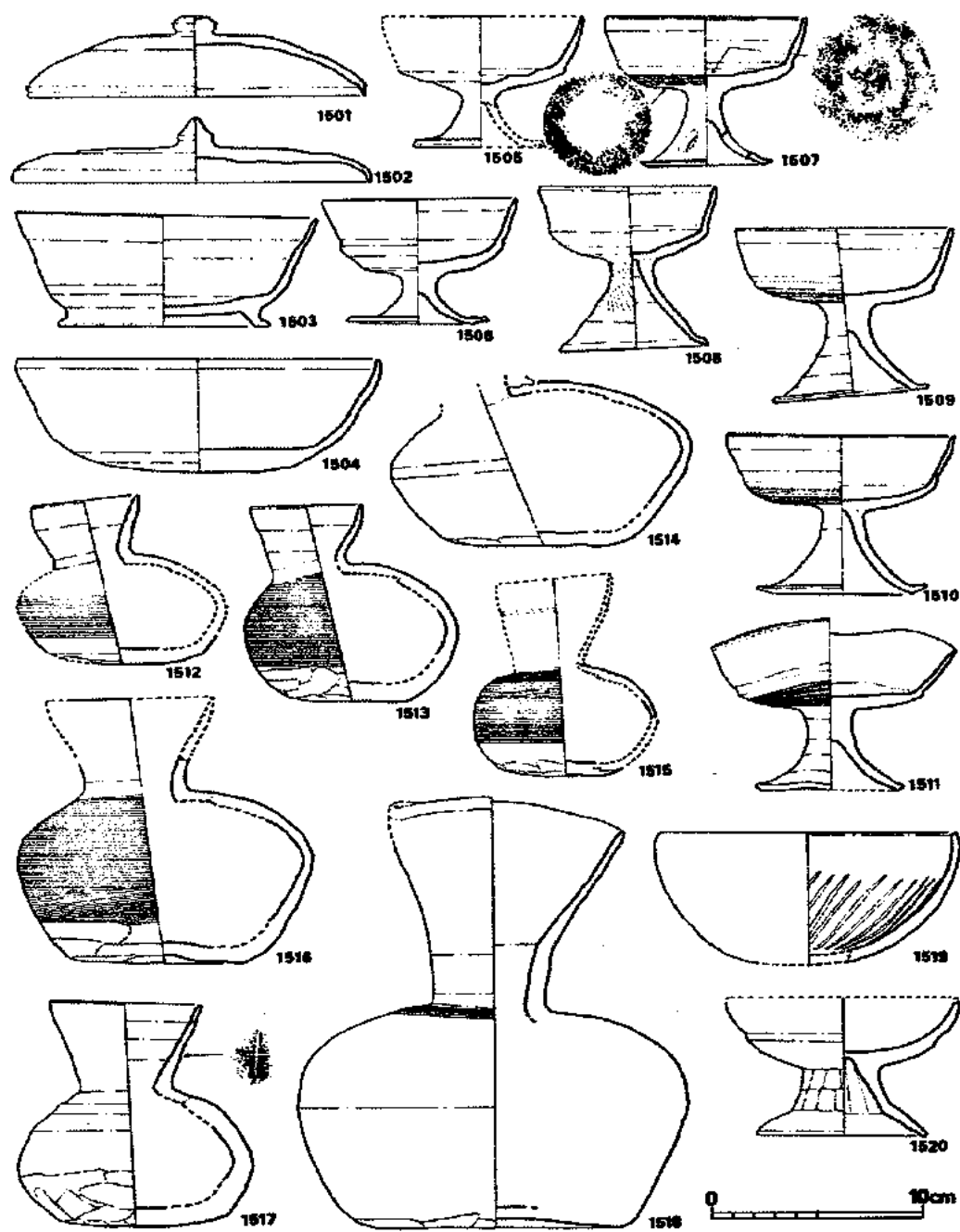


Fig 33 15号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

高台杯(1503)の高台は底面平坦で、端部は強く外へ張る。身部は外上方へ直線的に伸びる。
杯(1504)の底部は部厚く、丸味をもった平底である。身部上半は外上方へ直線的に伸び、
端部は直立する。

高杯(1505~1511)は全て短脚で、杯部は有段である。脚部に透しをもつものがある。(1507)。
脚端は短かな裾部をもつが、1511のみは例外である。なお1507のヘラ記号は特殊である。

平瓶(1512~1517)は小形品と中形品がある。頸部貼り付け位置にはバリエーションがあり、
一定しない。胴部は1514が偏平で、胴中央に軽い稜をもっている。調整法は底部がいつでも停
止ヘラ削り、胴部はカキメを施す例と、ヨコナデの例がある。

壺(1518)は長頸壺で、底部は平坦である。胴部中央に軽い稜をもつ。肩部にのみカキメを
施している。

土師器 (Fig 33, PL 21)

碗と高杯がいつでも前室から出土している。1519は外面の胴下半を停止ヘラ削り調整し、内
面に暗文を施している。高杯の杯部は有段で、碗状であり、短脚を細かくヘラ削りしている。

(5) まとめ

石室は前室が玄室と同巾をもち、広い。また玄門市や羨道巾も広く、全体に締りのないブラ
ンである。墓道は地形的制約によってなく、唯前庭が広がっている。

出土遺物中には馬具を含んでおり、他の古墳では例を見ない。須恵器は玄室、前室、前
庭部で出土しており、石室内出土品が最終埋葬当時の状況を残している。前庭出土品は追葬時
の廃棄品と考えられる。しかし出土品には形式差はなく、近時点のものであろう。

以上のことから、当古墳は7世紀中葉に使用されていたと考えられる。

16. 16号墳 (Fig 34, PL 12)

(1) 立地と現況

谷から見て13・14号墳の後背にあり、僅かにそれとわかる墳丘を残していた。盗掘坑はみら
れなかった。墳頂は36.91mを最高位とする。

(2) 墳丘 (Fig 34)

径8.4mの円墳である。地山上に最高90cmの厚さの盛り土を残していた。天井石レベルとの
関係から、ほぼ旧状に近い盛り土と思われる。西側つまり山側では墓壇肩部のレベルと天井石
上端レベルが等しく、石室全体が墓壇の中に入ってしまうからである。築成3工程は一応認め
られる。

(3) 石室 (Fig 34)

墓壇上端は約3.1×3.4mの方形と思われる。主体部はN-168°-Wと略南に開口する単室

横穴式石室である。玄室は狭長で、中央内法は $2.1 \times 0.9\text{m}$ であり、前巾は狭まっている。奥壁腰石は1個で、床面境の隙間に詰石をしている。側壁の腰石は奥側2石が割合標高な用材であるのに対し、前側は低く、積み方に差がある。この前側巾が狭く、その間のみ平石が敷かれている点から、奥部と前部に用途の差があったのかと思われる。つまり前部は複室式石室

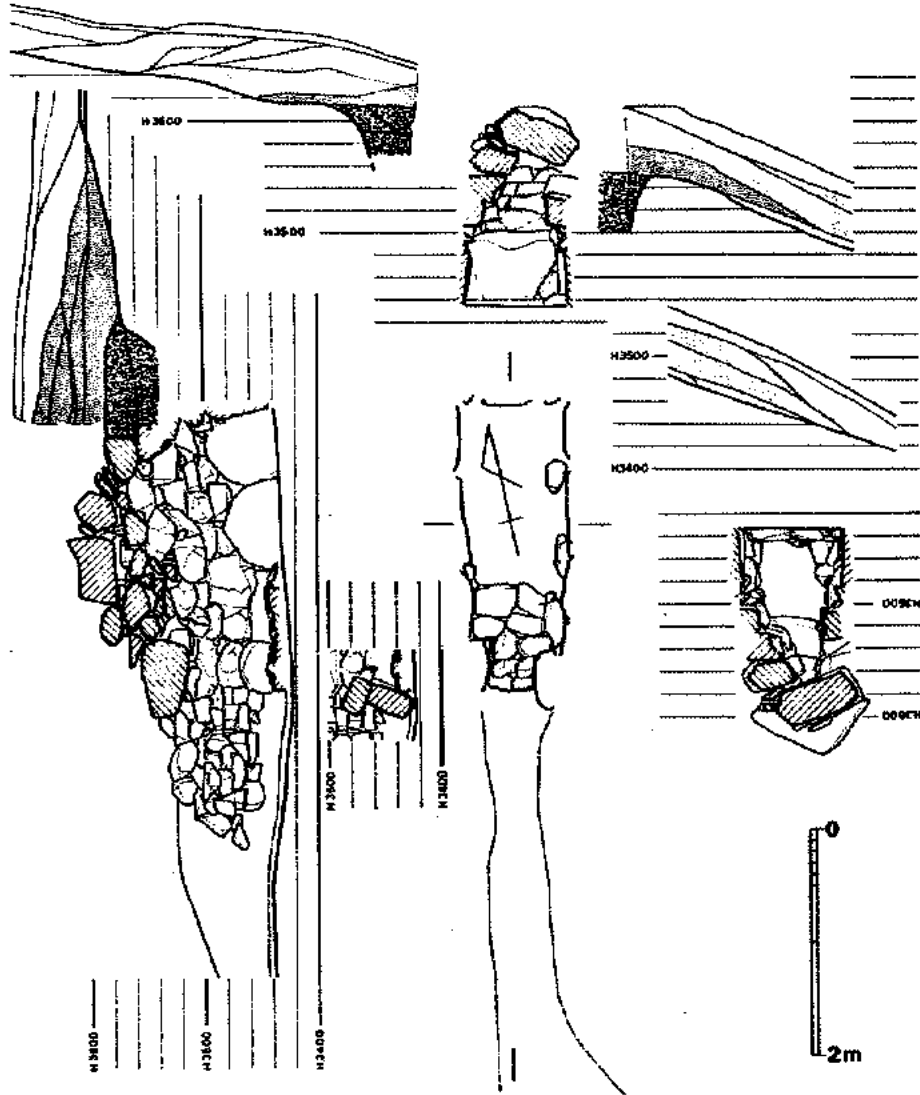


Fig 34 16号墳石室・土層実測図 (縮尺1/60)

の場合の前室の、奥部は玄室としての使い分けが考えられる。

用材の面揃えは雑で、控えの取り方も少ない。そのためか西側壁は内側に激しく倒れ込んでいる。天井石は2石で床面からの高さは本来1.45～1.5mであったと思われる。

玄門巾は40cmでこの間も敷石されている。床面は玄室から直線的に傾斜しているが、敷石上面レベルは水平である。敷石上面から天井石までの高さは75cmである。敷石前面に床面上から閉塞石が2石残っていた。

羨道部はなく、玄門から即墓道へと続いている。但し、玄門側1.3mの両側は石積みされている。墓道全長は3.5mである。床面レベルは閉塞部から2mまでは上がり、その後下向する。

(4) 出土遺物 (Fig 35, PL 12・22)

墓道西側層部から須恵器3点(1604～1606)と土師器1点(1607)が一括出土した。土師器碗の上に高杯が置かれていた。高杯は倒れていたが、他は全て口縁部を上にした状態であった。但し、墓道がかなり埋った段階での配置であり、古墳使用時の状態かどうかは不明である。他に墓道の埋土中から須恵器杯3点が出土した。

須恵器 (Fig 35, PL 22)

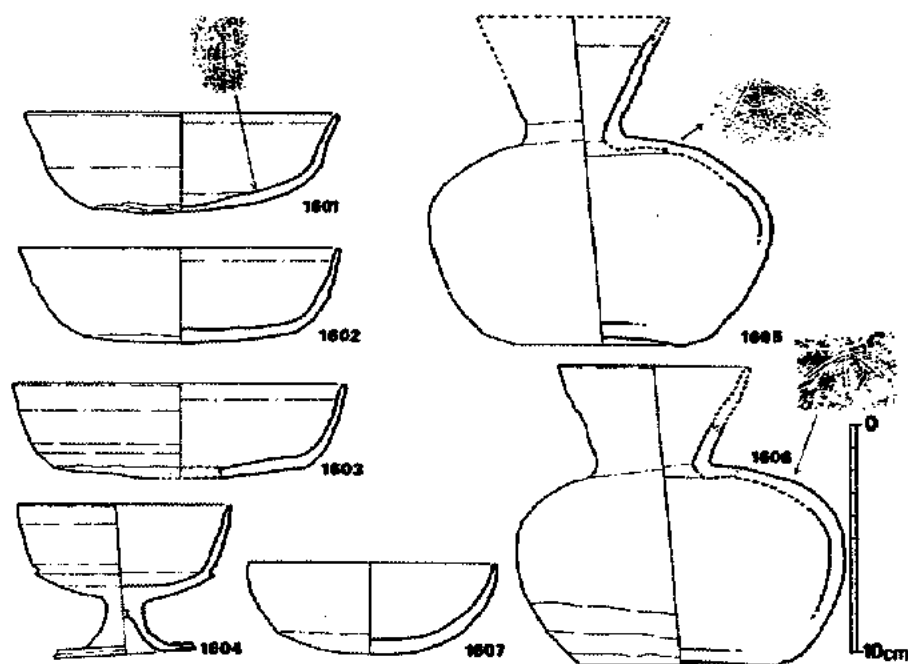


Fig 35 16号墳出土須恵器・土師器実測図

杯(1601~1603)は底部が僅かに丸味を持ち、口縁部はやや外反する。1601は身部中央に稜を持ち、強く外反する。口径は1601が28.0cm、1602が28.5cm、1603が29.5cm、器高は1601が9.0cm、1602・1603が8.5cmである。

高杯(1604)は短脚で身部は深く有段である。身部に比して脚部は華奢で端部は薄い。

平瓶(1605・1606)1605の器高がやや高く14.5cmである。底部は上げ底で、胴部境に稜をもつ。口縁部は外反する。1606は器高が13.2cmで前者に比して頸部のしまりはゆるく、口縁部は直立気味となる。但し2者は同一ヘラ記号を有している。

土師器 (Fig 35-16)

小形碗である。口径10.7cm、器高4.0cm。外面底部は停止ヘラ削りである。

(5) まとめ

小形の墳丘及び石室である。石積み法も面揃えが悪く、また控えの取り方が短い。ただ興味深いのは小規模石室とはいえ、玄室内が前奥使い分けられていたと考えられる事である。

墓道から出土した一括土器類は意識的に配置されたものかどうかは別として、古墳使用時の遺物であり、7世紀中葉の所産である。

17. 17号墳 (Fig 36~38, PL 13~1・22)

(1) 立地と現況

15・16・18・19号各古墳の間隙を縫ったような斜面に築かれている。墳丘は僅かにそれと認められる程度の残りで、斜面下方に広範囲に張り出していた。その張り出し部の一部に盗掘坑と思える陥没坑がみられた。標高39.58mを最高位とする。

(2) 墳丘 (Fig 36)

径約7.5mの円墳である。地表を残したまま上に盛り土されて築成している。工程の詳細は残存状態が悪く不明。奥壁側には周溝が掘られている。

(3) 石室 (Fig 36)

掘り方は上端約2.8×4.5mの方形プランであろう。主体部は真南に開口する単室横穴式石室である。玄室は狭長で、中央部内法は2.26×1.24mであり、前巾がやや狭い。奥壁腰石は2石を用い、側壁では各4石を用いている。上積みの石材はプランの割には大振りであるが、控えはあまり取っていない。持ち送りの面揃えは雑である。床面は平坦である。

羨道は長く1.8mあり、ほぼ玄室長に近い。巾は72cmで玄室巾の約3/4である。両側壁各3個の腰石を据え、前面に角礫を積み上げている。床面は墓道へと傾斜している。

地形との関係で墓道は長い。

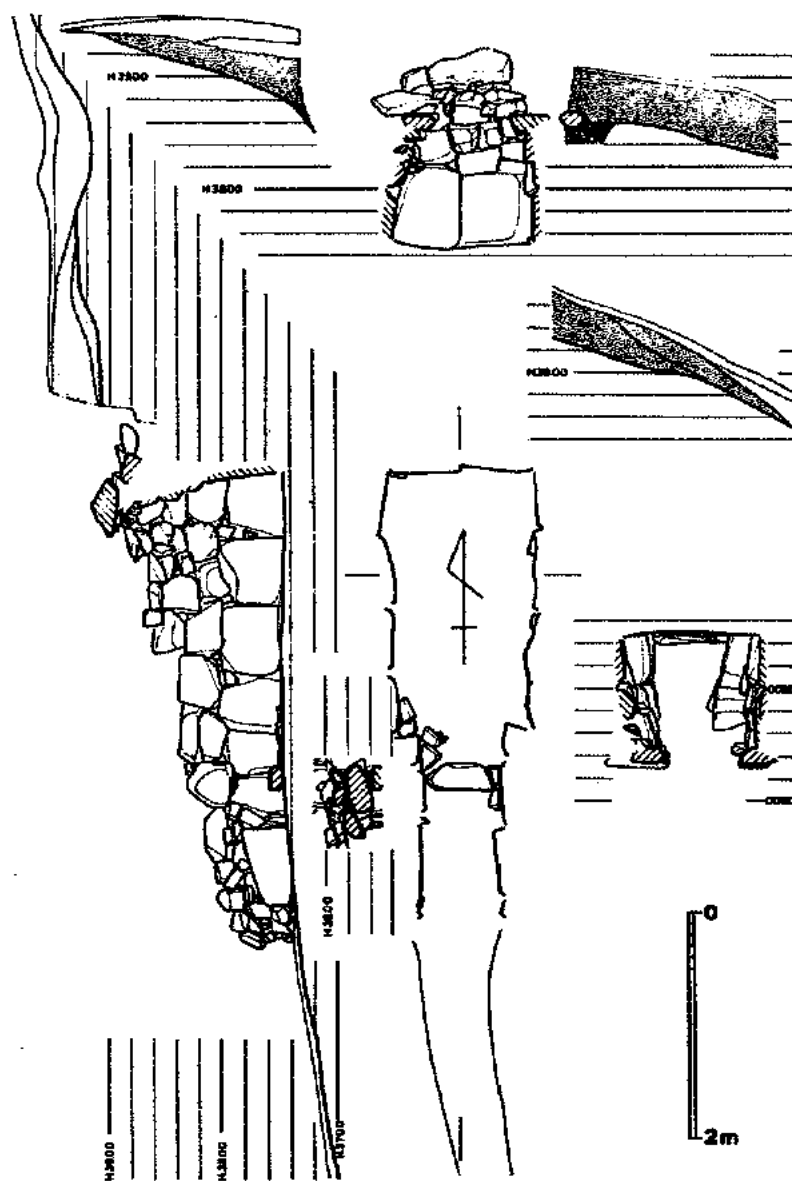


Fig 36 17号墳石室・土層実測図 (縮尺1/60)

(4) 出土遺物 (Fig 37・38, PL 22)

墳丘中から甕が、墓道の埋土中から須恵器が出土した。

須恵器

蓋2 (1701・1702)、高台杯2 (1703・1704)、杯1 (1705)、高杯1 (1706)、平瓶2 (1707・1708) が含まれる。

蓋は扁平なボタン状ツマミを持つ。ヘラ削りされた頂部は平坦で、折り返し口縁部は長く、直立に近い。口径16.2cmである。1702は焼歪んでいるが、略同径と思われる。

高台杯の高台は付根太く、締って立ち端部は鋭く張り出す。体部は深く、直線的に開いて、端部は僅かに外反する。1703は口径14.5cm、器高5.5cmである。

杯の体部は球状に伸び、口縁部は直立する。底部は未調整である。口径9.1cm。

高杯の杯部は底部から丸味を持ち、体部上半に僅かな段を有する。下半外面はカキメ調整である。

平瓶はいつでも底部上げ底で、停止ヘラ削り調整である。1708は体部下半が直線的に伸び、上半との境に軽い稜を有する。1707は体部下半に丸味をもつ。

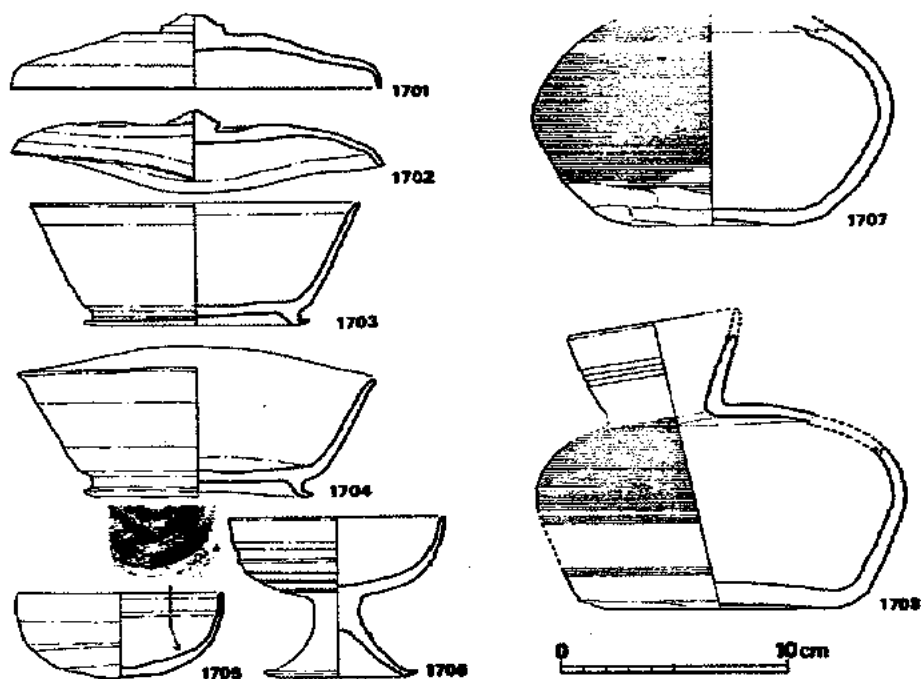


Fig 37 17号墳出土須恵器実測図① (縮尺1/3)

甕は口縁部が短く外反し、端部は平坦で内側は鋭く尖る。端部外面に三角凸帯がめぐる。体部は肩が張り、丸い。外面は長格子タタキの上に粗いカキメを施している。内面は細かい青海波文である。焼成は良好で、自然釉がみられる。

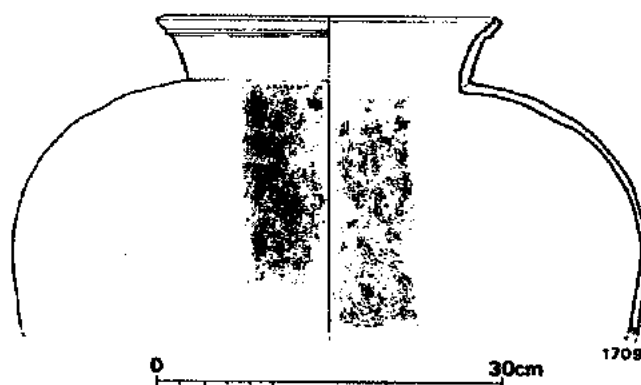


Fig 38 17号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

(5) まとめ

墳丘径は14・16号墳と同様に小さい。石室は狭長で、玄室巾と羨道巾の差が少ない。プランの割には大振りの石材を用いている。地形との関係で墓道は長い。このことから終末期古墳といえる。

出土品は墳丘中と墓道埋土中出土の須恵器のみである。7世紀前半の1705から8世紀中葉の1703・1704を含んでいる。8世紀中葉の遺物を出土する古墳は調査例中になく、当古墳ではこの時期まで使用されていたと考える方が妥当であろう。出土遺物よりみて18～20号墳より後出であり、そのため立地する斜面も各墳間の狭間しか利用できなかったのであろう。

18. 18号墳 (Fig 39・40, PL 13)

(1) 立地と現況

北西―南東に延びる崖線近くに立地する。崖際には盗掘による排土が山をなし、中央部から崖側に大きく陥没坑があいていた。墳頂の最高位点は標高 39.54mである。

(2) 墳丘 (Fig 39)

地山上に最高80cmの墳丘があり、数層の盛り土が観察されたが、大規模な盗掘によって大半を荒され、詳細は不明である。なお、北側に掘ったトレンチでは巾 2.4mの周溝が観察された。

(3) 石室 (Fig 40)

上端辺 4.7× 5.5m、奥壁側での深さ 2.3mの方形と考えられる墓域中に作られている。石室用材の大半は失われ、羨道部と玄室腰石 1石を残すのみであった。石材掘り方等を加味して考えると、主体部はN-148°-Wの南西方向に開口する単室横室横穴式石室である。玄室の中法は 2.2× 2 m前後と思われる。羨道は長さ1.75m、前巾0.65mで、奥巾は若干広がるようである。以下仔細不明。

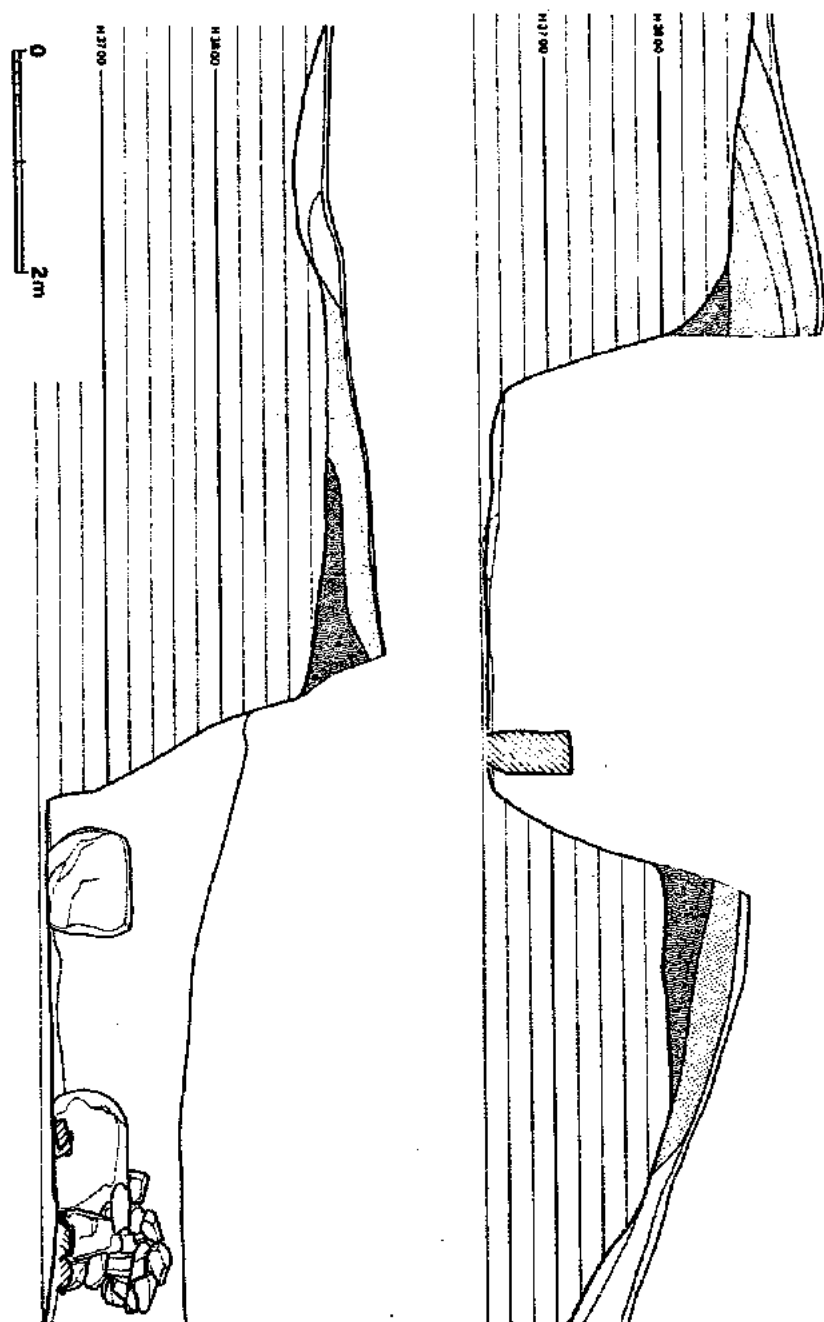


Fig. 39 18号墳土層実測図 (縮尺1/80)

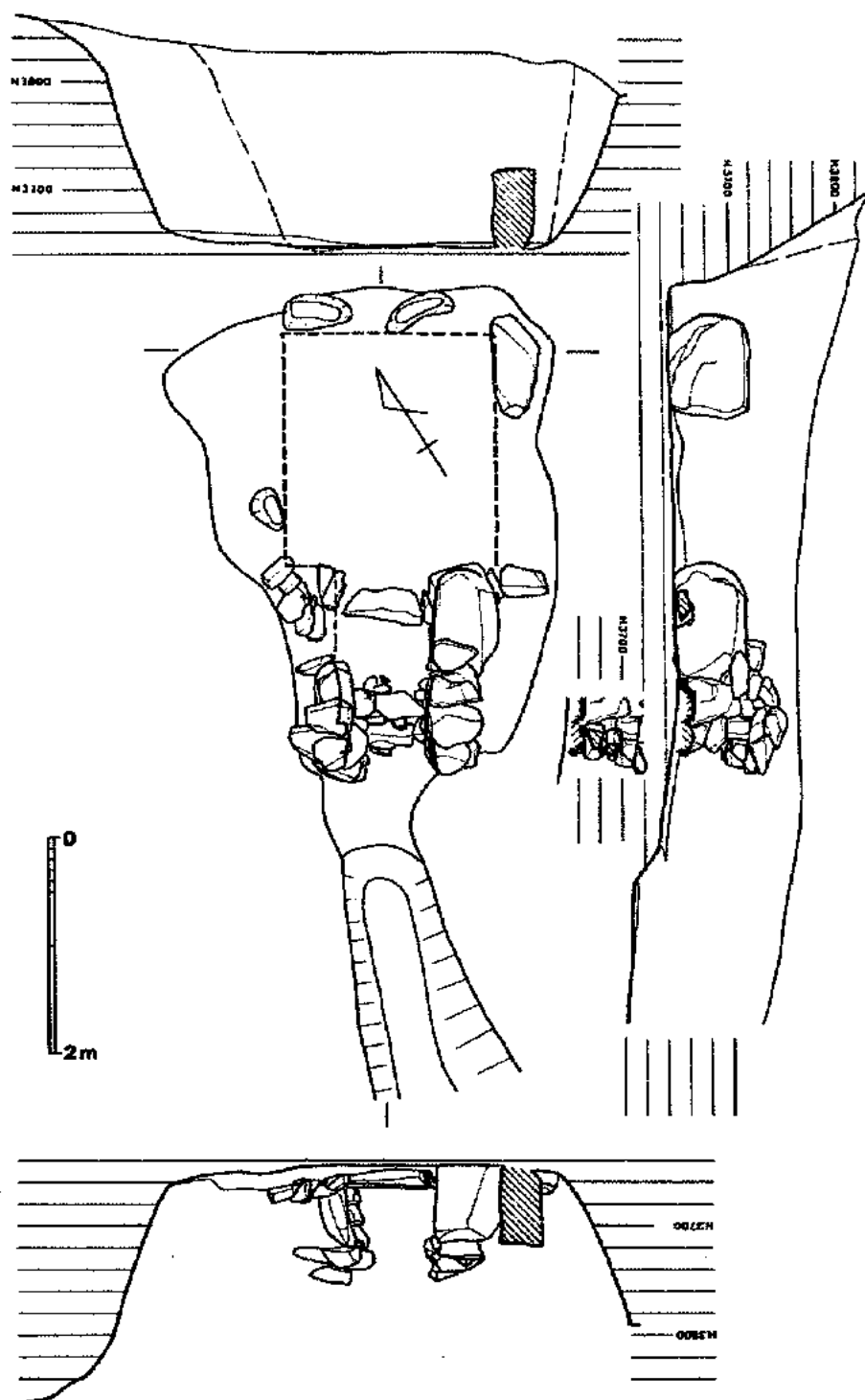


Fig 40 18号墳石室実測図 (縮尺1/60)

(4) 出土遺物 (Fig 41, PL 23)

墓道埋土中より須恵器10点が出土した。蓋杯・高台杯・高杯・甕・脚である。

蓋杯 (1801~1804) は2類に区分される。1類: 1801~1803が含まれる。1801の蓋は頂部丸くへら削りされている。口径11.5cm、器高 3.7cmである。1802と1803はセットになる。1802の蓋は頂部丸く、へら削りされており、口縁部は直立する。口径10.0cm、器高 3.5cm。1803の身は扁平であるが、蓋受けの立上りは高い。受部径10.4cm、2類: 1804の身は底部が僅かに丸味をもち、口縁部は直立する。口縁部径 9.9cm、器高 3.9cm。

高台杯 (1805~1807) は蓋2、杯1が含まれる。蓋のツマミは甲高で、稜は鋭い。天井部はへら削りである。折りがえしは緩慢である。杯の高台は強く外へふんばり、端部は尖る。底部と体部の境に稜があり、体部は丸い。

高杯 (1809) の口径は10cmとやや大きい。体部中央に浅い凹線をめぐらしている。底部へら削りである。口径に比例して底径も大きめで裾部が水平に近くのびる。

甕 (1810) は口径11.8cmと大きく張る二重口縁をもつ。胴部下半にへら削りを施している。脚裾は薄く、水平に張る。

脚 (1808) は細味で均一器壁をもつ。体底部はへら削りしている。蓋の脚であらう。

(5) まとめ

墳丘・石室共に大きく破壊されており、旧状を知る事は困難である。

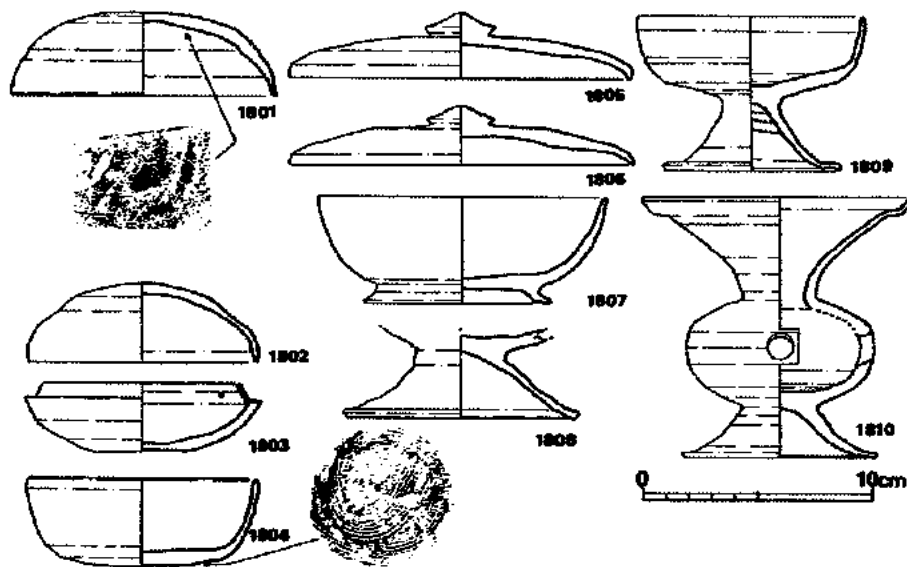


Fig 41 18号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)

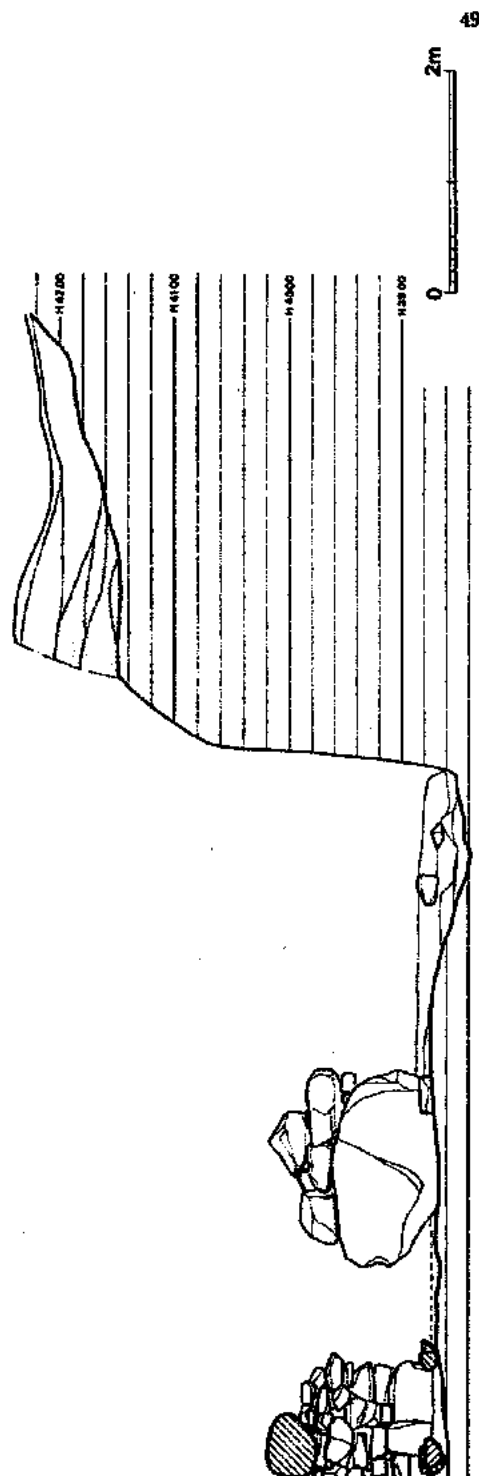
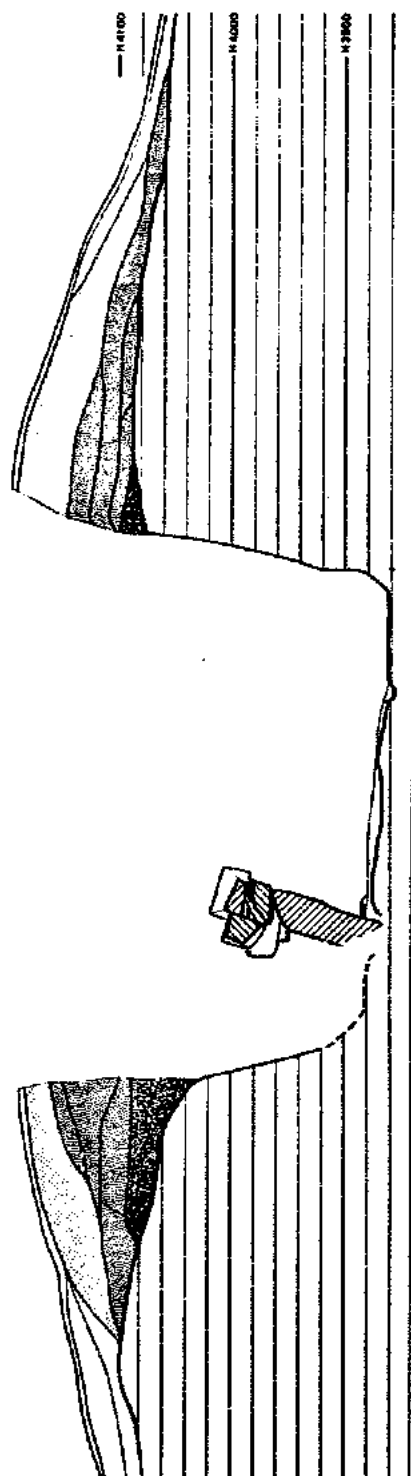


Fig 42 19号墳土層実測図 (縮尺 1/60)

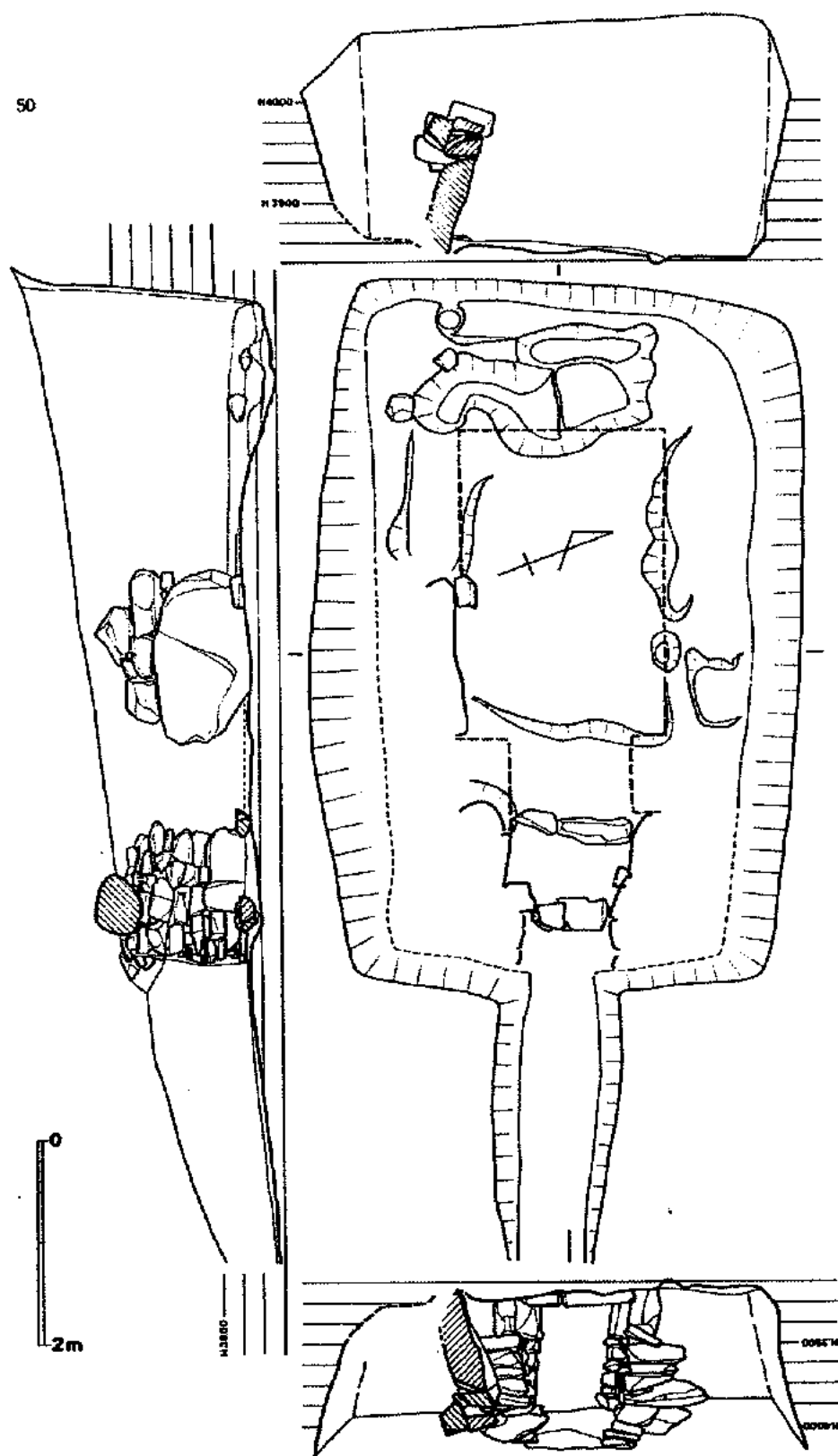


Fig 43 19号填石室实测图 (缩尺 1/60)

墓道出土の須恵器は少量にしては多形式の例を含んでいる。蓋杯1類と高杯・甕は7世紀前半の、蓋杯2類は7世紀中葉、高台杯は7世紀後半の須恵器である。明確ではないが、この古墳は7世紀前半に築造された可能性がある。

19. 19号墳 (Fig 42・43, PL 13)

(1) 立地と現況

17号墳の北側に近接し、等高線が東西方向から南西-北東方向へと移行する換点に位置する。中央に大きな盗掘による陥没坑があり、墳丘の南側から東南裾部にかけてその排土が厚く堆積していた。墳頂は標高 42.59m を最高位点とする。

(2) 墳丘 (Fig 42)

径10.5mの円墳である。墳丘の破壊が甚しいため、築成工程を明確にすることは困難である。可能性としては横断面にみえる掘り方層から伸びる層までを第1工程、墳丘裾からのびる盛土中間層以下の3層を第2工程、その上を被う最上層が第3工程の盛り土といえる。山側つまり奥壁側の墓室深さは2.7mと深く、第1・2工程を示す盛り土は残っていないと思われる。

(3) 石室 (Fig 43)

墓室は上端で4.6×6mと大きく、上述のように深さは最高2.7mと極めて深い。中の主体部はN-110°-Eの南東方向へ開口する単室横穴式石室である。開口方向が南東を向く例は調査した中では唯一である。

石材は玄室側壁1石と、羨道前半の両側のみである。石室掘り方によって玄室プランを想定すれば、長さ3.0m前後、巾2.0m前後となろう。残存する唯一の側壁腰石は巾1.7m、床面からの高さ1.0mあり巨材である。通例からして奥壁及び奥側々壁はより大振りとなり、往時の石室の姿が忍ばれる。

羨道前半の石材の残りはよく、床面の1.0m上には天井石1個が架されている。側壁は枕状石の小口積みで垂直に立ち、まったく持ち送りしていない。羨道間床面には仕切り石を2個所配

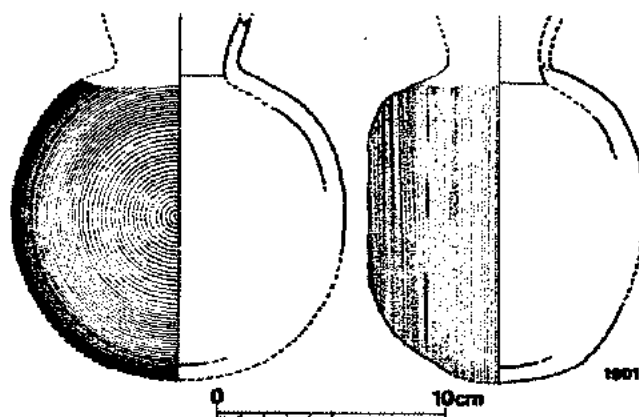


Fig 44 19号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

している。

墓壇の深さと関連して墓道は長く、4.0m直線的に延びる。

(4) 出土遺物 (Fig 44, PL 23)

北西墳丘中及び墓道埋土中から出土し、接合した須恵器提瓶1点のみである。口縁部を欠失しているが、平面球形、側面も部厚い。胴部全面カキメ調整である。

(5) まとめ

推定される石室プランは18号や後述する21号と同様である。しかし墓壇の深さや石室各部位の計測値は大きく、残された石材のみをみても巨材であり、積み上げ技術も巧みである。

唯一の出土品である提瓶は7世紀初頭には消滅する器種であり、該時期に築造された古墳と考えられる。

20. 20号墳 (Fig 45・46, PL 13)

(1) 立地と現況

18号墳の北西、上レベルに近接する。墳丘の北から東西にかけては各々2mの落差があり、急な鞍部を利用している。墳頂の標高42.26mを最高位点とする。中央に盗掘による大きな陥没坑があり、その排土は東西の墳丘上から墳丘裾部へと棄てられている。

(2) 墳丘 (Fig 45)

径11.3mの円墳である。墳丘は大半が失われ、その築成工程を如実に把握することは困難である。が、墓壇の立体的形状と僅かに残る盛土層位を勘案するならば、一種考え方が可能となる。つまり、山側（奥壁側）と両側中央の墓壇肩部レベル差は表土面でみられた2mの差はないにしてもかなり急で、東側で約90cm、西側で約1.2mの差がある。主体部床面から2m上の各面層位を見た場合、東壁では上段肩部から生じた盛り土3層が西壁の地山上2層の上面レベルとほぼ一致する。奥壁側で同一レベルの層を見た場合下位2層がそれに匹敵するが、上層は墓壇壁との間に上から落ち込む層を喰み、下1層のみが先述東西壁での所見に見合うこととなる。よって各層面の以上が第1工程の盛り土と考えられる。第2工程を示す盛り土は通常石室天井石を被い込む範囲でのみ（一定の広さを持つとしても）行われるので、当古墳の場合判定に苦しむ所である。唯奥壁側墓壇肩部より盛られた数層は第2工程盛土の一部をなすのではないかと考えられる。記述下した層以外は盛り上げ最終段階の第3工程のものとする以外の根拠は持たない。

(3) 石室 (Fig 46)

盗掘の際に根拠を落して打ち破られた玄門石1個とそれに続く羨道部巾を示す両側の小石各1個が、主体部がいかなる形状であったかを示す一級資料で、他は石材抜き痕と裏込め石のみ

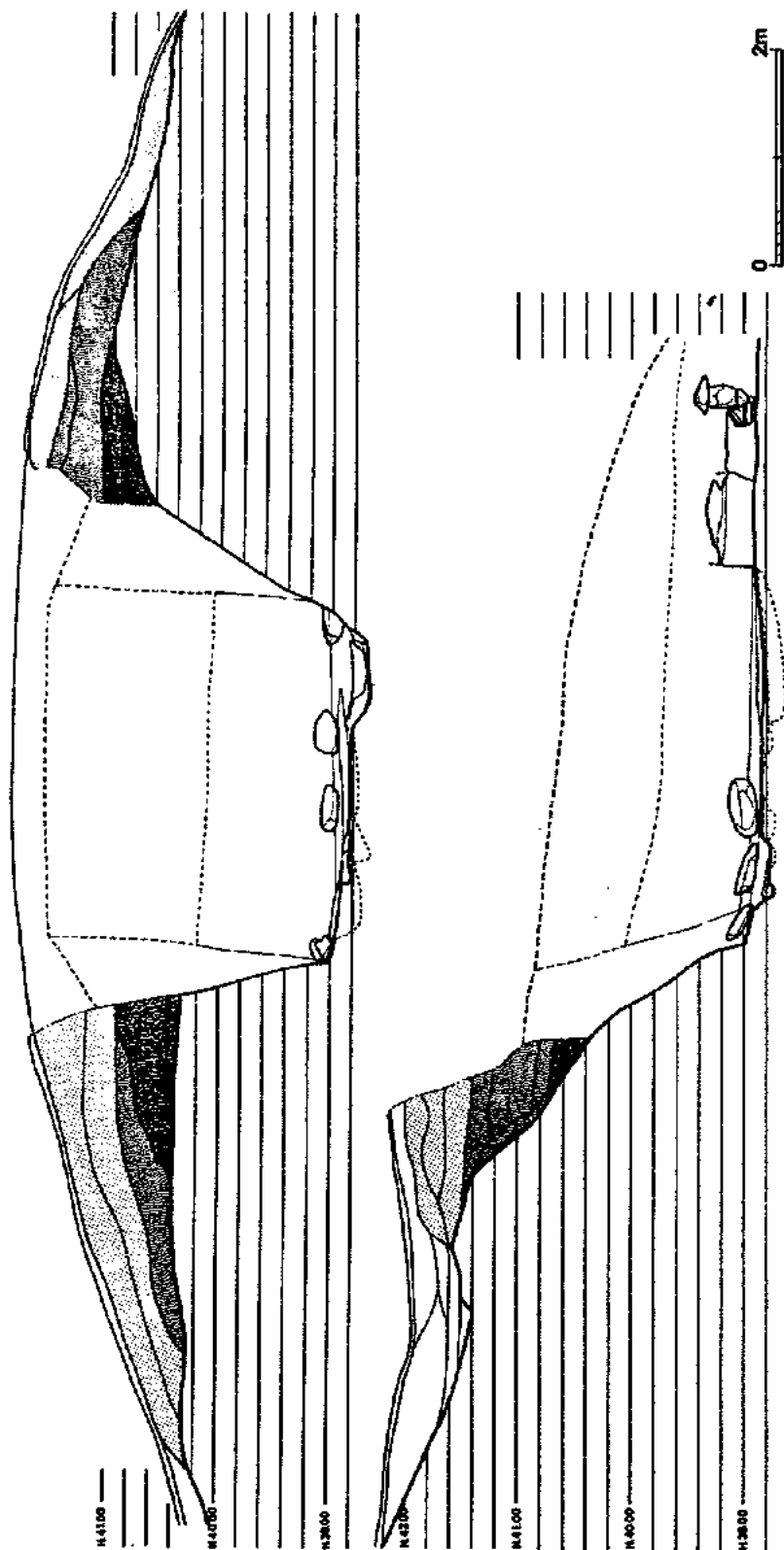
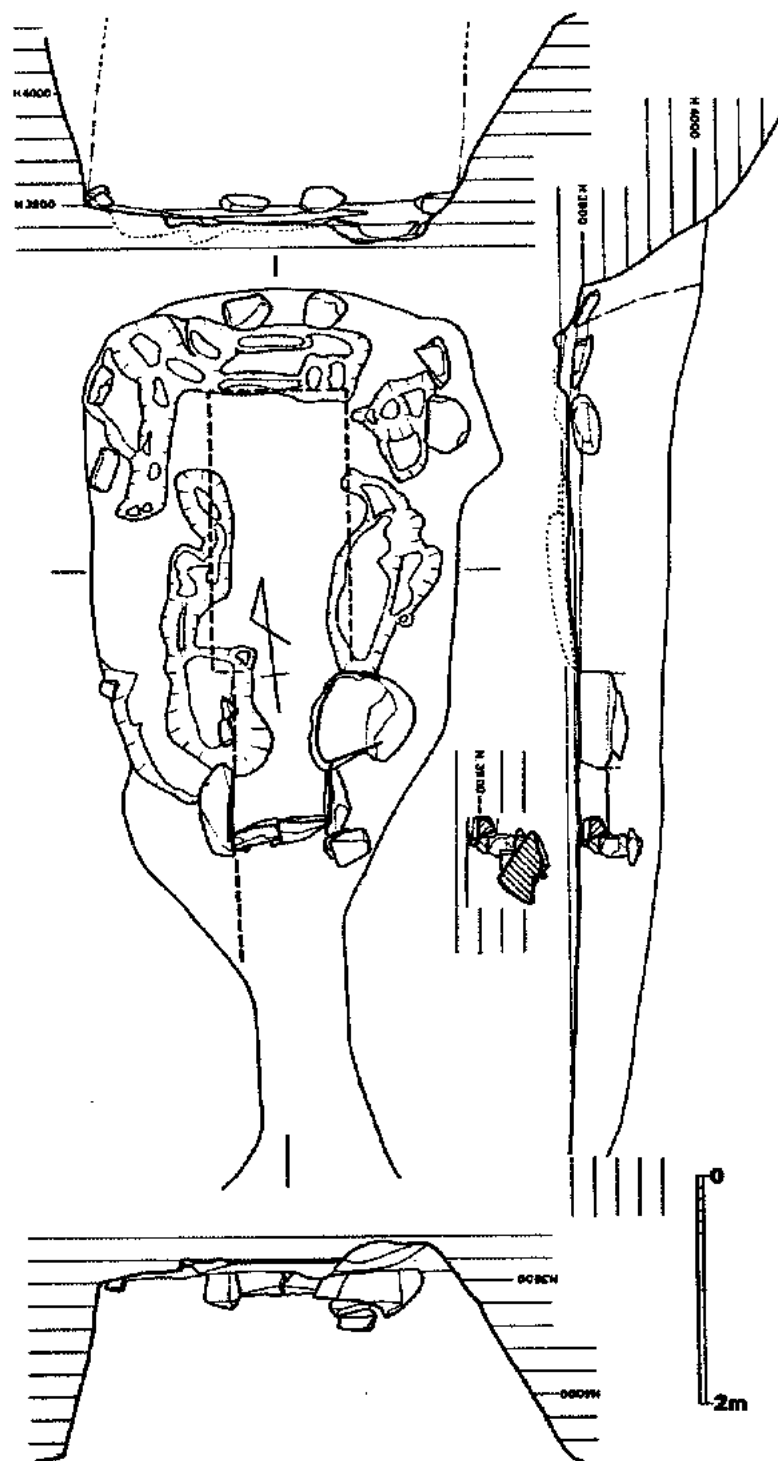


Fig 45 20号填土墙断面图 (图尺 1/60)



ある。

主体部は略南に開口する単室横穴式石室である。玄室内法は約 $2.5 \times 1.2\text{m}$ の狭長方形プランであったと思われる。羨道は墓道との関係で限度 1.7m であったと思われる。中央の仕切り石部で巾 85cm である。

地形との関係で墓道は短く、 2.4m 続いて墳裾へ連続する。

(4) 出土遺物

遺構の残りが悪かった割に墓道からは9点に上る須恵器と土師器が出土し、また墳丘中から須恵器壺3個が並列して出土した。

須恵器 (Fig 47・48, PL 23)

蓋杯、高台杯、高杯、平瓶、壺、甕が含まれる。

蓋杯 (2001・2002) はセットであろう。内面に同一の鋭いへら記号がある。蓋は焼歪んで口縁が広がっている。底部はへら削りで、頂部は未調整。口径 10.8cm 、器高 3.4cm 。

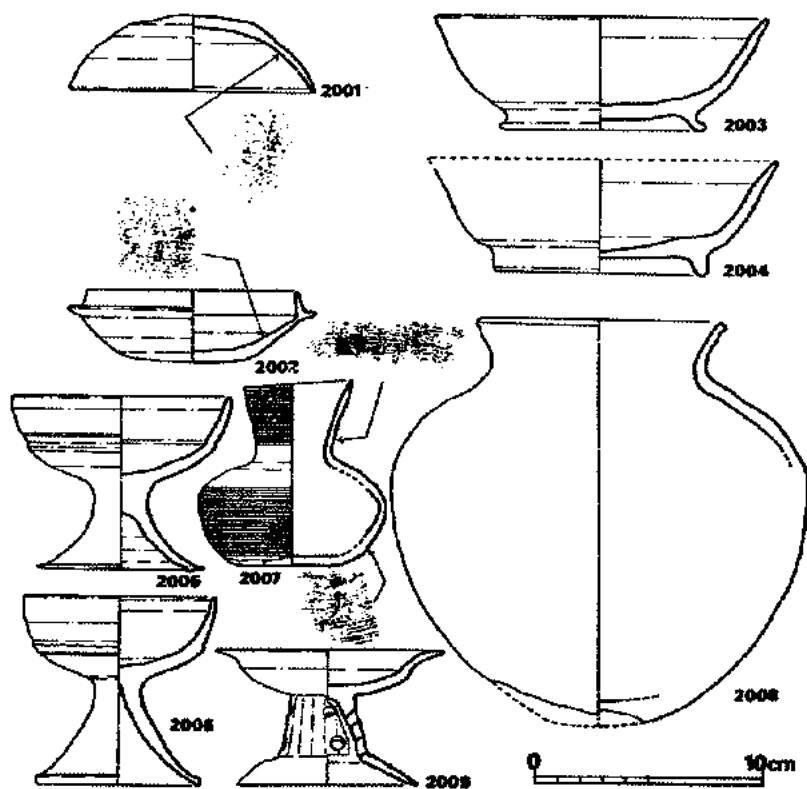


Fig 47 20号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺 1/3)

高台杯（2003・2004）は底部と体部との境に稜を持ち、内彎しながら外上方へ広がり、口縁部は内面に稜を持って外反する。兩者間に高台形態に差がみられ、03は細味で張り出すのに対し、04は太く立つ。唯兩者とも焼成は悪く、端部は磨耗している。

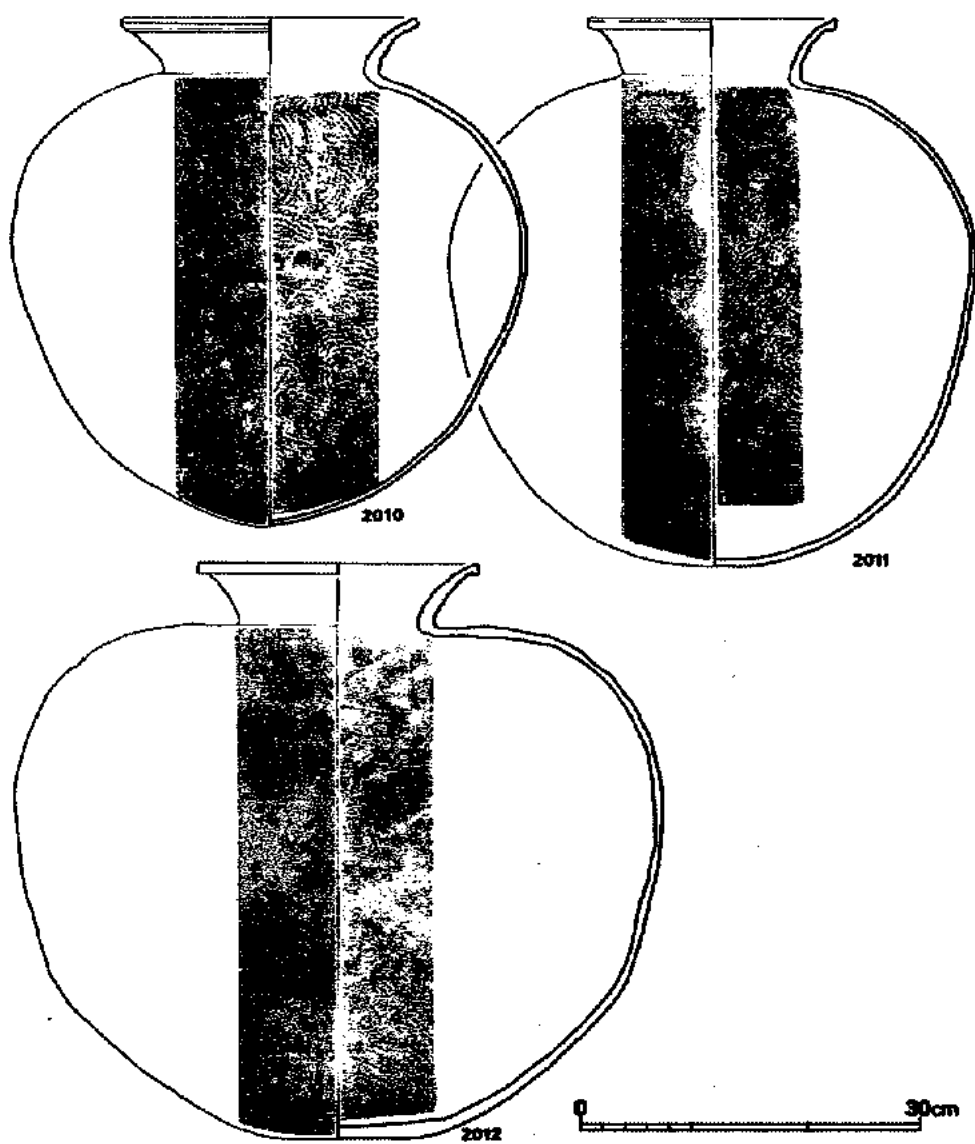


Fig 48 20号墳出土須恵器実測図（縮尺1／6）

高杯 (2005・2006) の杯部は05がやや焼歪んでいるが、ほぼ同形態である。05は底部へラ削り調整で、06はヨコナデを施している。脚部は05が短脚でやや後出の感があり、06は脚端に嘴状端部の名残りを留めている。

平瓶 (2007) は口縁部より底部にかけてカキメ・ヨコナデ・カキメ・停止へラ削りと調整を加えた小品である。肩部に刻まれたへラ記号の脱い刻みは15号墳出土例と類似している。

壺 (2008) は短頸で、胴部との境に稜はなく、頸部は広く、やや肩が張っている。底部から胴部にかけて内外面ナデ仕上げである。

甕 (2010~2012) は全て墳丘中の出土例である。2010の口縁部形状は1709に近似している。いずれも短頸、球形胴である。荒くハケメを乱用する点、いずれも特徴がある。

土師器 (Fig 47)

高杯 (2009) の一点が含まれる。杯部は浅く広がり内面をへラ磨きしている。脚柱部は太くタテへラ削りし、2段透しを3個所に設けている。掬部は直線的に長く延び、鋭く立つ。

(5) まとめ

急斜面を東西に控えた丘陵鞍部に作られたという事態は、当古墳築造の時期を示しているようである。かような古墳立地点として不適地をなぜ利用せねばならなかったかという事である。地形を最大限利用するためにも、開口方向を西に向けざるを得なかったのであろう。

出土品としては墓道中出土の須恵器のうち墳丘中出土の甕3例が墳丘中に並置され築造時を示すと考えられるだけに興味深い。また01・02が作りにしても、またへラ記号にしても同様であり、当墳のある時期の副葬品の一部をなすと考えてよい。また、03・04は作りが若干異なっても同時、同地生産の可能性はある。

以上の時例を基礎として考えれば、当古墳は7世紀初頭に築造され8世紀初頭までの間に使用されたと考えられる。

21. 21号墳 (Fig 49 ~51, PL 14 -1)

(1) 立地と現況

調査区中西北端の最高位にあり、丘陵尾根からやや下がった位置に立地する。中央に盗掘による陥没坑が大きくあけられており、墳丘裾部にその排土が厚く堆積していた。墳頂の標高45mを最高所とする。

(2) 墳丘 (Fig 49)

径13.0mの円墳である。盗掘による破壊が著しいため、墳丘築成工程を理解し得る資料ではない。墓域の深さは約2.0mあり、少なくとも第1工程を示す盛り土は残っていないだろう。

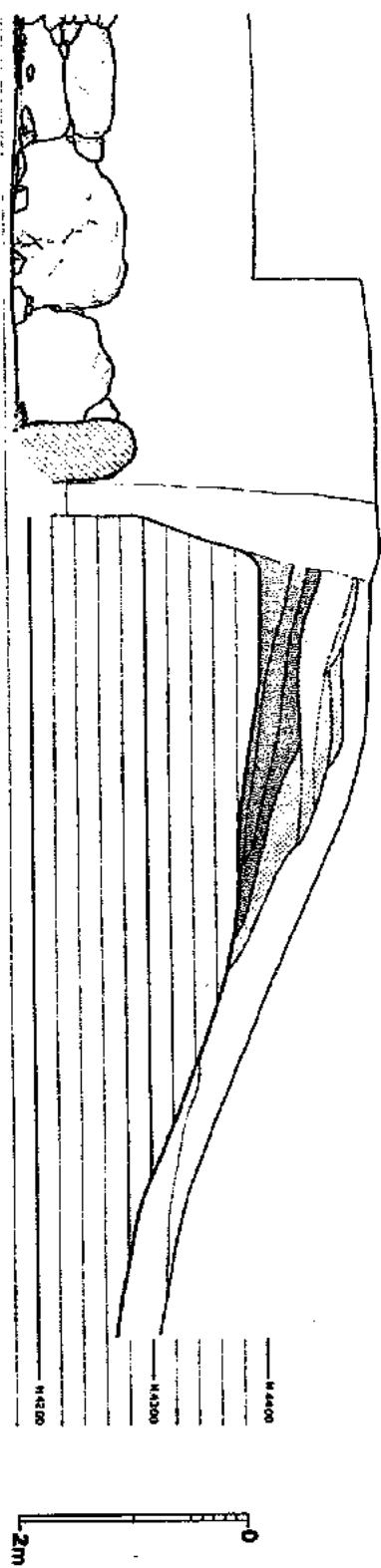
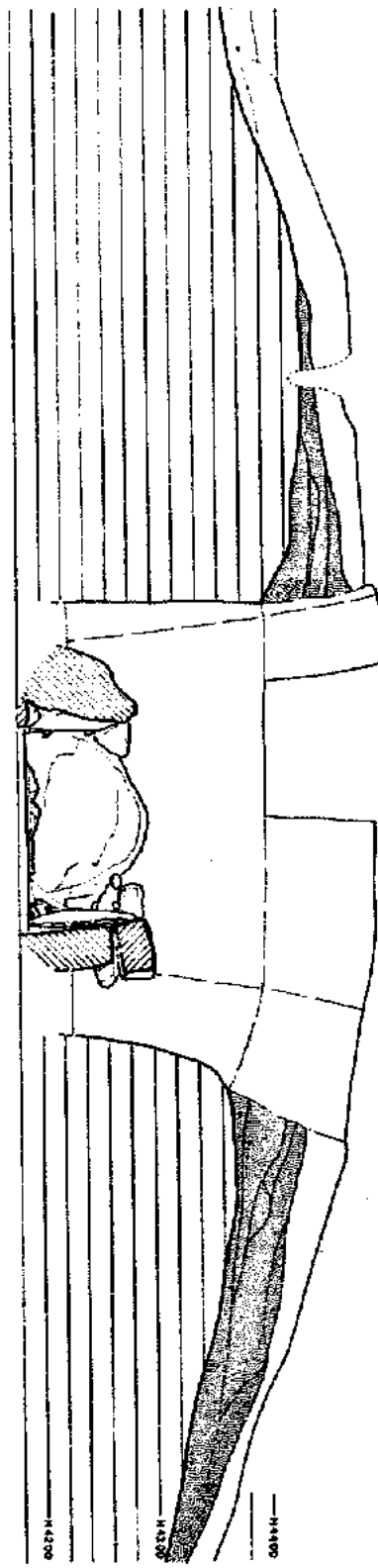


Fig 49 21号出土层剖面图 (比例尺 1/50)

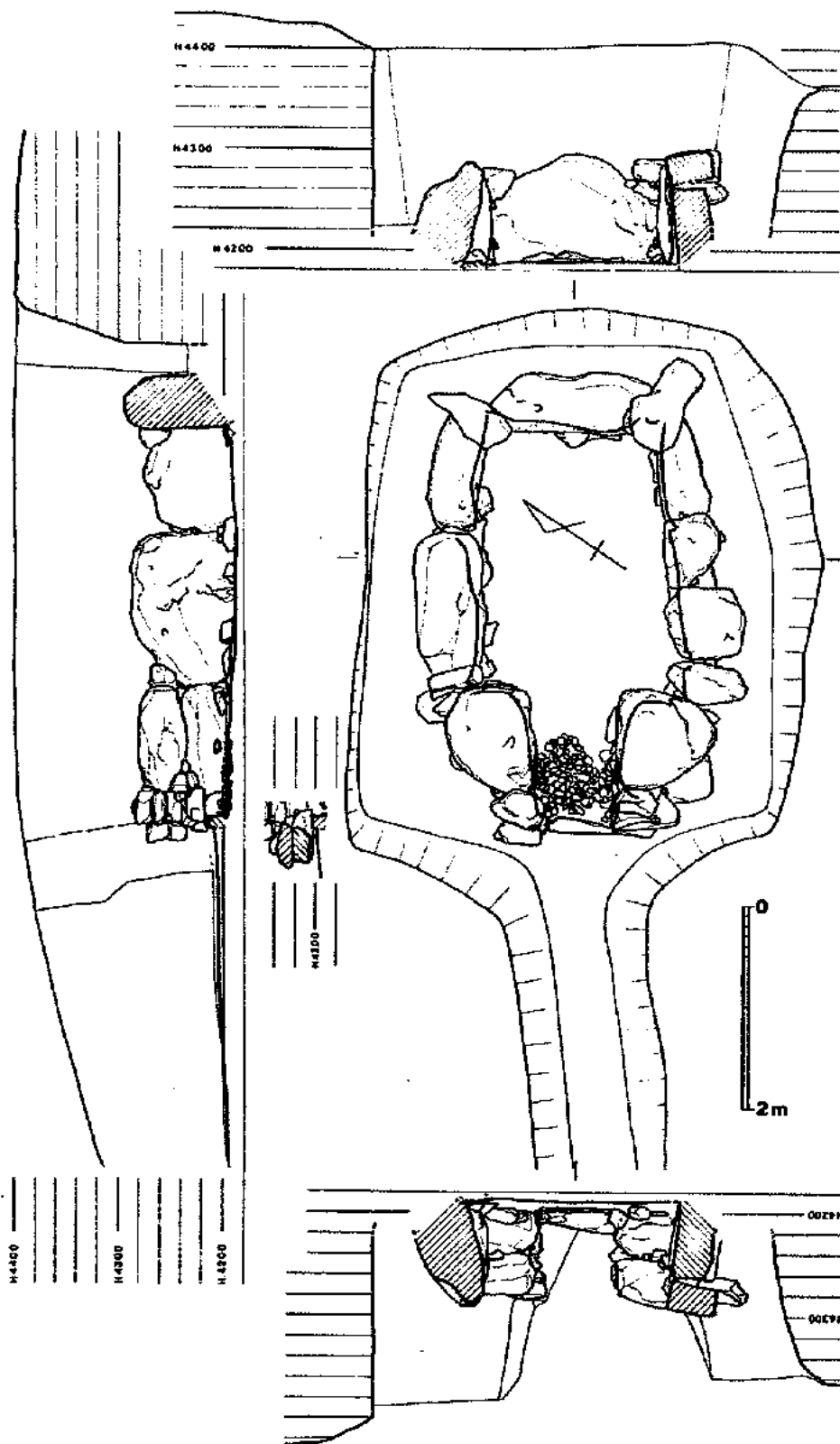


Fig 50 21号墳石室夷削図 (縮尺 1/60)

(3) 石室 (Fig 50)

上端の長さ 6.0m、巾 4.4m、深さ 2.0mの墓域中に築かれている。主体部はN-123°-Eの略南に開口する単室横穴式石室である。残存する石室全長は左 4.0m、右 4.1mで、玄室の中央内法は 2.6× 2.0mである。つまり広い玄室と短い羨道を持つプランとなる。石材は腰石と若干の上積み石を残すのみである。奥壁は1、側壁の左は2、右は3個の用材を腰石としている。各石は床面から1m前後の高さがある。玄門は左右共平積み2段を残しており、その前側に小石を若干積んで羨道としている。前側に本来は延びていたとしても、長さ30cmが限度であろう。前巾は80cmで、玄室巾の約1/2である。この間を小礫で敷石し、前面を仕切り石が画している。墓道は6m以上続く。

(4) 出土遺物 (Fig 5, PL 25)

墳丘内から須恵器杯1点が出土したのみであるが、築造時期を示す資料として貴重である。杯(2101)は蓋受け部径14.8cm、口径12.8cm、器高4.0cmあり、底部はヘラ削りである。

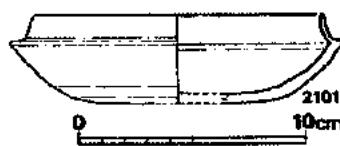


Fig 51 21号墳石室実測図 (縮尺1/60)

(5) まとめ

大規模な盗掘によって墳丘築成についての満足な資料は得られなかったが、墳丘径が13mと大きい事が知り得た。この数値は12及び23号墳に匹敵する。

石室は広い玄室と、短く巾が玄室の1/2となる羨道をもち、一つの典型となるプランである。

出土した唯一の須恵器は型式から6世紀後半のものと理解され、B地区古墳群中最古である。発掘区外の高所にまだ未調査の古墳が数基あるが、調査区内では最高所に位置し、その占地法がもつ時代性を示して興味深い。

22. 22号墳 (Fig 52 ~56, PL 14 -2)

(1) 立地と現況

12号墳の東側下位にある。畠地開墾によって墳土のほとんどが削平され、また東側には石垣が築かれている。最高位点の標高は28.8mである。

(2) 墳丘 (Fig 52)

述べるに足る資料は得られなかった。北側墳丘裾と墓道との関係から、径13m前後の円墳であったかと想像される。

(3) 石室 (Fig 53)

長さ 5.6m、奥巾 3.5m、前巾 1.8m、西側の深さ 1.8mの台形プランの墓域中に主体部が

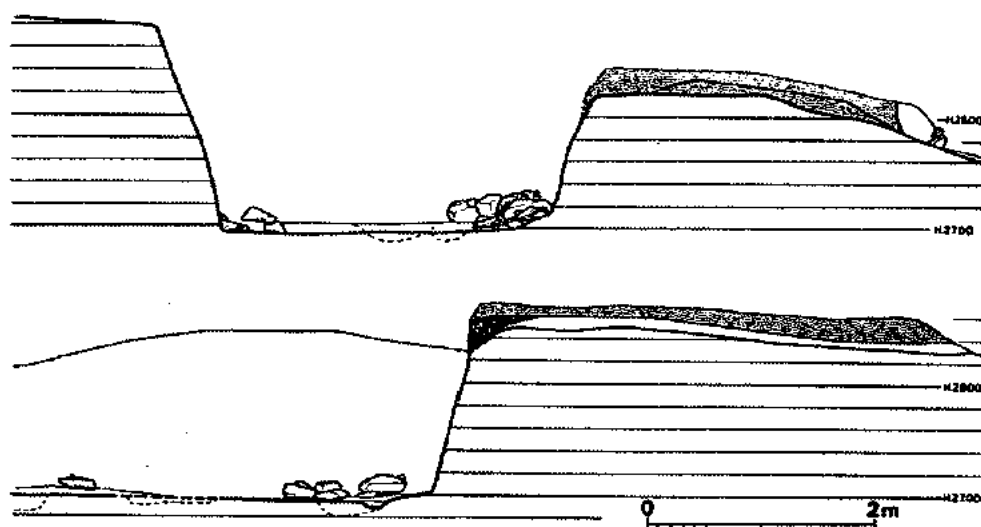


Fig 52 22号墳土層実測図 (縮尺 1/60)

ある。残された石材は羨道前半部の若干と玄室部根石のみである。羨道左壁奥側にみられる石材抜き痕と、根石と思われる2個の角礫の位置が玄門部を示している。玄室の巾は右側根石との関係で片側70~80cmの範囲内に限定できる。長さも同様の関係である。相原古墳群中片袖式石室はみられないので左右対称とし、想定される石室は全長 4.4~4.7m、玄室の中央部内法 2.1~2.3×1.4~1.6mの単室横穴式石室であり、N-175°-Wの略南に開口する。羨道の長さは玄室のそれにほぼ等しかろう。墓道は約4m延びる。

(4) 出土遺物

石室の甚しい破壊の割には墓道中から多量の遺物が出土した。鉄製工具・砥石・須恵器・土師器が含まれる。墳丘中からは甕が出土した。

工具 (Fig 54, PL 17)

鉄斧(1・2)は大小2種である。1は有肩で弧状刃部をもつ。袋部内法は 2.7×0.7cm、刃部巾は 4.9cmである。2は袋部から刃部にかけて撥形に広がり、弧状刃部をもつ。袋部は上縁を欠損しており、左右折れかえし間が約1cm開いている。現存する上縁では袋部内法 4.7×1.8cmである。刃部巾は想定 7.9cmである。

鉈(3)は甚しい錆で脹れているが、図示した形状を推理した。茎端と刃部端を欠失する。刃部の作りは不明。

砥石(4)は正四面体の軽石製品である。

須恵器 (Fig 55, PL 25・26)

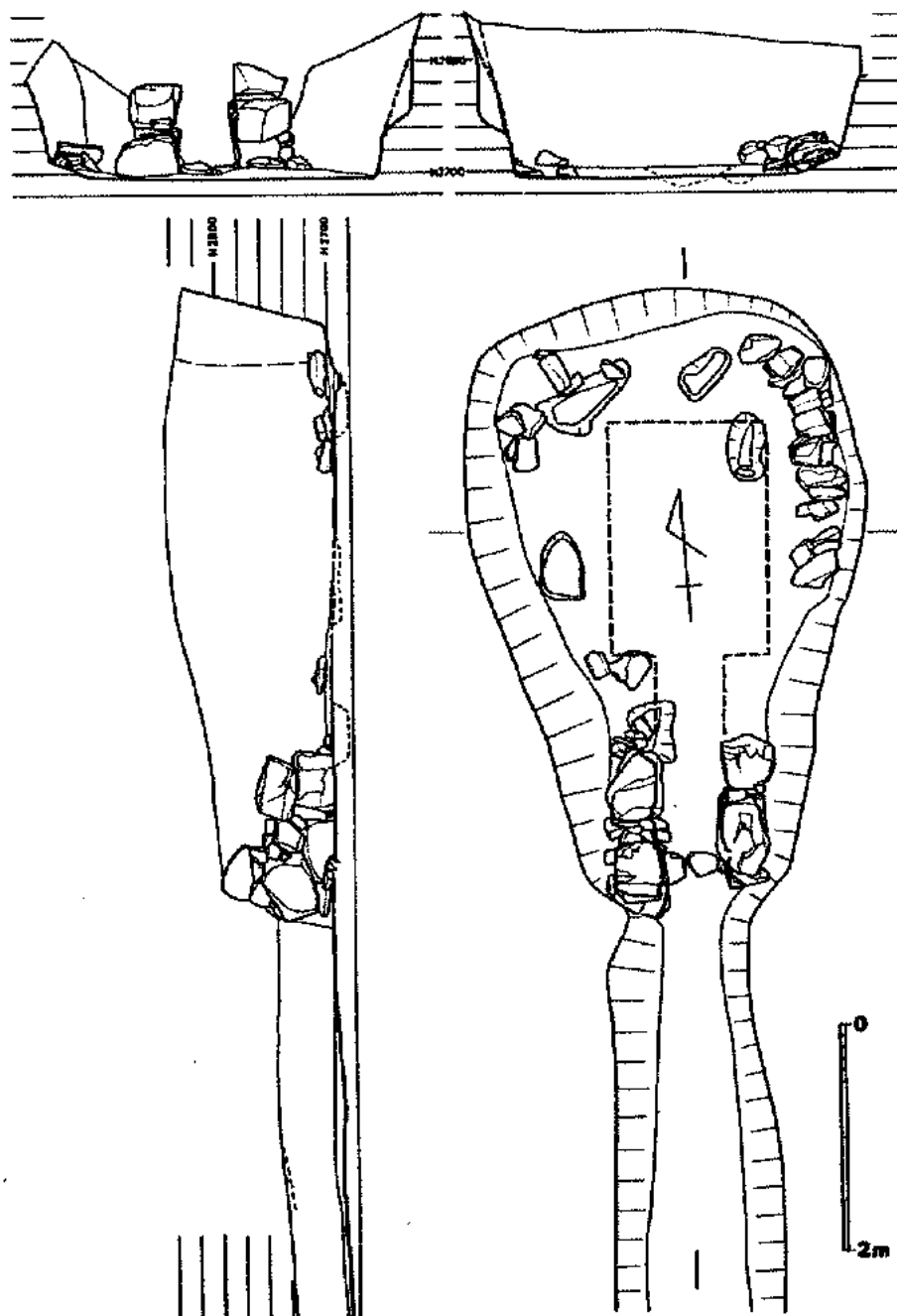


Fig 53 22号填石室实例图 (縮尺1/60)

蓋杯、高台杯、高杯、増蓋、甕、平瓶、脚付壺、甕が含まれる。

蓋杯 (2201~2206) 蓋3個と身3個である。01・02と04・05が、03と06が各々セットになると思われる。蓋の頂部、身の底部はヘラ削りしている。

高台杯 (2207・2208) の高台は僅かに外に張る。底部をヘラ削りし、丸味をもつてのびながら、口縁を僅かに外反させる。07は口径13.0cm、器高4.7cm、08は口径13.6cm、器高5.3cmである。

増 (2209~2211・2213~2215) は口縁部が直立するものと内傾するものがある。底部外面はいずれもヘラ削りしている。

蓋 (2212) は方形ツマミをもち、身受けのかえりは長い。かえり径6.6cm、受け部径8.6cmである。高杯の蓋であろう。

高杯 (2216・2217) の短脚は裾部が水平にのびる。杯部は有段で、底部からのびる体部は深い。16の口径8.6cm、器高6.8cm、17の口径9.4cm、器高7.7cmである。

甕 (2218) は有脚で、頸部はラップ状に大きく開き、短く段をとって口縁部がつく。脚部、球体部と頸部の接合部、口縁内外面はヨコナデ調整、他はカキ目調整で、全体シャープな作りである。

脚付壺 (2219) は頸部以上を欠損している。作りは甕とよく似ている。

平瓶 (2220・2221) 20の頸部は体部中央近くにあり、やや肩が張る。底部は平底に近い。21は頸部中央に稜があり、なで肩で底部は上げ底である。いずれも体部カキ目調整、底部停止ヘラ削り調整である。

甕 (Fig 56, PL 27) は見かけ2段凸帯の口縁部をもち、端部を跳ねあげている。肩部の張

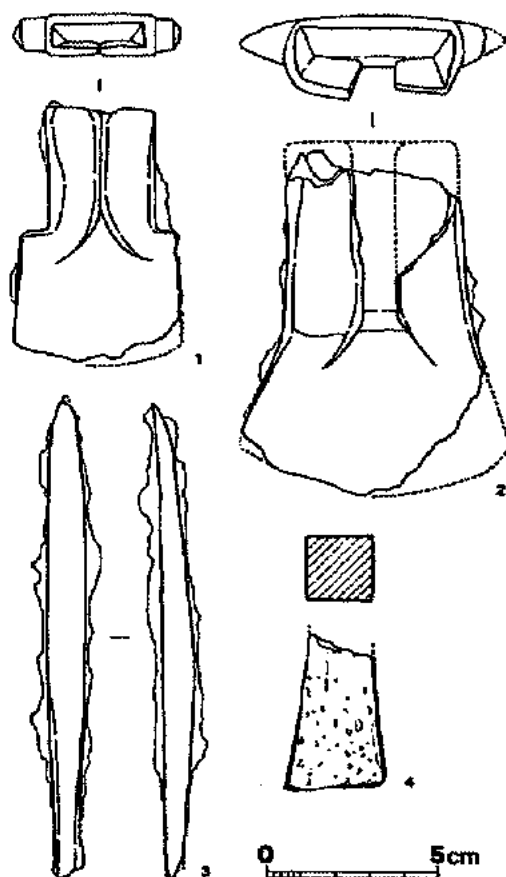


Fig 54 22号墳出土工具実測図 (縮尺1/2)

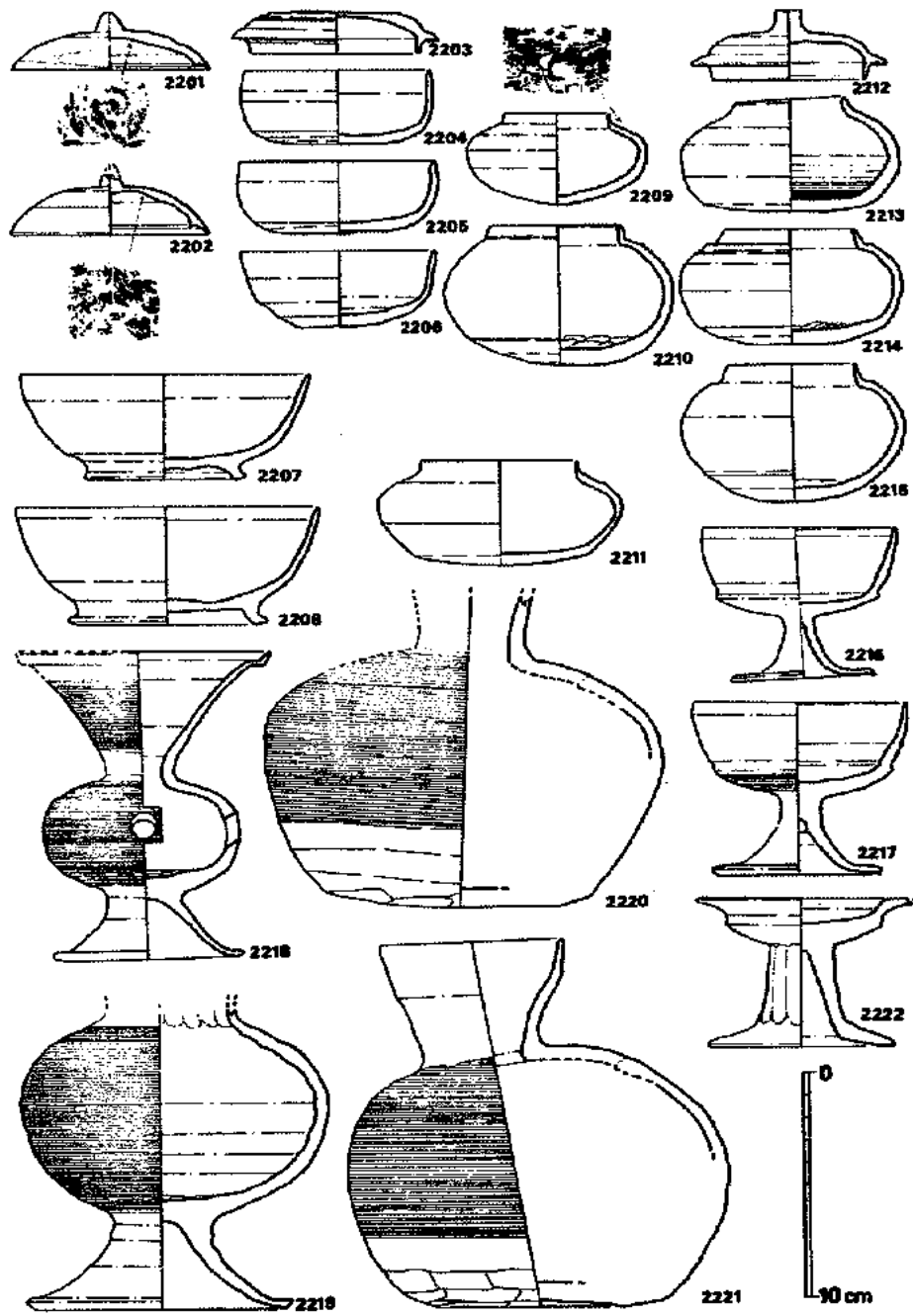


Fig 55 22号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)

りは鋤所によって歪んでいる。口径26.7cm、器高47.7cmである。焼成は悪く、全体に暗赤褐色を呈している。

土師器 (2222)

高杯1点である。全体に部厚な作りである。杯部に大きく段を取り、偏平で口縁部は水平に延びる。脚柱部は太く、裾部は外へ強く張り出している。

(5) まとめ

墳丘及び石室は大きく破壊され、その平面規模をかりうじて推定し得た。

出土品中の工具は当古墳群中で唯一である。斧と鉋と砥石という組み合わせは被葬者の職業を考える上で興味深い。

土器類は07・08の高台杯を除けば、7世紀前半という同一時期の所産と考えられる。15号墳床面出土一括品と共に貴重なセット関係を示している。

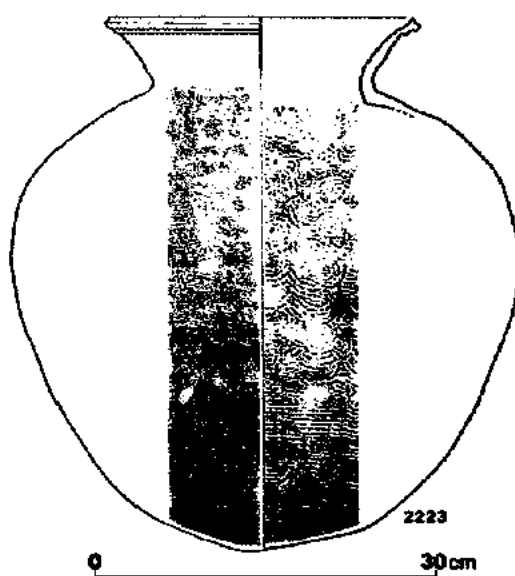


Fig 56 22号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/6)

23. 23号墳 (Fig 57 ~61, PL 14 -3)

(1) 立地と現況

B地区最東端の丘陵崖側にあり、古墳群としても当古墳が東側の限界である。標高27.36mを最高所とし、調査区中最高所に位置する21号墳とは26.64mの落差がある。

(2) 墳丘 (Fig 57)

調査前の見かけでは東の谷側へ墳丘が大きく流れて張り出していたが盗掘地はなかった。

径13.3mの円墳である。標高26mが天井石を架構するレベルであり、掘り方肩部から同レベルに近くまで盛られた各層が、第1工程を示すと考えられる。全て墓域内で積まれている。同様に天井石レベルとの関係でそれを被う層が第2工程の盛り上げであろう。東の谷側では墳丘裾部からこの段階の築成がなされている。

(3) 石室 (Fig 58)

上端で7.0×5.2m、西の山側で深さ2.4mの墓域中に築かれている。主体部はN-169°-Eの略南に開口する複室横穴式石室である。石室全長は5.6mあり、玄室は中央内法が2.5×

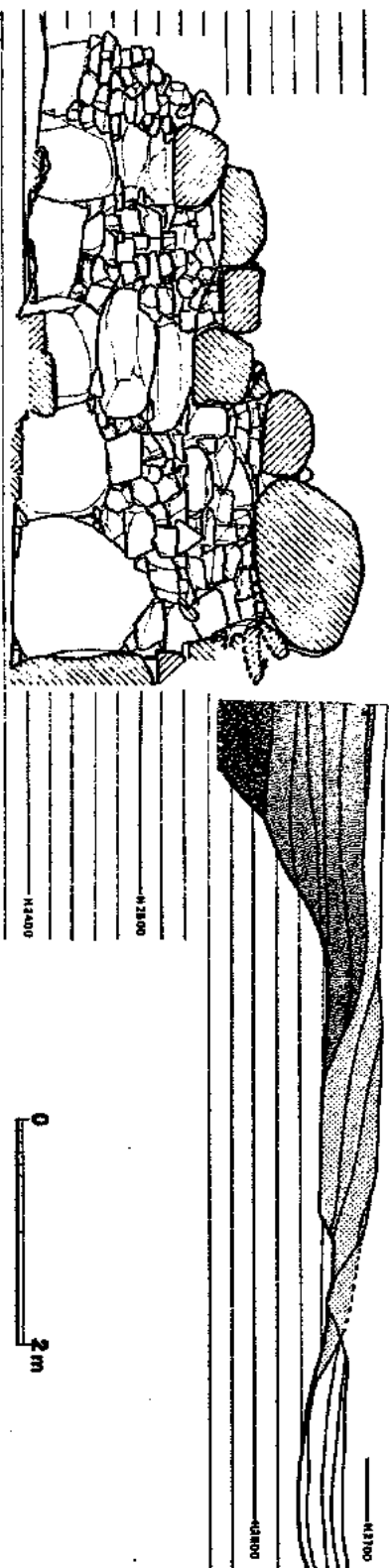
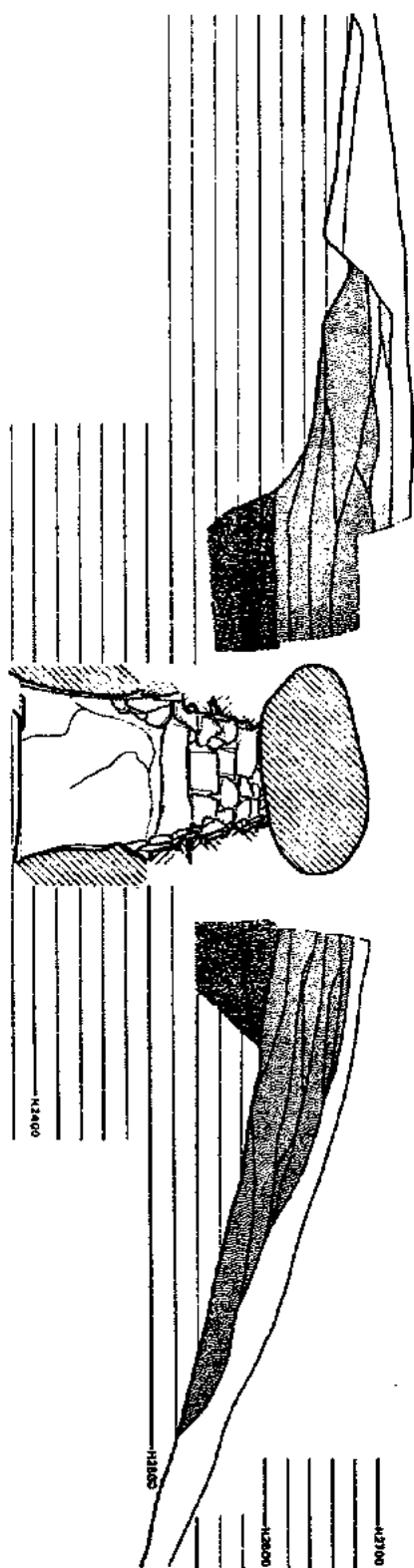


Fig 57 23号墳土層断面図 (縮尺1/60)

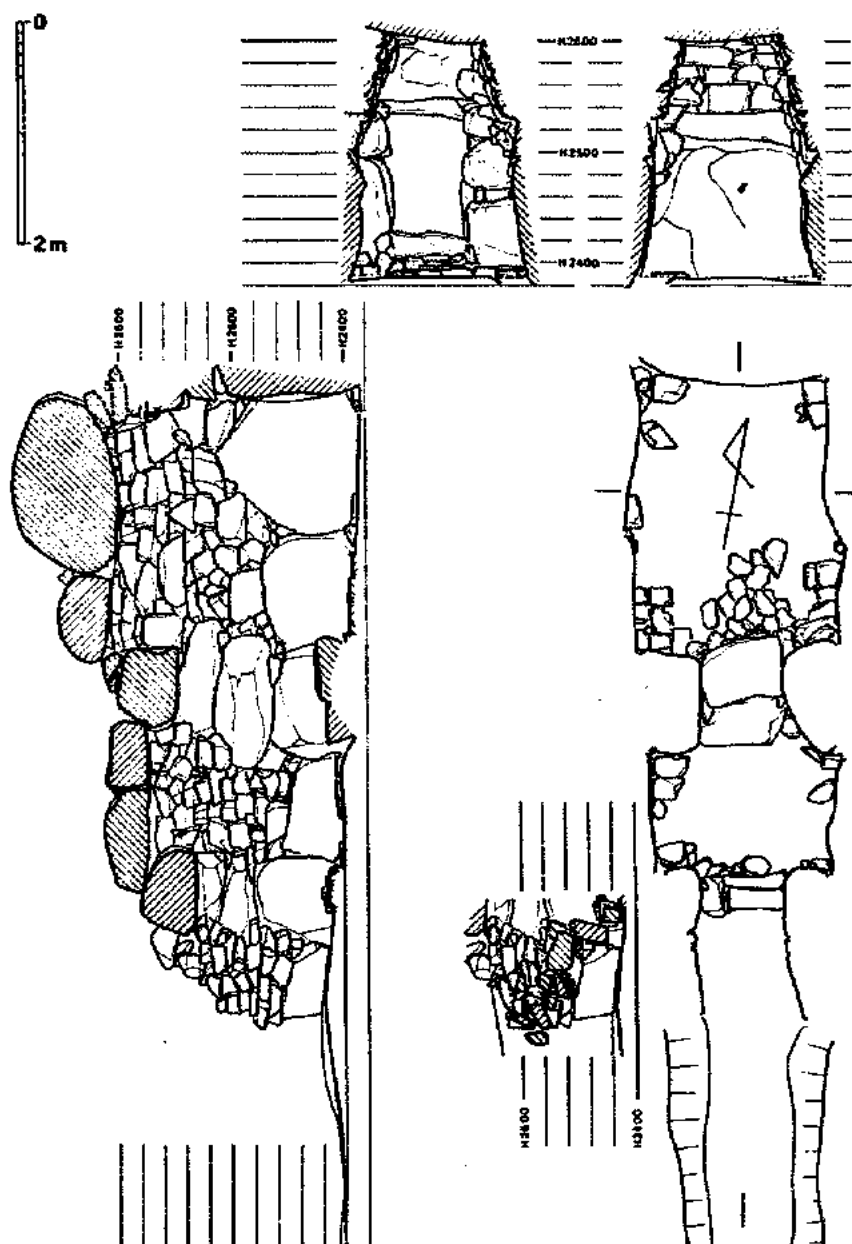


Fig 58 23号填石室实测图 (缩尺1/60)

1.8mである。腰石は奥壁1、両側壁各2石を用いている。奥壁腰石は床面から1.25mの高さのある板状石を用いており、両側壁の奥側腰石も同様の巨材を用いている。側壁の持ち送りは僅かで、直立に近く、天井に巨石を架している。天井までの高さは2.2mで、床面には敷石の名残りがみられる。玄門部は巾70cmと玄室巾の1/2以下である。右側は柱状石1の上に枕状石1を、左側は正立方石1と枕状石2を平積みして高さを揃え、天井石を架している。玄門間には長巾いっばいに2石を並べて、前室との仕切りとしている。仕切り石上面から天井石までの高さは1.25mである。

前室の中央内法は1.2×1.6mの横広である。断面は玄室と同じく持ち送りが少ない。床面には敷石の名残りがあり、地山面上から天井までの高さは1.75mである。前門部の積みは玄門左壁と同様で天井石を架している。前門の前面に左右各1石の小腰石を据え、上を小口積みして羨道部としている。

閉塞石は奥部に2段基礎積みして後乱積みで、恐らくは墓道埋土上に据えられたのであろう。

(4) 出土遺物

玄室内から玉類3個が、墓道埋土中と墳丘内から須恵器が出土した。

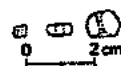


Fig 58 23号墳出土
装身具実測図
(縮尺1/2)

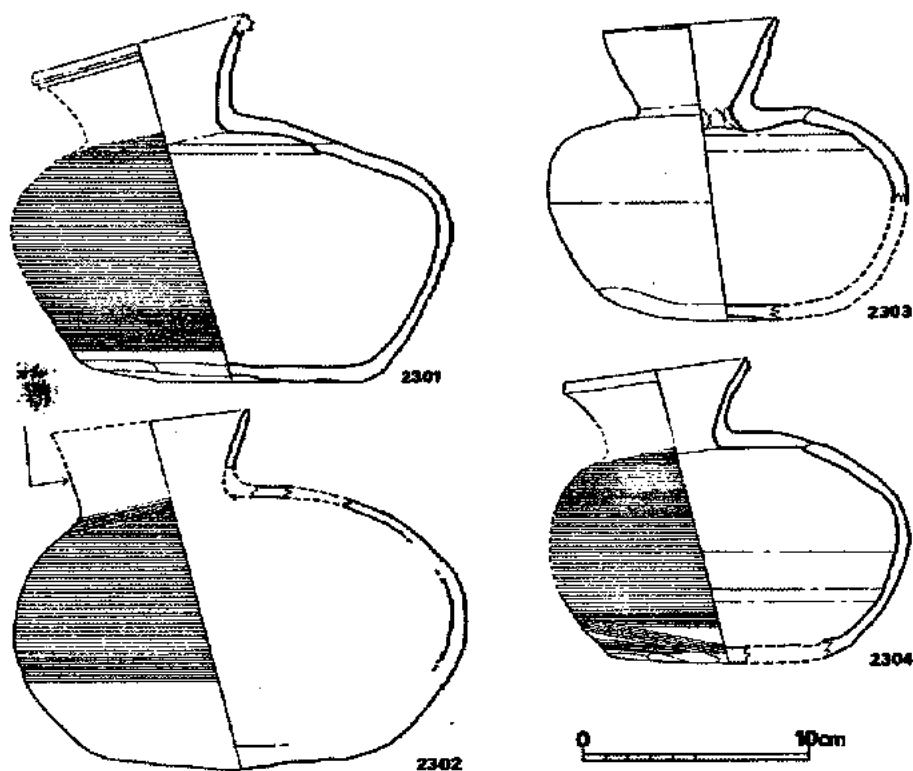


Fig 60 23号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

装身具 (Fig 58, PL17)

ガラス小玉2個と赤瑪瑙製丸玉1個がある。

須恵器 (Fig 60・61, PL 27)

平瓶 (2301~2304) 01・02・04が墓道から03は墳丘裾部から出土した。01・04は平底であり、01はやや肩がはる。01・03・04は底部ヘラ削りである。

甕 (Fig 61, PL 27) は口縁径が狭く、端部を僅かに直立させている。胴部は長く、中央部が最も張る。

(5) まとめ

石室プランは12号墳に類似している。規模も大差ない。

出土遺物のうち須恵器は平瓶と甕のみであり、時期決定に多少の不安を感じるが、12号墳と相前後して築造され、使用期間は12号墳より長かったと思われる。

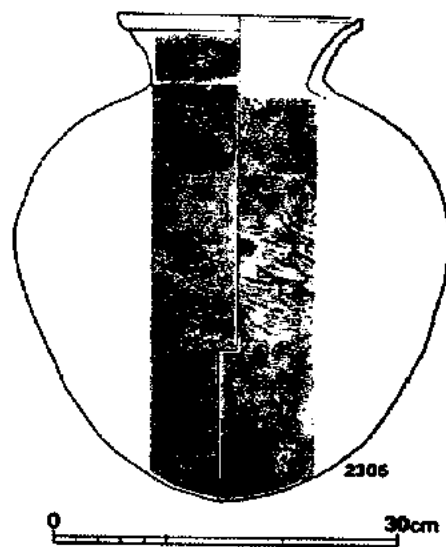


Fig 61 23号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

IV ま と め

1. A地区では6～11号墳が最も古く、6世紀前半に築かれた。次いで4・5号墳ができ、1号墳も近い時期、つまり6世紀後半に築かれた。2号墳は狭長な石室と丁寧な築成による墳丘をもつ古墳であり、出土品からみて7世紀前半の所産と考えられる。3号墳は出土品がなく正確ではないが石室プランからみて6世紀末か7世紀初頭のものではなかろうか。
2. B地区では21号墳が最も古く6世紀末に築かれた。丘陵最高所に位置し、展望のきく地点である。次いで12・18・23号墳の複室石室を主体とする古墳ができ、19・20号墳も相前後して築かれたと思われる。時代は7世紀に入っている。
7世紀も中葉に近づく13・15・22号墳が築かれ、各々葬礼が行われている。
墳丘規模が小さな14・16・17号墳は先述したように周辺各墳の狭間に築かれており、7世紀後半の所産と思われる。
3. 出土品中武器・馬具の少なさが目につく。美装大刀の副葬が想定されるのは2・12号墳のみであり、馬具は15号墳出土の轡片のみである。一般に鉄製品は少ないが、23号墳出土の工具類は被葬者の職業を考慮する上で参考となる。
4. 大化薄葬令の実在性と有効性が疑問視されて久しいが、7世紀後半の所産と思える14・16・17号墳の墳丘は小さく、書紀のいう令の発布時期に相当することは興味深い。
5. 当古墳が墓所として使用される風習は、17号墳の奈良時代中頃をもって終焉する。この頃をもって宗像の地にも律令支配が徹底されたと考える。

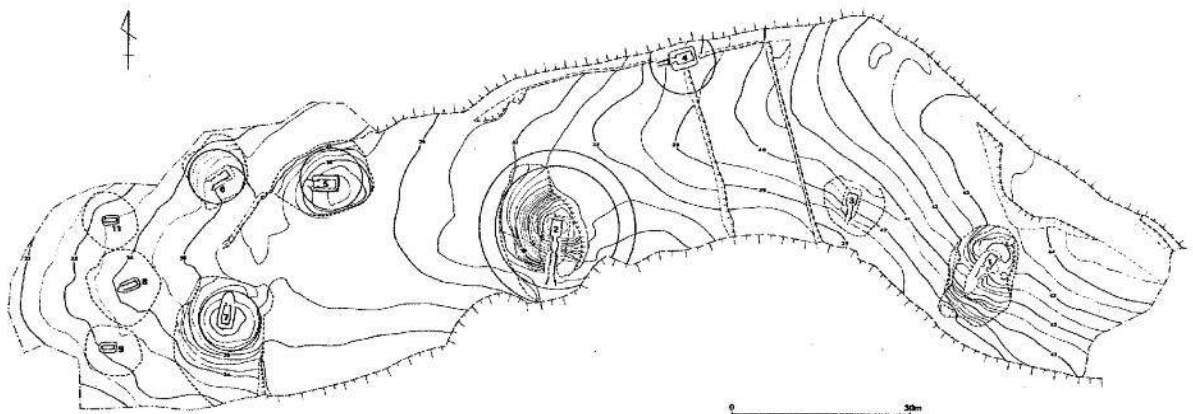


Fig 1 Shimen Mountain area (Scale 1:400)

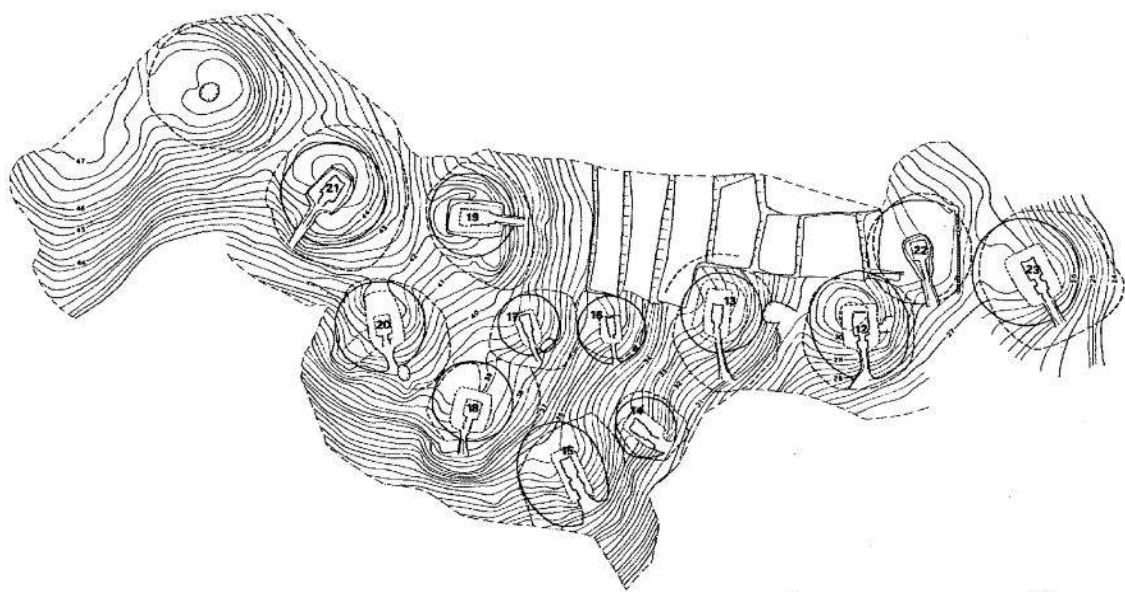


Fig 2 仙安古城遗址地形图 (比例尺 1/400)

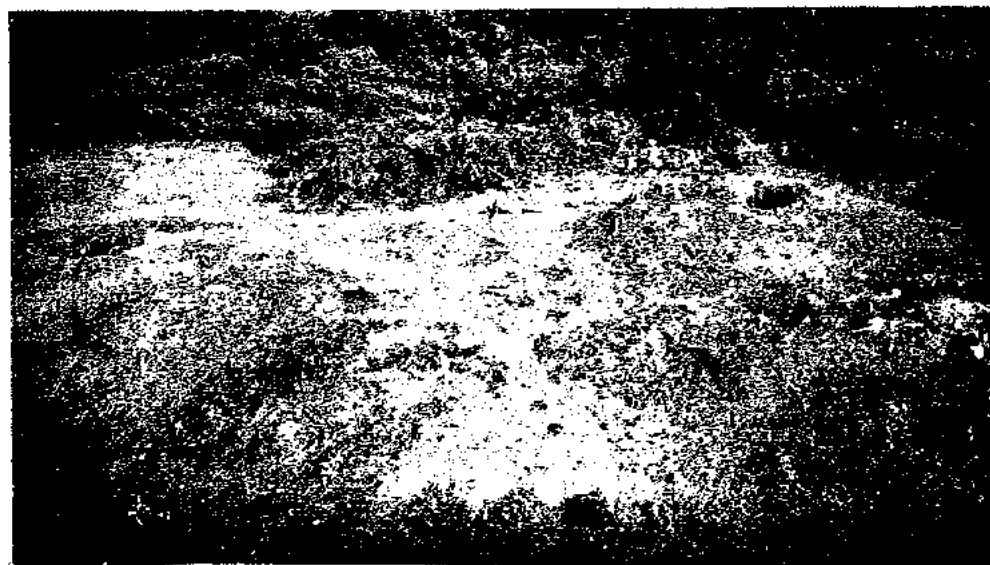
圖 版



1.
遺跡遺望



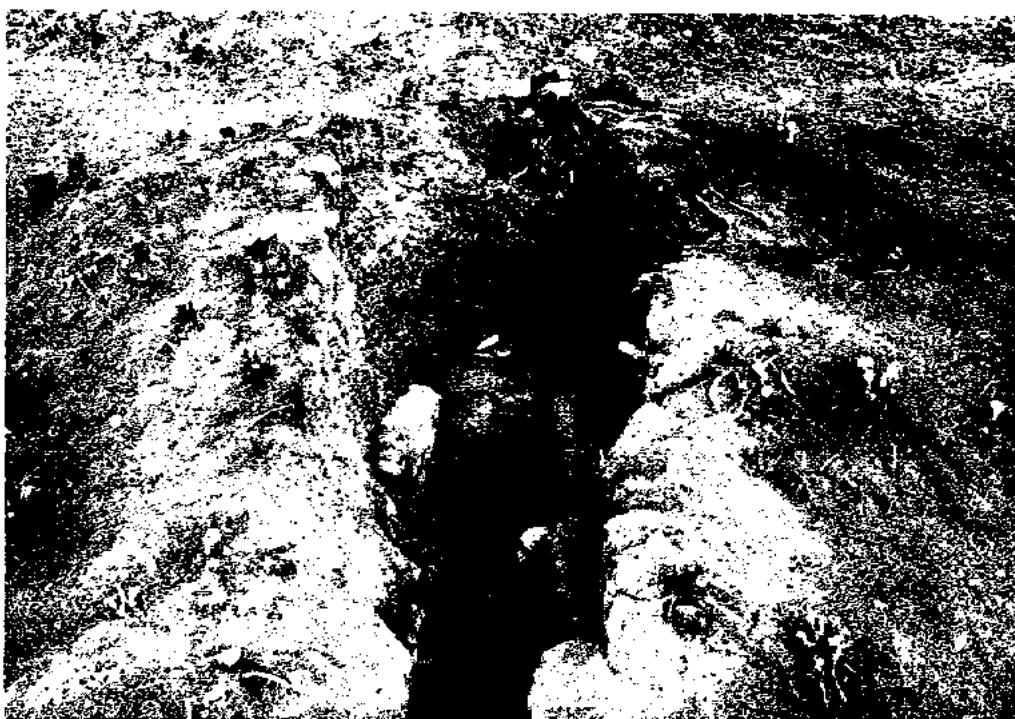
2.
A区古墳群



3.
B区古墳群



1. 1号墳墳丘（調査前）



2. 1号墳墳丘と石室



左 2号墳墳丘（調査前）



左 2号墳墳丘（調査後）

左下 石室入口



下 天井石と墳丘





(1) 3号填石室



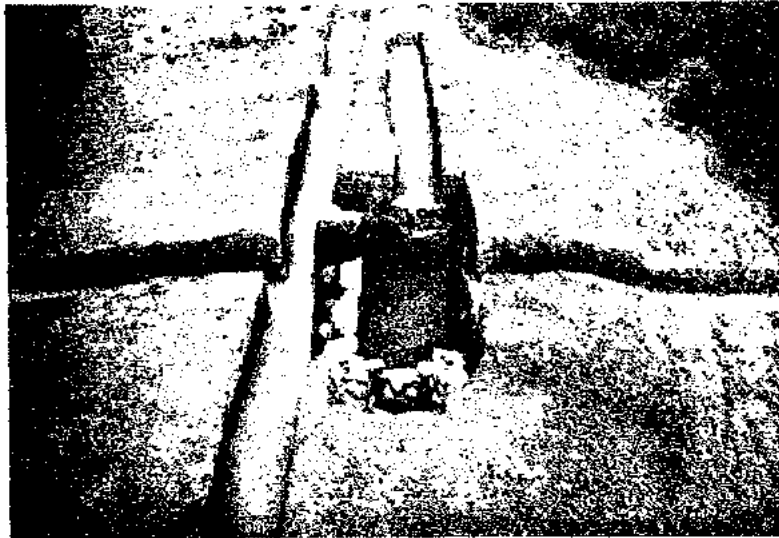
(2) 3号填闭塞石



(3) 4号填石室



(4) 4号填闭塞石



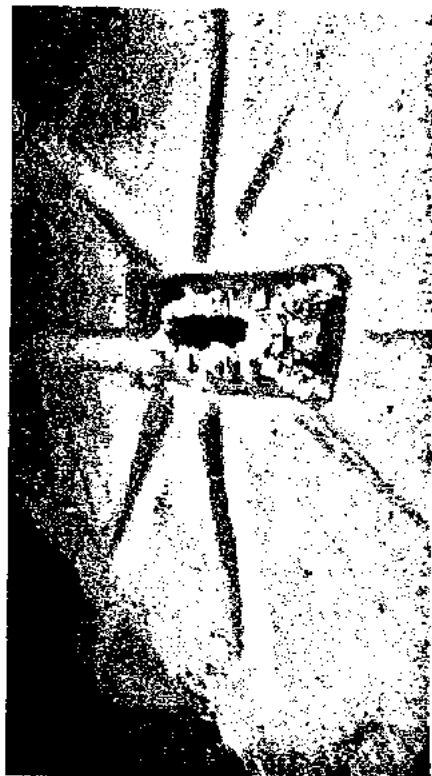
(1) 5号墳全景



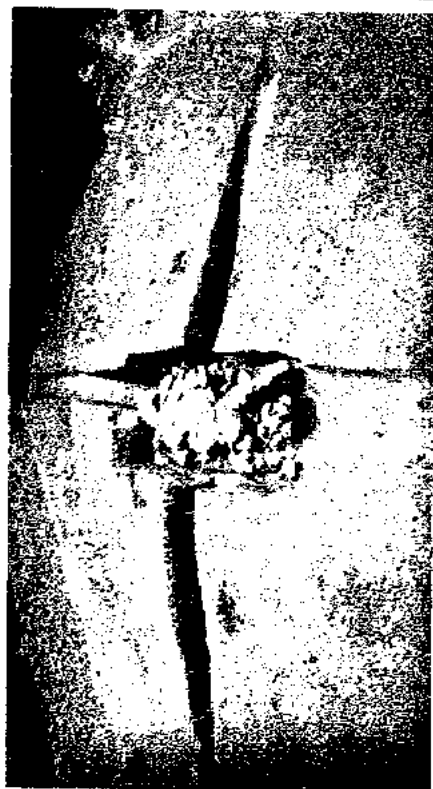
(2) 5号墳石室



(3) 5号墳閉塞石



上 6号墳全貌



上 7号墳全貌

下 7号墳入口



下 7号墳開闢石

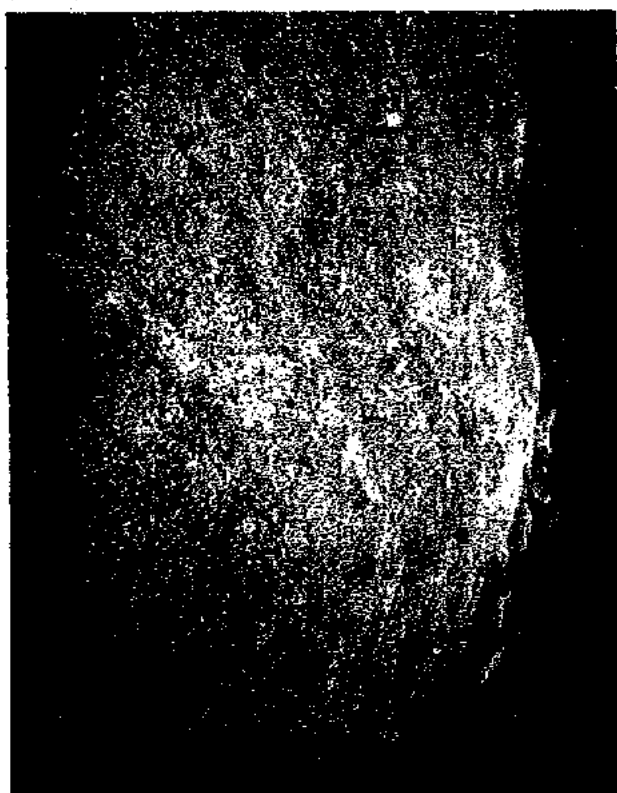




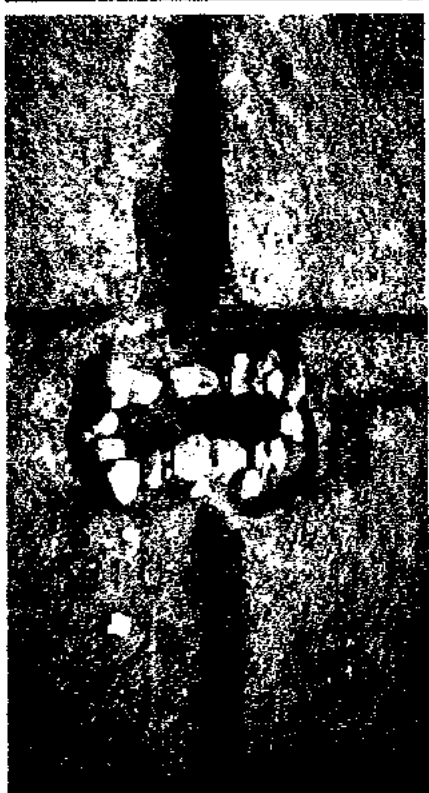
上 11号墳石室



下 9号墳全景



上 8・9・11号墳全景 (調査前)



下 8号墳全景



(1) 12号墳全景



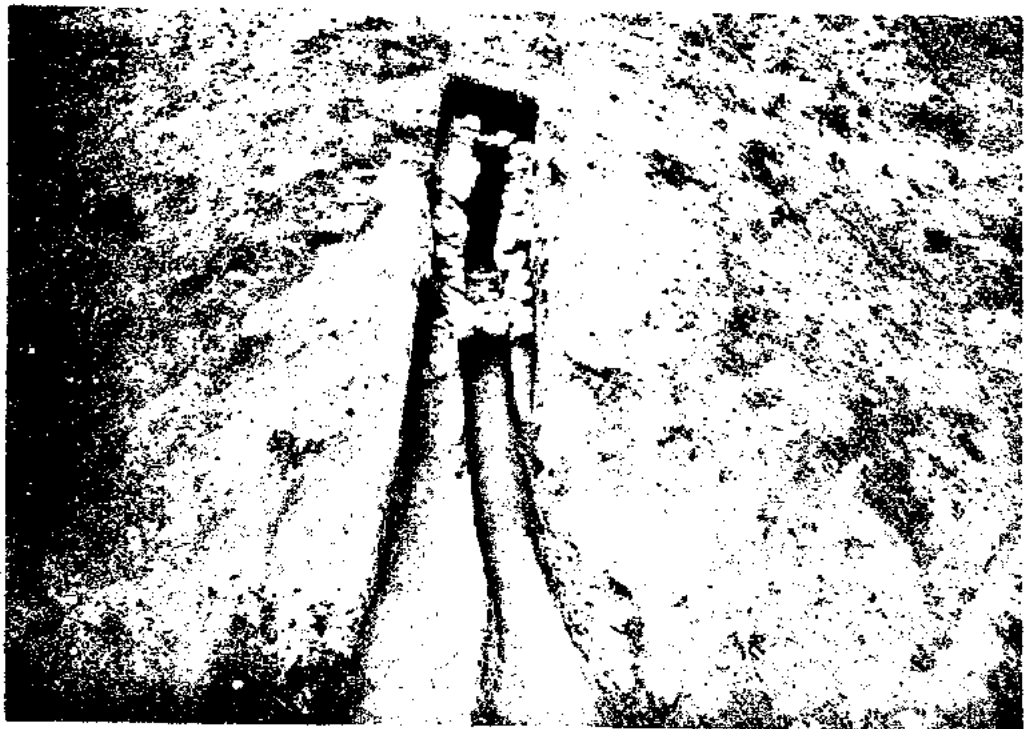
(2) 12号墳石室

(1) 12号墳玄室奥壁

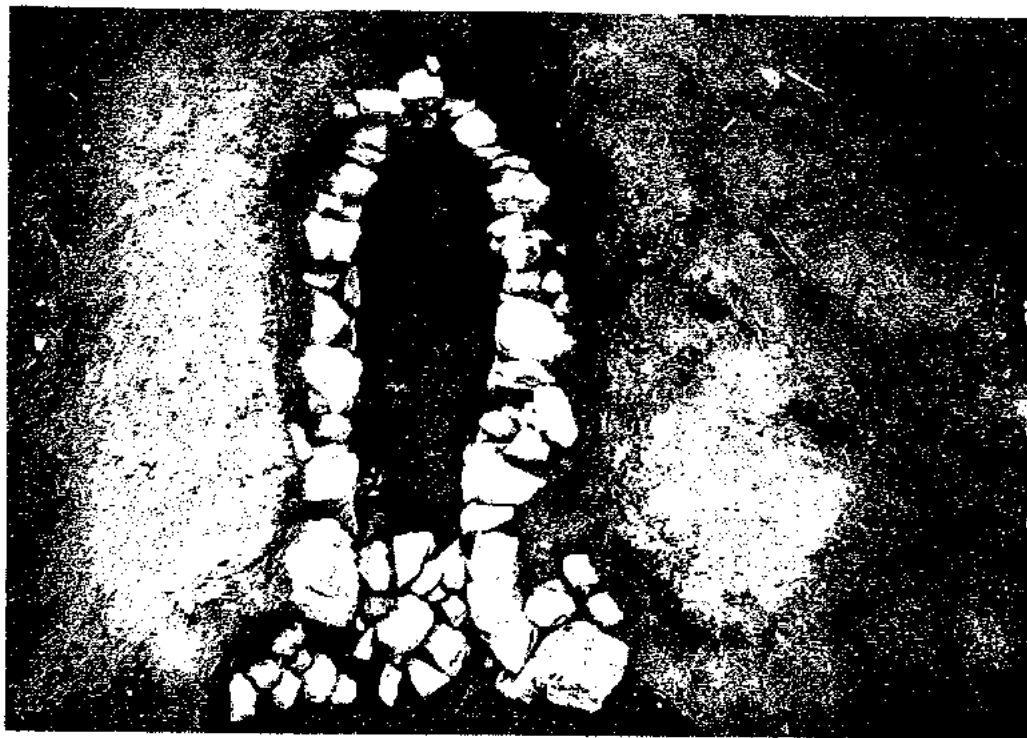


(2) 12号墳玄門及び羨道

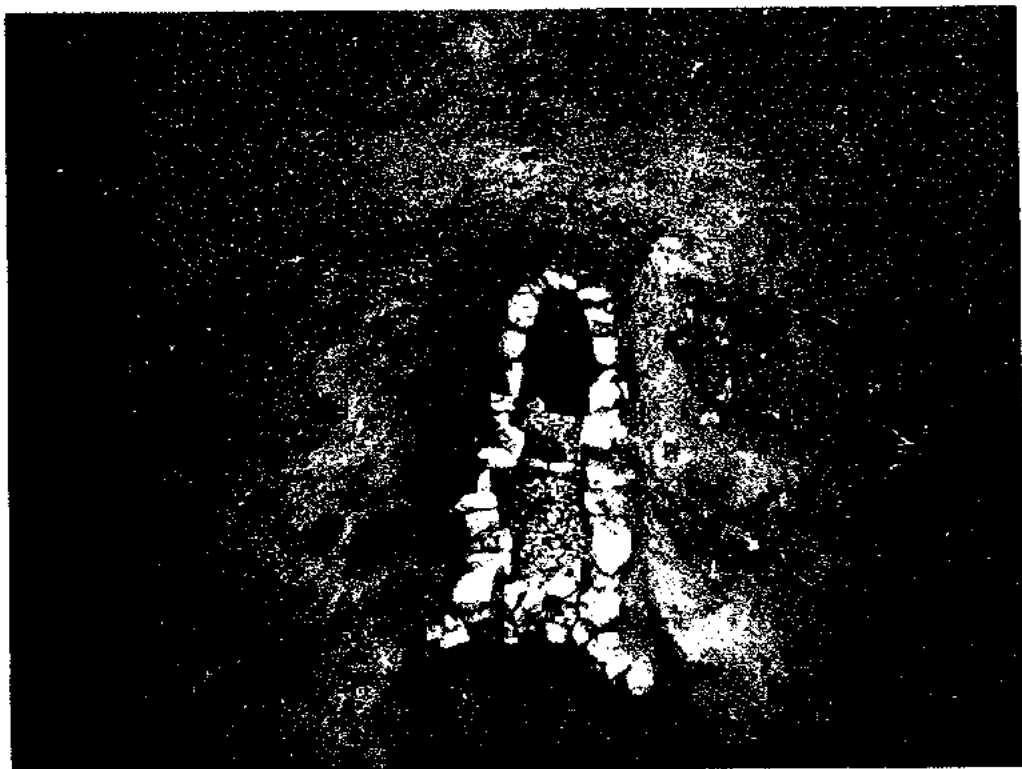




(1) 13号墳全景



(2) 14号墳全景

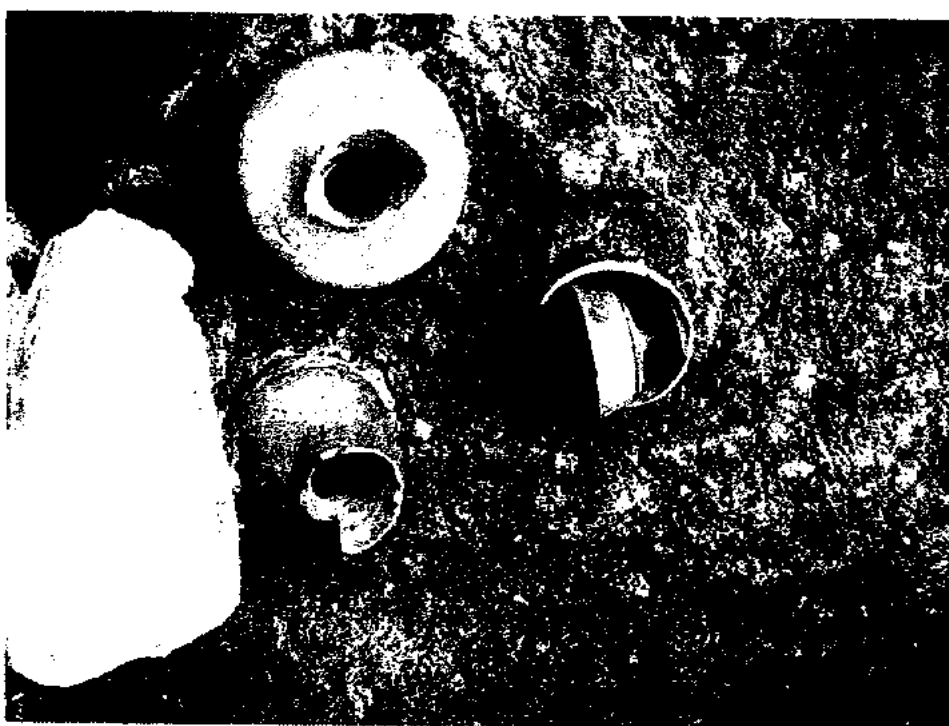


上 15号墳全景

下 15号墳前室遺物出土状況



(1) 16号墳全景



(2) 16号墳墓道遺物出土状況



(1) 17号填全貌



(2) 18号填全貌

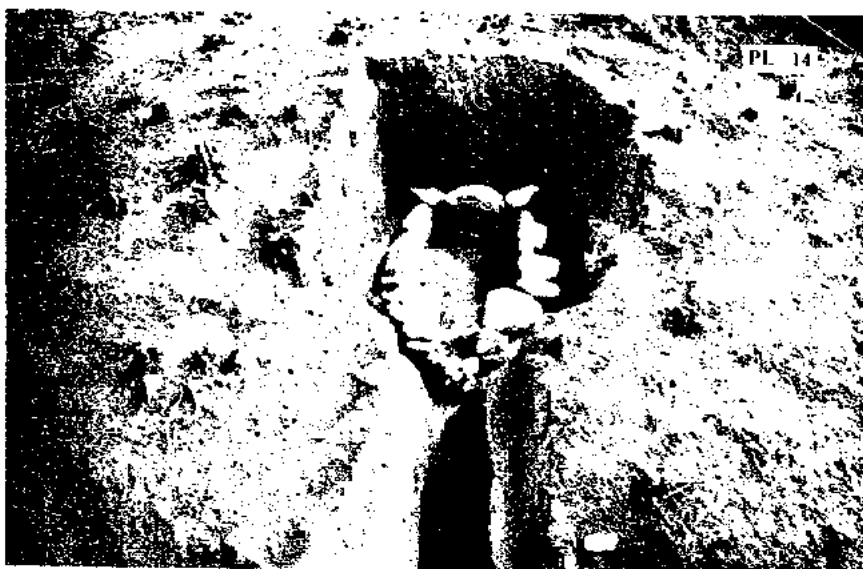


(3) 19号填全貌



(4) 20号填全貌

(1) 21号墳全景



(2) 22号墳全景



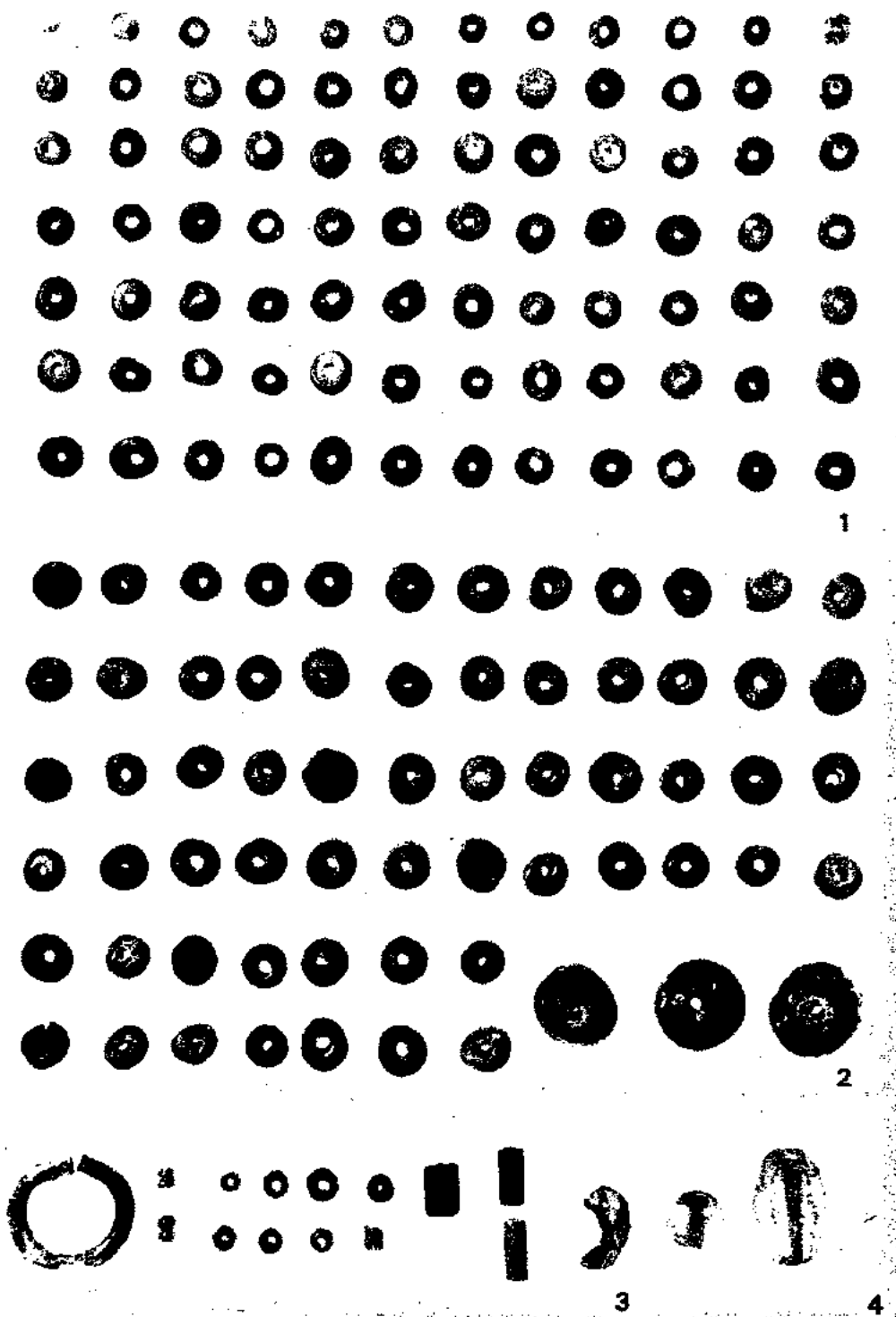
(3) 23号墳全景





1号墳出土 1・2号墳出土装身具・金銅製品・鉄器

- | | | | |
|---------|----------|----------|------------|
| (1) 金 環 | (2) 大刀装具 | (3) 玉 類 | (4) 大刀しとど目 |
| (5) 奏 玉 | (6) 金銅具片 | (7) 不明鉄器 | (8) 鉄 鏃 |



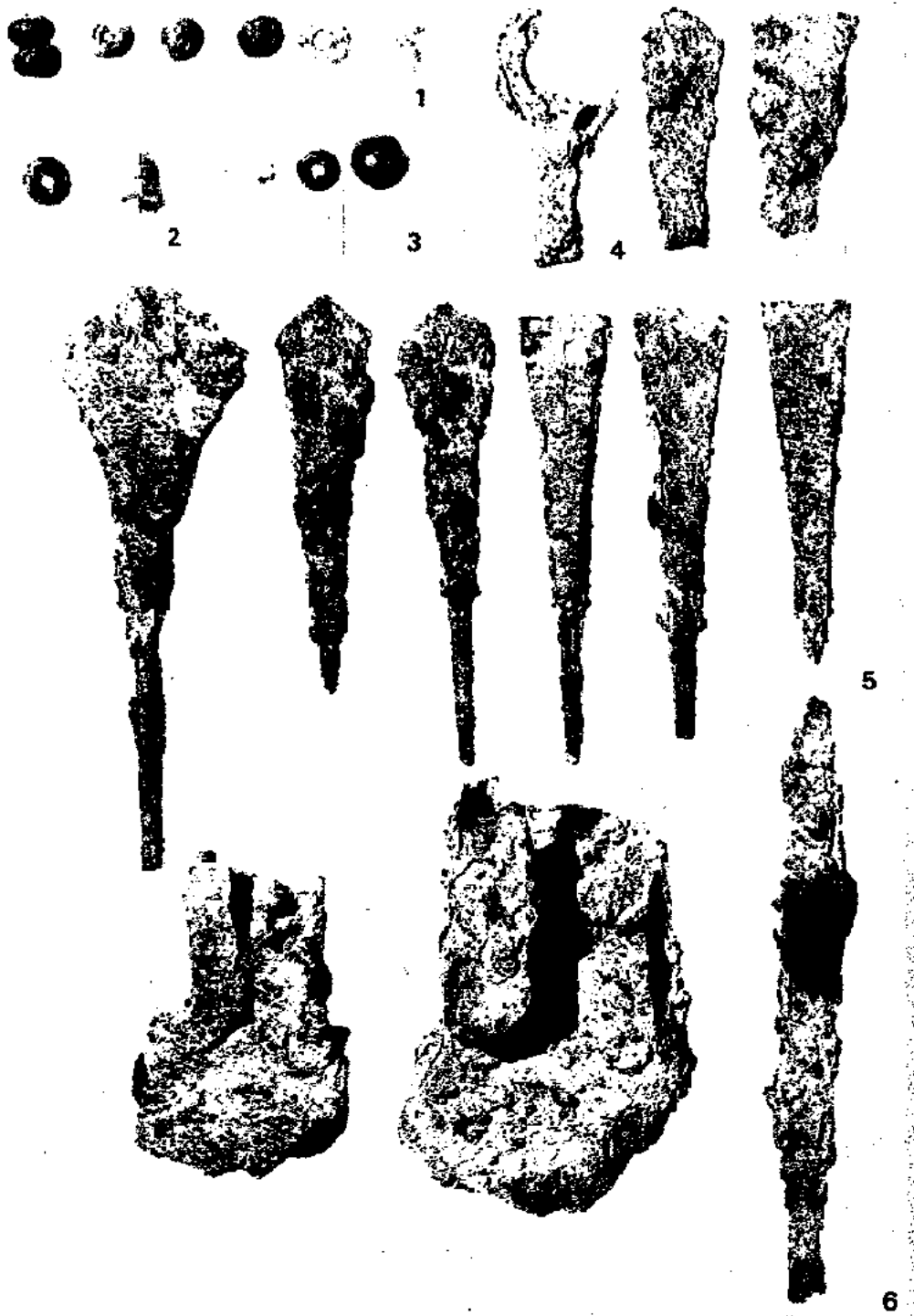
4号墳出土装身具

(1) ガラス丸玉

(2) 土玉

(3) 金環・ガラス小玉・管玉・勾玉

(4) 水晶製丸玉・切子玉



各古墳出土装身具・鉄器

- | | | |
|--------------|--------------|----------------|
| (1) 12号墳出土玉類 | (2) 13号墳出土玉類 | (3) 23号墳出土玉類 |
| (4) 15号墳出土簪 | (5) 15号墳出土鉄鏃 | (6) 22号墳出土鉄斧・鉞 |



202



204



203



206



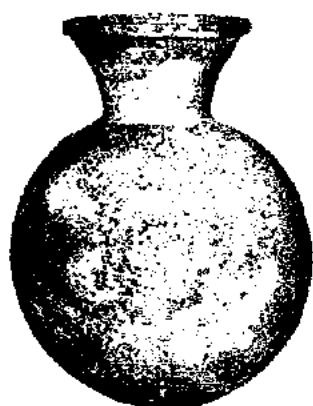
205



401



402



1201



1202



1302



1203



1301



1401

12・13・14号墳出土須恵器



1501



1502



1503



1504



1505



1506

15号墳出土須恵器



1507



1508



1509



1510



1512



1517



1513



1514



1518



1515



1516



1519

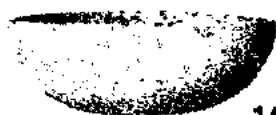
15号墳出土須恵器・土師器



1601



1602



1607



1701



1702



1704



1706



1709



1605



1606



1707



1708

16・17号墳出土須恵器



1802



1806



1803



1807



1805



1808



1901



1809



2001



2002

18・19・20号墳出土須恵器



2004



2005



2006



2007



2009



2008



2010



2011



2012

20号墳出土須恵器・土師器



2101



2201



2202



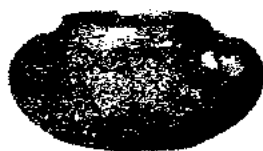
2204



2205



2206



2209



2210



2212



2211



2213



2214



2215



2216



2217



2218



2221



2222



2219



2223



2220

22号墳出土須恵器・土師器



2301



2304



2302



2305



2303

23号墳出土須恵器

宗像町文化財調査報告書 第1集

昭和54年 3 月31日

発 行 宗 像 町 教 育 委 員 会

福岡県宗像郡宗像町東郷

印 刷 釜 瀬 印 刷

福岡県宗像郡宗像町桶元

宗像町中央公民館図書室